

**たくさんのご応募
ありがとうございます！**

応募総数	255 作品
入賞	44 作品
小説・評論	3 編
詩	7 編
短歌	10 作品 70 首
俳句	13 作品 91 句
川柳	8 作品 56 句
エッセイ	3 編
グリーン賞	7 作品
小説・評論	詩 短歌 俳句

**をる
す
旅**
文化
文

▶ ▶ ▶
ブン
の

はら
わい
ない



あきた県民文化芸術祭 2019
あきたの文芸第 52 集
入賞作品集
2019 年 11 月
発行・秋田県（非売品）

photo: 齋藤大悟「映える」2011 Saito Daigo ©
design: office ttt 2016 © araya.jp

あきたの文芸第52集

あきた県民文化芸術祭2019 あきたの文芸第52集 入賞作品集

け	今日も甲高い笑い声が雲の	も似たようなことを話してく	そう言えば、漁師だった祖	いると思うこともある。	いるばかりでなく、時には笑	この空を毎日見上げる私には	悲しく魂を悩ます場所だと呟	濡れていた。「憾むが如し」と	俳聖が辿り着いた北限の地
---	--------------	---------------	--------------	-------------	---------------	---------------	---------------	----------------	--------------

「あきたの文芸」

第五十二集



あきたの文芸 第52集 目次

●小説・評論

奨励賞
入選
グリーン賞

夢のごとく
坂本愛子
阿部萌絵子
稼農桂子
古川善六

●詩

奨励賞
奨励賞
奨励賞
入選
グリーン賞

星のこりの刻空
何処へ
高橋岑夫
佐藤宏一
工藤美咲
北村紗奈
村上呉味
岩澤類パブロ
金万和
小林康子
小松春美
鈴木修一
青木帆花

●短歌

最優秀賞
奨励賞
奨励賞
奨励賞
入選
グリーン賞

夏の尾山の気
荒びゆく庭に
石の階
沢田欣之
石井美智子
工藤美咲
堀内和佐
鈴木直子
鈴々木鏡子
佐々木義幸
竹下氣平
三浦善隆
浅利繁雄
菊地英雄

●俳句

最優秀賞
奨励賞
奨励賞
入選

山の日の
太子の堂
ジオパークの里

グリーン賞

臼井道隆
土谷敏雄
舟山つぐみ
片倉弓
村田優衣

山崎勝重
宮本秀峰
田村陽子

石井美智子
佐々木成
佐々木豊
松井憲一
秋野護
齋藤みどり

●川柳

最優秀賞
奨励賞
奨励賞
奨励賞
入選

心の軌跡
兄弟愛
太陽と月
親と子

澤田幸代
田村美穂子

近藤桃春

菅原浩洋
荒木小菊
佐藤啓子
大滝静
佐藤明子

●エッセイ

最優秀賞
奨励賞
奨励賞

プリンセスの王冠
ゆきしんしん
ねえ、サンフラワー

蓬田真弓
鈴木護
豊葦穂

●最優秀賞受賞のことば

●選 評

小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ
-------	---	----	----	----	------

六郷博志
前田勉
加藤枝
熊谷尚
小松隆義
野口千恵子

石黒みどり
大八木敦彦
菅原恵子
岩谷塵外
長谷川酔月
澤井範夫

渡辺沙才り
堀江京子
打矢仁
和田三鳩枝
高橋三鳩枝
中尾信一

●あきた県民文化芸術祭2019「あきたの文芸」応募状況

●あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名

小說・評論

小説・評論

奨励賞 夢のじゅく

大館市 古川 善 六

一

冷暖房テレビ冷蔵庫完備。三食昼寝、監視付き。ここは十一階、実に見晴らしのいい病室だ。街を囲むように遠くの山々が、鈍いあかね色の世界で迫り下りてくるようだ。ブラインド内蔵の大窓から見える街路樹は、まだ緑が濃い。光と雲、そして空の青が秋を感じさせてくれる。

「成田さん。入院案内と治療計画書のコピーです。……何ですか。きれい」

「昔、飲み屋で女を口説く小道具さ」

「梅の花ね。白い花が咲いている。白梅だ。」

「ティッシュで作ったんですか」

「そうだよ」

「器用ですね。頂戴な」

看護師はベテランで、言葉掛けが旨い上に褒め上手だ。

成田は退屈な時間を、どう過ごしたらいいか考えていた。ベッドに胡坐をかき、テーブル上に白いこよりを何本か作っている。入院して最初の行動が、梅の花作りになってしまった。これで看護師達の興味を引いたかな。何年かぶりで作ったが、出来が悪い。自分でも思った。病衣姿で、小柄だけど肩幅のごつい老人が物静かに紙をちぎり、こよりで白い花を作っている様子は、重い病人に見え弱々しく感じられる。

成田は愚痴をこぼした。（まいったなあ。なんで俺が肺ガンなんだよ）四ヶ月ほど前にクモ膜下出血で倒れ、H病院に入院。三週間で退院出来た。医者のお話だと、三人に二人は何らかの障害が残り、社会復帰が出来ない。何の障害も残らず元気に退院、社会復帰可能な人は一割たらずの確率だ。（俺は強運の持ち主だ。俺の勝ちさ。後遺症が全くない。第二の人生を拾った）脳卒中集中治療室に二週間も居たときは、いろいろなチューブや管が巻き付いていた。三週目からは一般病棟に移り、リハビリや病棟廊下の散策。（現場ではどんなに短い工期だっ

て、段取り良く納めてきた。クモ膜下出血だって短期決戦で俺の勝ちさ）寝る前に、頭はスッキリ手足はバンバンと、自分に暗示を掛けて寝た。医者はカテーテル手術でのコイル塞栓は完璧だと、太鼓判を押してくれた。もう完治したと勘違いをしている。成田はH病院の退院後の日々を思い出している。口は動いているが声は出していない。

まいったなあ。女房の奴、家に入っていくなり首根っこにしがみ付き「よく生きて帰れたね。二週もの間、最悪の準備も考えました。おちおち寝れませんでした」しゃくり泣きされたつけ。生温かい涙が俺の首を伝わった。俺の方が驚いたよ。一瞬息が止まった。

「わかったよ。……顔を洗って来い」
いい年齢とこいて、しがみ付いて。誰にも見られていないはずだが、照れくさかった。

何で脳神経外科に入院していて、肺のレントゲンを撮ったんだ。女房の奴が「咳が気になるん」と言ったからか。「おそらく肺ガンの疑いがあります。まずはクモ膜下出血の治療が最優先です。肺の方は後でしっかり検査してもらって下さい」なんて気軽に言ってくれるよ。みんなやめろってか。病院にいる間はしょうが

ない。我慢してやるか。退院したからには今まで通り。(雨の降らない日があっても、俺から酒とタバコが切れた日はないさ) てなもんだ。俺の世界さ。……それにしても、まいったよ。肺の検査に二ヶ月近くもかかったとは。長かった。

大きな窓から暖かく明るい陽射しが強い。

朝、目覚めは重かった。四人部屋に一人は静か過ぎたのか、かえって寝れなかった。

「成田さん。検温して下さい。今日からお友達が来ますよ」

看護師が声をかけてくれ、一日が始まる。病棟の廊下を散歩。朝食、そして一番風呂。後は昼寝のみ。一日が長い。

「吉川です。よろしく願います」

リュックに着替えと洗面具の軽い持ち込みで、十日間ほどの入院。化学療法での治療らしい。入院二日目に二種類の抗ガン剤投与。一週間後に一種類の抗ガン剤投与、もう四回目の入院治療となる。

「成田さん、どの位の入院ですか」

「なに、昨日来たばかりだ。二ヶ月ほどの入

院だってよ。まいったよ。肺ガンだって。四だってよ」

「そうですか。私もステージⅣです」

二人の会話は続いた。

吉川はタバコを吸わないし、酒も飲まない。成田より五、六歳は若い。最初は言葉が出なくなり、個人病院に駆け込んで〇病院に回された。結果は肺ガン。脳に転移していて治療が難しいと診断された。その後入院し、放射線で脳のガン細胞を小さくする事に専念した。頭髪は抜け、激しい嘔吐のため食欲増進剤を飲んで、無理やり食事をとった。顔はむくみ体重は10kgも増えた。放射線治療はこれ以上出来ず、化学療法に切り替え何とか吐き気も小さくなって、元気に立ち回り体力が付いて来たようだ。病人と思えない陽気さが見える。

「成田さん。仕事は何してたんですか」

「俺は鳶だ。橋梁鳶で大きな橋ばかり架けてきた。日本中歩いたよ」

成田は話を聞いてくれる相手が出来て、元気が出たのか口が動いた。鳶仲間の刺青で、背中に般若を彫っている奴が、顔まで般若に似て来た。と、からかった。俺ら鳶は仕事柄事故もあ

る。だから石橋を叩いて渡る慎重さが要求される。橋桁の下は海か川だ。それも目のくらむ高さ、百m、二百m以上は当たり前。

高学歴の現場監督とはよく喧嘩したもんだ。

確か山形県新庄の仁田山橋だった、長さ八十mの橋が5cmの伸びで入らないと、事務所で騒いでいるから、俺にまかせろと言ってやった。右岸の桁座のナットを遊ばせ、桁を中央で吊り、遊びを作った。左岸で送りジャッキを使い、調整すると入るんだ。いくら大卒だとか、頭がいいからと言ったって、現場の事は、職人に聞けと言ってやったもんだ。

ケーブル張りで良く山に入った。太いワイヤロープ扱いなどは、ビニール紐みたいに自由自在だ。山菜なんかは取り放題。口が良く滑る。

成田がサイドテーブルの引き出しから、二ツ折りで黒皮の財布を出した。良く使いこなしている。その財布から古いテレホンカードを五枚ほど出し、吉川に手渡しして見せる。

「凄いですね。この写真が手掛けた橋、長くて高いですね。工事現場の写真はテレホンカードにするのも流行りましたね」

「それは確か、群馬県の花山山橋橋だった。高さ八十から九十はあった。長さは百十三mだっ

たはず」

得意気だ。よほど橋梁鷹を自慢するが、一人親方として渡り歩く職人のようだ。親方として手腕を振るった仕事もあるだろうが、各現場の雇われ職人のような話もある。取り仕切ったのと、手伝いでは大きな違いだが、話している本人が心地良さそうだ。

「成田さん。お名前と生年月日を教えて下さい」

「ナリタタケヒコ。昭和二十五年四月二日。

六十八歳、無職です」

「はい、ありがとうございます。今日奥さんはまだ来てないの」

「まだだ。姉さん女房の喜子^{よしこ}か。仙台に啓子が居るけど、どっちの事かな」

「その元気があれば、今日は大丈夫です。始めますよ」

この日の午後、初めての化学療法が始まった。吐き気防止剤から点滴され、抗ガン剤のカルボプラチン、アブラキサンと続いた。四時間ほどかかった。まず滴下がゆっくりだ。抗ガン剤の取扱いは、薬品が一滴でも肌に触れない対策。防護メガネ、不織ペーパー白衣、オペ

用ゴム手袋を使用し、薬品ごとに取替する。抗

ガン剤の入替には上司のチェックを受け許可される。患者は、ミスのない作業手順に安心するが、三度も中断させてしまった。小便がしたくなり、その度に看護師を呼んで、点滴のバルブを閉じてもらう。

「まいったよ。年齢をとったもんだ。近くてたまらん」

点滴中の長い時間に、寝返りも打てずいろいろ考えてみたが、来週の点滴まで長く暇だ。やる事がない。テレビばかり見ても飽きてしまう。本を読むのは面倒くさい。病院内の散歩も嫌いだ。変な病気でも移されそうで心配で怖い。結局何の考えもまとまらない。女房が来たらテレビカードを二、三枚買ってもらおうと思う武彦だ。

二

暑さが肌にまとわりつく駅で、客たちにはホームを渡る風が心地良い。空は青く澄みきって高い。まるで秋の色と風かと思えるような、そんな日に成田夫婦は〇駅にいた。

「おい。これから毎週通うのか」

「そうです。毎週で検査。問診と相談が続きます。先生にも言われたでしょう」

病院の診察予約が十一時だから、九時の列車に乘らないと間に合わない。病院通いも一日がかりだ。喜子は武彦を一人にさせるわけにはいかない。クモ膜下出血の前歴があるだけに、二度目の社会復帰など考えられない。それに何をやらかすか目の離せない駄々子と思っている。

電車は三両の各駅停車で、長イスだ。少ない客たちは、思い思いの場所と荷物置場を確保して座る。車内はガラ空きだ。スマートフォンをいじり出す客たち。（近頃の若者は携帯電話がないと何も出来ないのか。ゲームばかりやって）と僻む武彦だ。喜子もスマートフォンを使いこなしている。

「おい。止める。飯がみんな甘い」

喜子は少しむつとした。エコバッグからペットボトルの茶を出し、武彦に飲めとばかりに押しつける。

「何言っているんです。先生にあればと言われてでしょう。減塩減量、運動、禁煙禁酒です。それに娘からは減塩食品、おやつや料理本まで

送ってもらっているでしょう。皆が心配しているんです。娘たちの言葉は絶対です」

喜子は語気を強めた。周りの人がスマートフォンの手を止め、居眠りしている人は目を覚ましたように、夫婦の言い争いに聞き耳を立てている。

「馬鹿野郎。食欲が出ないし、まずいよ」

「駄目です。お父さんの好きにさせたら、何回死ぬ思いをさせられるかわかりません。絶対に駄目です」

喜子は引き下がるつもりはない。つい二ヶ月ほど前にクモ膜下出血で倒れてから（後悔したくない）その一念で、健康を害する食と行動はさせないと決心していた。どうも隠れてタバコを吸っているようだ。止めさせなくては、どんなに憎まれてもだ。

若い時から橋梁鳶として飛び廻り、日本中を歩いて来た。大きな橋を架けて来たと言慢するが、大きな怪我を度々やらかした。三十代後半に首の骨を折る大怪我で、まるっと三ヶ月も入院したことがある。福島県で事故に遭ったが、地元〇市の労災病院に転院させてもらい、治療を受けた。地元に戻れたから、本人はいたって暢気なものだ。痛い痛いと言いで、一年近くも

通院した。その間休業補償と療養費用はもらえたが、充分とは言えなかった。会社からは障害補償金などない。退院時に見舞金が出ただけ。取る金は大きいが出金も大きかった。

二十八歳で中古住宅を購入、二人の娘も高校を出し嫁がせた。孫も出来た。でも五十八歳で仕事を辞めてしまい年金を貰えるまでの二年間は辛かった。毎日が日曜日で、大工の真似事やら、川で魚釣り、山で山菜取りなどするが、毎日家に居るので気まずく、喜子が働きに出た。午前中のパートでも気持ちが出来た。

好き勝手放題な武彦がクモ膜下出血で倒れてから、少し変わった気がする。「俺は運がいい。これからの人生、好き勝手に楽しく生きる」と言うが、三途の川岸まで行って来た人が、時々遺言めいた言葉を漏らす。残す財産などあるはずがない。

さんざん悪態を吐く喜子だが、近所の評判はいい。世話好きの働き者と言われている。背丈はないが腕っ節は強く、指の節々も太い。じつとしていられない気性のようだ。村の男連中が言うには、小煩く頭が良く回るが、色気が全く見られない。と噂している。

武彦は喜子に体を寄せ、向かいの女性に聞かれないように、耳元で話しかけた。

「おい。H病院にどの位払った」

「それほどでもないです」

「百万位はいったらう」

「限度額適用認定を受けてますから」

「何だ、それは」

武彦は知らなかった。喜子とてH病院の事務員に勧められ知った。保険の窓口に申請手続、支払いを減らした。高額治療費のときは先に支払い、後で還付を受ける手続きも取っている。

「今まで高い税金を払っていたから、その分の治療費が安くなったと思ってます。いい制度があるのだから、使わないと損です。…：それと酒タバコ、徳口利、灰皿類すべて処分しましたから」

何やらどや顔で、得意気だ。顔がほころんでいる。喜子は列車の揺れに合わせるように武彦に寄りかかり、ちよっかいを出している。武彦は、はっきりと答えてくれない喜子に苛立った。

「もう金がないだろう」

「はい。大金はないけど、小金ならありますよ。借金がないから、何とか成ります」

「そうか」

武彦には少し気まずい時が流れた。車窓からは直に黄金色になる稲穂が揺れ、小さな緑の波を作る。田圃に植えられたリングの木々は、七、八年は経っただろう。太い幹で葉を茂らせ、まだ青い実を膨らませ、何やら華やいで見える。

さすがH病院は大きい。玄関を入ると五階までの吹き抜けで、屋根から光が差し込んでいゝる。中央待合ホールが広い。人がいっぱいだ。奥にはコーヒーショップがあり、もう客がモーニングタイムのようだ。

「おい。入院のときは気付かなかったが、外来てこんな人が集まるのか」

「何見てたんです。近隣の市町村からも集まってくるんです。私達みたいに」

「まるで東京駅の人だかりだ」

「誰だつて薬にも絶る思いで、お金をかけても健康を取り戻したいと来ているのよ。お父さんも自覚して下さい」

どうも武彦本人は病人と思っていないようだ。見学にでも来た様に受け取られた。各外来待合所は廊下までいっぱいだ。初めて来たから

驚いているのだ。どの病院でも患者でいっぱいだ。

「今日は肺ガンの疑いがあるんで、検査に来たんですよ」

「大丈夫。心配するなつて」

「今日は入院ですよ」

「分かっているつて。大丈夫だから」

成田夫婦はナースステーションで受け付けを済ませ、病室に入った。

「おい。テレビカードは」

「一晩くらい我慢しなさいな」

「退屈だよ」

「ここは病院です。寝てなさい。飲み物はここに入れてますから」

「俺は病人かよ」

「そうです」

不服そうな顔をする武彦に甘い顔を見せられない。可愛そうだが、あえて小遣いを渡さないし、テレビカードだつて換金される恐れがある。昔、病院を抜け出し町でタバコを吸った料もある。さすがに酒は飲まないだろうが、心配は残る。

「お父さん。明日の昼前には迎えに来ます」

「……」

喜子は帰った。話し相手も居ない。テレビすら見られない。昼飯は食えない。検査治療についてのQ & Aも読んだ。早過ぎたか。

検査は十一時半過ぎより始まった。吸入器とスプレーで喉に麻酔をかけた。鎮静剤が注射され、気管支鏡ファイバースコープが口から挿入され内腔を観察された。喉詰まりと緊張で息苦しい。採取された組織細胞と分泌物は、検体として病理に回された。

検査後、最低でも二時間は安静にする必要があった。睡さえ飲み込めない状態が続く。一ヶ月半も酒とタバコを止めているから、よほど麻酔が効いたのか眠り続けた。

「成田さん。夕食ですよ」

体は起きたのだが、声が出ない。喉がヒリヒリする。ペットボトルの水を飲むとしたが、口から零れ毛布を濡らした。まだ痺れている。水さえ喉を通らないのだから、晩飯を食ったら喉詰まりさせそうで怖い。食事には手を出さず、又眠った。本人も呆れるほど無意識で眠れた。

三十坪ばかりの家庭菜園で、春キャベツの栽

培中だ。背負った噴霧器のレバーを上下させて、殺虫剤散布をしている。葉の裏に潜んでいるアオムシが葉を食べる。みるみると葉脈だけが残り、ギザギザの穴だらけ。まるで絵本に出てくるはらぺこあおむしの様だ。益々葉をかけるが穴は塞がらない。アオムシもみつからない。活発に虫食んでいる。

武彦は夢を見ていたのか。小便がしたく目を覚ました。白い小便器に尿道をふり立たせ、小水を出そうとするが、小便器の中にアオムシが四匹も見える。便器をよじ登りかけているのが分かる。チョロチョロのアンモニア水を浴びせ、剥ぎ取ろうとしたが剥がれない。残尿感があつたが、小便器から離れた。自動センサーが水を流し、アオムシは水流の勢いに押し下げられ小皿の裏に排出された。

それにしてもおかしい。小便器にアオムシがいるはずない。何やら息苦しい。頭が重く足も重い。ベッドまで、やっと戻った。

「お父さん。迎えに来ましたよ」

喜子の声で目を覚ました武彦は、昨日より何も食っていない。少し不機嫌だ。昨夜の夢の話をしたかったが、記憶がおぼろげで話の筋が思

い出せない。

「家の方はどうだ」

「二晩では何もありません。それより、検査の方はどうでした」

「麻酔が効き過ぎて、ずっと眠ってたよ。大丈夫だった」

武彦は着替えの手を休めず笑顔を作った。喜子は同室の人に挨拶をしている。(そんなのはいいから、早く帰ろう)先に病室を出て行く。喜子はナースステーションに寄り、看護師らにも退院の声をかけをしている。武彦はもうエレベーターの前で待っていた。

H病院の玄関を出ると、市内循環バス停がある。乗り込むとき、降りるとき、武彦は喜子の後を歩き離れない。H駅でも改札を通るとき、電車に乗るとき、喜子の後を歩く。いつもと違う、覚束無い足取りだ。

「おい。来週結果を聞きに来て、今度は別の検査です。と言われるのか。参るよ。一遍に済ませてくれよな」

電車内で愚痴をこぼす武彦には構わず、喜子は診療明細書を広げてチラつかせたが、見ていない。

「これから、すべて私が管理します」

「管理って何だよ」

「どこへ行くにも一緒です。今日から体力作りの散歩をします」

「散歩はいいが、小遣いはくれ」

「駄目です。タバコと酒は信用出来ません。娘にもきつく言われてます。タバコを吸う人とも仲良くしないで下さい。一本貰ってでも吸いたくなるでしょう」

「そうだな。まだ吸いたい」

「まだまだ駄目です」

喜子は強い意志を表わした。食べ過ぎだと言え、余計に食べる。無理すると言え、大丈夫だからとやる。私の話などまったく聞かない。肺ガンと決まれば少しは変わってくれるかもしれない。決して望んでいる訳ではないが、クモ膜下の治療中に、脳神経外科の先生に予告されている。「成田さんは肺ガンと思います。覚悟して下さい」割と早くから聞いていたが、武彦には話していなかった。まだ微かな望みをもっていた。

今日は朝から雨だ。成田夫婦は検査結果を聞きにH病院へ向かった。武彦は車中で腕組みし

たまま、眠って小さな寝息を立てている。喜子は車窓に流れる雨の田園風景を眺めながら、北国らしく灰色の空で重く感じている。まだ初秋だというのに寒気さえ感じられる。田圃や山々の緑、リンゴ畑、家々の景色。ここ二ヶ月ほど通っているが何も変化していない様に見える。しかし色や小さな形が変化しているはず。喜子も変わったか。迫り来る時の流れを素直に受け止め、他人様より少しだけ短い時が夫に来るだろう。その時をどう過ごせばいいのか。覚悟など出来ない。一ヶ月前は、はらはらしながらの看病。今はただ不安だけ。この先戦いの日々が来るのだろうか。思い詰めても始まらない事は分かっているが、思い込んでしまう。

まだ肺ガンと決まっていないうし、宣告を受けた訳でもない。医学が進歩し、ガンなど怖くない。誰しもが罹る病気になっている。例えガンだとしても、きつと治り長生き出来る人だから。今までだって、何度も生き返った人だから、今度も大丈夫だ。と思いたい。

喜子は成るように成るさと開き直りの気持ちで笑顔を作った。

若い頃、夫が出張から帰ってくる日はうれしかった。子供たちに気の利かない小物や菓子を

土産に帰って来た。愛してくれた。寝るときなど、夫は手を布団の中に入れて来るから、握り返してやると安心したかのように、ほろ酔いのいびきを立てた。

「浮気心なし。サラ金からの請求なし」何だかんだと文句を言いながら、憎めない。

「ご先祖様、いつも炊き立ての湯気の立ちこめる御飯を供えてます。仏様、神様を大事にしています。早く連れて行かないで下さい。」

想像はしたくないが、思い浮かぶその時が喜子には悲しかった。

車窓に降り続く雨は粗水か。水滴は止まる事なく流れては消える。

成田夫婦は気管支鏡検査をしてくれた、女医からの検査説明を聞きに来た。診察室の机には大きなモニターとキーボード、脇にはプリンターがある。カルテらしい紙は見当たらない。すべて画面を見て、キーボードをたたきながらの説明が始まった。

「成田さん。やっぱり肺ガンです。ステージⅣです。間質性肺炎が認められ、転移も確認出来ました」

成田夫婦は聞きのがすまいと、身を乗り出

し、丸イスを前に引き出す。武彦は（あと何年生きられるのか。俺は死ぬのか）と瞬時に浮かんだ。しかし。

「先生、間質性肺炎って何ですか」

武彦は冷静であるかのように、医者目を凝視し、思いとは違う質問をした。

「肺をスポンジに例えるなら、スポンジが硬くなっている状態と思って下さい」

「先生、主人の治療はどうなります」

喜子は聞いた。これからどうなるのだ。どんな治療をやり、ガンがどう変化し、何年後に答えが出るのか。先走った思いが声に出てしまった。

「来週PET-CTを撮りましょう」

武彦が顔をしかめた。女医だから優しいとは限らない。患者の顔を見て話してくれない。又検査か。今度の検査は放射性薬剤を投与し、がん細胞との結合状態を画像化する。骨に転移していないかを全身のCT検査で見る。これで又二週間は延びる。いつになったら治療が始まるのだ。何年先まで治療して、何年先に寿命か。五年や十年は持ちこたえられるか、不安でたまらない。これが本音だ。（検査、また検査といくら稼ぐつもりだ）と思ったが何も言えない。

診察室を出るとき、フラ付いた。体中の血が滞って来たか。

PET検査から一週間後、成田夫婦は待合室で長いこと待たされていた。

「成田さん。五番にお入り下さい」

武彦は入口のドアを三回、いや四回ノックした。今日は死の宣告を受ける気持ちだから四の数になったのだろう。単純過ぎる考えかもしれないが、精一杯の冷静さを装い、男気を見せたかった。

今日の先生は、最初に問診をしてくれた主治医だ。呼吸器内科の主任で、淡々と話す。

診断は右上葉肺ガン。左に転移、リンパ節にも転移。間質性肺炎のため積極的治療は危険性が高い。外科的切除、放射線治療が出来ない。化学療法のみ、抗ガン剤投与を三週にわたり実施。これを四回繰り返すと、治療計画案まで説明してくれた。

（大した事ないな。注射だけか。四ヶ月近くかかるのか。毎回肺炎だ。ガンが転移しているなどと驚かすが、俺に難しい事を言っても分からない。医者に任せる。信じて治療すれば治るだろう。まだまだ死なないだろう）

武彦は一安心のようだ。が、喜子は違った。やっぱりガンだったか。この先何ヶ月もかかる治療への覚悟を決めるしかなかった。

「成田さん。一生付き合う病気です。完全には治りません。ガンの進行を遅くさせる事は出来ます。やってみなければ分かりません。さて、どこで治療を受けますか」

「先生、ここでは出来ないですか」

「奥さん、そうじゃなく、通うのが大変でしょう。途中で具合が悪くなっても、対応出来ないでしょう」

先生の言う通りだ。喜子はこれから先を考えた。通院に片道約二時間、これから冬を迎える。列車は遅れ、吹雪で行けない時もあるだろう。ホームで待っている間に武彦に風邪でも引かれたら、大事になる。喜子は聞いた。

「〇病院に転院も可能でしょうか」

「大丈夫ですよ」

思いがけない展開になって来た。即答を避け、家族と相談する事で来週まで、返事を待ってもらう事にした。先生の方も、紹介状やデータ画像コピーなどに時間がかかると言う。都合がいい。喜子は体が軽くなったのを感じていた。

待合室に戻った二人は、ひそひそ話をした。

「お父さん。病院を代えてもらいますか」

「そうだな。先生に対して筋が通らないだろう。せつかくここまで進んで来たのに」

武彦は隣に聞こえないように、声を落として答えた。

帰路の車中で寝る武彦を余所目に、喜子は長い時間に考えた。夫が筋だの義理だの言い出すときは、いい格好しいの男に成りたがる。これはじつくりと、真綿で締めて行くしかない。臍を曲げさせないように。

通院だけで二ヶ月も過ぎ、田圃では稲刈りが始まっている。自然乾燥の稲架けが見える。リング畑では鈴なりの実の下に銀色のシートが敷かれ、陽は上と下から照らし実は赤く濃い色を付ける。

次の治療方針の相談に行く前に、娘と実兄から電話がかかって来た。武彦は治療を受けるべき病院について説得されて居た。娘は「地元 of 病院に通えるなら気軽ににお見舞い出来るね。子供たちもじじに会えると喜んでるよ」と、転院させるつもりで孫を引き合いに出して来る。

実兄は今までの経過から「そうか。化学療法
だけなら〇病院の方がいいよ。転院したら喜子
も助かるだろうし。あの世とやらへは俺の方が
先だからな。順番を守れよ」憎まれ口を叩く実
兄らしい激励のしかただ。

武彦はH病院へ行く二日前に決心した。

「喜子、今度行ったら紹介状を貰おうな」

「そうですね。近い方が安心ですね」

喜子は驚いた。「おい」と呼ばれない事にぎ
くりとした。転院を決めた事に小躍りしたい気
分だ。鼻唄が出た。早速H病院の主治医に電話
を掛け、転院の書類を貰いに行く約束を取り付
けた。

「先生の言って下さる様に、〇病院に移りたい
です。手続きの方をお願いします」

武彦は自分の言葉で話した。主治医は心良く
了解してくれた。紹介状とCT画像、検査デー
タ等がまだまとまって居ないので、出来しだい
郵送する。〇病院にも連絡し、初診日の予約ま
で知らせてくれる事になった。

喜子にとっては、何から何まで思い通りに
なってきた。〇病院がH病院と提携していたか
らこそ、融通されたようで有り難い事だ。付き

添いの身としては、近い方がいい。毎週毎週こ
れから何年かかるか。家で異変があっても、駆
け付ける病院が近所に決まった事に安心した。
財布を握る身としても嬉しい。

もう十月末だというのに、今年はまだ暑い。

紅葉も早い。

成田夫婦はH病院からの紹介状とデータCD
を提出し、〇病院で初診を受けた。この病院も
予約診療だが、待合廊下は患者でいっぱいだ。

担当医は若く三十代に見える。マスクの下か
ら口髭が覗いている。二、三の問診を受け検査
に回された。朝の九時半から始まって、終わっ
たのが午後二時だ。腹も減ったし疲れた。

「成田さん。やっぱり化学療法で頑張ってください
ましょう」

医者はH病院からのデータを確認したのだろ
う。画面はPET-CTの赤色の付いた点を指
し、点滴によって抗ガン剤を投与する旨を説明
してくれた。

「先生。入院させて下さい」

喜子がするように甲高い声を出して、大き
く頭を下げた。

「もちろん、一回目の治療には入院してもらい

ますよ」

「いいえ、四ヶ月でもいいです。入院させて下
さい。治療に専念させて下さい。家に居ると、
タバコを吸う。酒は飲む。体に悪い事ばかりや
ります。どうかお願いします」

喜子は必死に願った。医者は困った顔で、目
が泳いでいる。席を立ち、診療室奥で看護師と
何やら相談している。武彦には話の流れが理解
出来ていない。（俺はそんなに悪いのか。入院
が長くなるのか。医者が何で困っている。治療
が難しいのか。そんなはずはない）少しだけ不
安になった。

「成田さん。酒タバコは禁止です。一緒に頑張
りましょう」

医者は親しみを込めて、優しく武彦の両肩に
手を置き目で笑ったようだ。そして喜子の方を
向き領いた。

こうして武彦の入院がやっと決まった。治
療方法も決まり安心した武彦は「地元の病院
じゃ、しょうがないか。我慢してやるか」と
捨て台詞を吐いた。入院は二ヶ月まで。それ以
上は一度退院してから、又三人で話し合う事
で喜子が納得した。武彦にとっては辛いだろう
が辛抱してもらえない。毎日金魚の糞じゃ

あるまいし、ぶら下がれない。病室で朝から晩まで一緒に居られない。みつともない。年齢を取って来たのだから、落ち付いて治療を受けてほしい。病院から逃げ出したら家に入れてやらないから。喜子は更に強くなった。

三

どうしたのだ。この空間は。混沌として闇夜のごとく、上下がない。どの方角なのかも感じられない。俺はどうしたのだ。病院のベッドで寝ていたはずだ。どこに来てしまったのだ。まるで理解出来ない。揺らぐ液体の中から光らしき点が見える。その点が膨張し大きくなる。お、映画にでも出て来る天国か。エデンの園か。地から水が吹き出し大地を潤している。土の塵が盛り上がり、生き物になった。あの人は誰なのだ。リングの木の下で悶え苦しむ人がいる。体中に巻きついた細く長い蛇が一匹、鎌首を持ち上げて人の顔を舐めている。リングの実が熟し落下した。すぐに花が咲き、実を付ける。又熟し落下。これを四度も繰り返された。俺には神も仏もない。信じてもない。何

でリングの木の下だ。蛇に巻かれている人は誰だ。俺の頭では理解出来ない。誰か教えてくれ。

あれ、又闇になる。光が縮小し消えていく。今度はシャッターが開き光が差し、その奥に小さな窓が見える。部屋に誰かいる。あれ。髪の毛長い中学生らしい女の子が、ベッド脇に座っている。後ろから女の子の髪を梳かしている。浴衣姿は母親か。二人とも笑顔で楽しそうだ。まるで童話の一ページだ。もしかして喜子親子か。お義母さんが長い入院を繰り返していたと言っていたっけ。五年もお義父さんが頑張つて、病院代を続けたとも聞いた。そうか、お義母さんに会わせたくつて、ここへ連れて来たのか。

「お義母さん。喜子はいいい女房ですよ。俺には勿体ない位です。良く尽くしてくれます。いい母親です。二人の娘を大きくし、立派に育てくれ、今では孫が四人も居ます。子煩悩なお義母さんと聞いていたから、子や孫を見せたかったなあ。抱かせてやりたかったなあ。お義母さん、喜子と一緒にた事に感謝してます」窓に向かって大きな声を出し話しかけたが、聞こえないようだ。俺は心の中で強く念じた。

二人には伝わらなかったが、二人の笑顔は俺までが温かくなる。もう七十近い俺が、中学生の喜子を見れるとはな。可愛い。ニキビ顔の元気な子だったんだ。

「ありがとう。お義父さん。お義母さん」

あれ、どうした。俺が瞬きしたのか。以前住んで居たアパートの屋根上だ。二人の愛娘が揃いのワンピースで踊っている。あの格好は当時流行していた、ピンクレディーのUFOだな。確か写真を持っていたはず。長野で橋を架けていた頃で、もう直中古の家に引越が決まった頃だ。自分の部屋が持てるって皆ではしゃいだ。喜子も頑張つて小銭を貯めてくれたよ。ありがとう。手作りのワンピースがお似合いだよ。

おい。雪でも降って来たのか。今度はどこだ。街中を喜子が歩いている。結婚した頃のまだまだ。路地に入った。あれ、質屋の暖簾をくぐった。俺の稼ぎが悪いのか。仕送りだってしてたらう。……そうか、東京にいた頃は半分も仕送り出来てなかったか。まだ若く俺も遊びたい盛りだった。質屋通いだっただとは一度も聞いていない。苦しかったんだ。済まない。

この空間は苦しい。まるで地獄で針の薙に座っているようで痛い。恐ろしい。地上百m以上の橋桁で仕事していても怖さ知らずの俺が、手を震わせている。命綱が欲しい。足場が欲しい。暗黒の液体が動き出し、渦を巻き出した。飲み込まれた。液体の中に沈んで行く。暗く気持ち悪い。吐きたい。胸焼けでもしたように苦しい。口の中が痺れている。髪の毛が抜けていく。顔がむくみ丸くなる。

ああ熱い。ここは南の国、砂漠の中か。熱風だ。喉が渴く。こここの砂山に橋桁の基礎を作るのか。掘るのか。何で重機がないんだ。何で手掘させるんだよ。俺を殺す気か。俺はまだ死ねない。喜子を一人にさせられない。旅行に連れて行くと約束しているんだ。

もしもこの先、俺の肺が悲鳴を上げたら、延命処置などいらない。痛みに耐えてみせるさ。その方が生きている証だ。最後まで醜態をさらし、もがいてやる。未練がましく死ぬまで生きてやる。

あれ。皆の声が聞こえる。「お父さん」「じ

じ」「武」と呼んでいる。遠くから鈴の音が近づいてくる。心地いい音色だ。

今度はお鈴の長く余韻を引く音色に変わった。心休まる響きだ。

混沌とした闇夜は続く。遠くより人の寝息が聞こえる。人の呻き声もする。誰かが歩いている気がする。

四

いい天気で暖かいねと言いたくなる程の快晴だ。高い空は青く、地平線近くの空は薄青白い。山々の稜線には雪が残っていて、水墨画の世界だ。陽射しは強く、屋根の雪を照らし光が屈折する。そこには小さな揺らぎが生まれる。田圃の雪にも陽射しは輝いて目に入る。まるでキラキラと音でも聞いているみたいだ。

そんな春近い日、成田夫婦はスーパーマーケットまで、散歩がてらに空のリュックを背負って来た。たいした買い物ではないが、店内を見て回る。

「喜子、昼はどうする」

「そうね。ご飯は残っているし、チャーハンでどう」

「いいね、卵とネギ、ハムがあるか」

「ネギがないので買います」

こんな何気無い会話が楽しい。武彦は野菜売場にカートを進め、これでいいかとばかりに、一束のネギを差し出して見せる。喜子が頷く。今まで二人で買い物など、ほとんどなかった。夫はいつも車で待ち、コーヒーやジュースを飲み、漫画を見て寝ているのが関の山だった。しかし変わったものだ。亭主関白も丸くなったか。

「俺のリュックにもっと詰めるよ」

「大丈夫なの」

「又治療が始まるまでの、体力作りさ」

○病院に二ヶ月もの入院は無駄にはならなかった。治療から四ヶ月後のCT画像では、原発巣がやや縮小し良好、胸水も減少。それに二ヶ月も入院していたから、肺ガン仲間からは「十一階の主」と呼ばれる様になっていた。誰にでも声を掛ける社交的の老人である。

談話室で患者同士が、病気の自慢話だ。五十代で右半分の肺を切り取った。胃にもガンが見

つかった。抗ガン剤の副作用が辛い。明日は手術だとか。患う話は尽きない。武彦は得意の鳶仲間や現場の話を聞かせてやった。

「お父さん。何か好きなことやったら」

「いいよ。金が掛かるから」

「少し位なら大丈夫ですよ」

毎日でゴロゴロして木の根っ子みたいに動かない。少し邪魔くさい。よくも飽きないでテレビばかり見ているものだ。それも時代劇ばかり。よほど好きなのかリモコンを握って離さない。見掛けは元気な体と気力だ。折角良くなり、本人は治ると信じているが、まだ無理はさせられない。

「お父さん。毎日の血圧と薬、散歩が仕事ですよ。家事も少しは手伝って下さいよ」

「いいよ。体が鈍らないようにするよ。何か始める時は、お前に聞くよ」

武彦は女房に逆らわない事にしている。何をするにも、一回一回聞いた方が仕事が進むし、何より喜子の機嫌がいい。家が穏やかでいい。「足元が滑るぞ。雪融けが進んでガチャガチャだ。転ぶなよ」

夫の手が差し出され、その手を握った。優しい言葉が心地良く、ありがとうの返事を返した。喜子は頬を赤くし、握った手にはうっすらと汗をにじませた。遠い昔に同じように手を引いてもらった事を、思い出した。

このまま平凡な、何事も起こらない日々を願う。夫が居る。娘たちも、その家族も居る。久々に穏やかな夫の顔が見られる。これが幸福なのだろうと思えるのは、夫の退院あたりからだ。

「喜子、俺が先に死んだらどうする」

「何言っているんです。どこかの国の神様が言っていましたよ。明日を想うべからず“今日を精一杯生きていけばいいじゃないですか。百歳までも生きるつもりはありませんから。今が一番ですから”」

陽は高く真南に昇っている。ほんわかとした空気さえ頬に心地良い。

「お父さん。私はこれからも食事を作ります。お父さんは私の為に食べて下さいね」

喜子は万感の思いを伝えた。武彦からの返事はないが、一歩先を行くリュックが揺れ、片方の手が前に動き、顔を拭いた。背中が小さく見

え、今では背が丸く前かがみになってきた。

春の陽射しは雪融けを促し、草花の芽生えと共に、山々も里も春の色を燃やすだろう。

「喜子。……人生って夢のようにならないよなあ。最後は笑いたいね。無理しない程度にな」

独り言のように、ゆっくりと自分に言い聞かせた。（そう言えば、一緒だった吉川はどうしたかな。外来でも見かけなくなった。又話をしたいなあ）

武彦は生まれ変わる春の前に、自分も変わりを出した。ゆっくりだが、一鉢の松の盆栽をいじり出した。

了

入選 孫と読む

『忘れられた巨人』

由利本莊市 坂本愛子

第一部

絵美ちゃん、あなたから思いがけないメールをもらって、とてもうれしく思いました。

夏休みの文学概論の宿題が「ジャンルを問わず、一冊の本を読んでレポートにすること」。

実学志向なのか、高校の授業から「文学国語」が選択制になるこのご時世に、文学部でもない大学生に、こういう課題を出す先生の慧眼を頼もしく思います。そして、一見役に立ちそうもない文学、それも「物語」が、あるときは人生の道しるべとなり、あるときは足もとを照らす灯りとなると、私は確信しています。

本を選ぶにあたり、おばあちゃんが読書会の会員であることを思い出してくれたのは、嬉しいことであるのはもちろんですが、責任を感じたのも事実です。難しすぎず、「物語」の醍醐味をたっぷり味わえるもの。かといって易し

すぎず、読み終わって達成感と充実感の残るもの。これはなかなかの難問でしたよ。

私の所属する「本莊お母さん読書会」は、五十年あまりの歴史をもつ、女性だけの読書会です。月に二冊の本を読み、語り合って、千二百回を数えました。いわゆる世界の名作文学から最近の直木賞、芥川賞まで、取り上げた本は幅広いのですが、最近の自慢はカズオ・イシグロを読んでいること。まだその名が世に広く知られる前の平成十四年に取り上げた『日の名残り』を皮切りに、平成二十三年に『わたしを離さないで』、去年は『忘れられた巨人』を読みました。ノーベル賞受賞の夜には、会員の間をメールや電話が飛び交いました。自分たちの先見の明に、少しいい気分になったとしても、無理のないことではないでしょうか。今年度は、『浮世の画家』を取り上げる予定です。これらはすべて、時代も舞台も味わいも、一つとして重なるもののない作品です。『日の名残り』は大英帝国が沈みつつあるといわれた時代の、貴族と執事の物語、『わたしを離さないで』は臓器提供のためだけに生を享けた少女少女の、近未来を舞台とした、いわばSF小説です。『わたしを……』の主人公はあなたと歳が

近いので、それにしようかとも考えましたが、近ごろの近隣諸国との軋轢を見るにつけ、『忘れられた巨人』の示唆するものが、これからこの国を背負うあなた方にこそ必要なのではないかと思います。その意味するところは、読み進むにつれ、次第にわかってくるものだと思います。

『忘れられた巨人』は、四部構成の十七章からなっています。一部を一週間かけて読み、感想をメールでやりとりすれば、一か月後にはレポートの骨子ができあがるはずです。読書の先輩として水先案内を勤めることは、私にとっても、新しい発見があるのではないかと思います。

それではさっそくページを開きましょう。

舞台は六、七世紀ごろのイギリスです。

地理か歴史の授業で習ったでしょうが、イギリスという国は正式には「グレートブリテン及び北アイルランド連合王国」といいます。そのグレートブリテン、この小説で言うところのブリテン島の、小村の夜明けからはじまります。

当時のブリテン島は、荒涼とした未墾の沼沢地と深い森が広がる、陰鬱な場所でした。北海

道よりも緯度が高く、北に北海が控えていますから、雨がちで寒々とした気候なのでしょう。

人間の領域は、その不毛な大地のところどころに点在するばかりで、多くは鬼や竜など、異形のもの、の跋扈する、人外の魔境でした。導入部の風景描写の巧みさは、これからの展開を示唆するように、不穏な空気に満ちています。

丘と沼の間の小村に、アクセルとベアトリスという老夫婦が暮らしていました。丘の斜面に横穴を掘って家とし、それを地下通路や屋根付きの廊下で結んだ、貧しげな村です。日本では古墳時代後期ですから、吉野ヶ里や三内丸山の遺跡群に見られるような、木組み草ぶきの家だったと思いますが、ブリテン島では、家はまず雨露をしのぎ寒さから身を守ることを第一に、地下に構えたのでしょうか。

老夫婦、といっても、壮年の息子がいるらしいところからみれば、四十代後半か五十代でしょう。少なくとも今の私よりはずっと若いはずです。夫は妻を「お姫様」と慈しみ、妻は夫だけが全世界だともいうように、全幅の信頼を寄せています。

夫婦は幾度となく話し合ってきた旅に、いよいよ出発しようと決意します。息子の住む村へ

の旅、いつか、どうしてか、別れ別れになってしまった息子を訪ねる旅に。

このころ、霧に閉ざされがちなこの国には、不思議な病いが蔓延していました。何もかも、かたづけしから忘れてしまう病い。些細なことも、大事なことも、砂時計の砂のように記憶からこぼれ落ちてしまうのですが、人びとは忘れたことさえ忘れて、それなりに平和に暮らしています。夫婦のいさかきも、隣近所との小競り合いも、記憶にとどめておくことができないのですから、平和といえればこれほど平和なこともないでしょう。

アクセルとベアトリスも、息子の顔形も声も、住んでいる場所も思い出せません。あるのは、確かに息子が一人いた、そして息子も両親との再会を心待ちにしているはずだ、という確信だけ。

二人は息子の記憶が抜け落ちないうちに、とせき立てられるように「ローマ人の残した道」をたどります。

さて、ここで時代背景に触れておきましょう。

紀元四十三年、ローマ皇帝クラウディウスがブリテン島を征服。五世紀にゲルマン系のサクソン人（サクソンはザクセン、つまり今のドイツに住んでいた人々ですね）が侵入するまで、ブリテン島もローマ帝国の一部でした。「すべての道はローマに続く」というように、ブリテン島にもローマ人の道が張り巡らされていたのです。

ローマ帝国以前からブリテン島に住んでいたケルト系の民族がブリトン人で、ローマ人がサクソン人に駆逐された後、ブリトン人はサクソン人に激しく蹂躪されることになりました。六世紀初めにブリトン人を率いてサクソン人を撃退したといわれる伝説上の人物がアーサー王です。日本なら、朝廷に反旗を翻した蝦夷の王アテルイのようなものでしょうか。アーサー王は、ファンタジーの世界では有名ですから、あるいは絵美ちゃんも映画やゲームでおなじみかもしれませんね。

この小説は、アーサー王がブリテン島を平定後、二十年ほど経ったところのことでしょうか。アクセルとベアトリスは勝者の側のブリトン人ですが、息子の村に行くには、敗れたサクソン人の村を通らなければなりません。例えてい

ば、源氏の一族が、隠れ棲んでいる平家の落人村を通過するようなものです。ブリトン人とサクソン人が辛うじて平和裡に共存しているのは、例の、何もかも忘れてしまう病いのおかげだということでしょうね。

最初のサクソン人の村までたどり着かないうちに、嵐の気配が近づきます。二人は雨宿りのために道をそれて、ローマ時代の廃墟に踏み入りますが、そこには不穏な先客がいました。

一人は兎を抱いた黒いマントの老婆、もう一人は痩せて異様に背の高い男です。

老婆は「この船頭のせいで、夫と離れ離れになってしまった」と嘆き、船頭は「あの島ではみな一人きりで暮らさなければならぬ。この老婆さんは、ご主人といられないとわかつて、行くことを拒否したんです」と反論します。

夫婦がともに島に渡るには、それぞれに「一番大切に思っている記憶」を話してもらい、それが一致した場合だけなのです。でも、どんなに思い合っても、心の中が見えるわけでなし、しかも健忘の病いに冒されているとあっては、それは至難のわざに見えます。

「分かち合ってきた過去を思い出せないん

じゃ、夫婦の愛をどう証明したらいいの？」

「怖がるのがどこにある、お姫様。お前への思いは、わたしの心の中にちゃんとある」

力強く否定しながらアクセルも、正体不明の恐怖心が湧き上がるのを抑えるのに懸命です。

雨も上がり、アクセルとベアトリスは、サクソン人の村に着きました。

村は悪鬼に襲われたばかりで、恐怖と不安に浮き足立っています。サクソン人の旅の戦士ウィスタンが鬼を退治して、囚われの少年エンドウインを救い出しましたが、エンドウインには悪鬼に咬まれた痕がありました。悪鬼に咬まれた人は悪鬼になる、という迷信のせいで、少年は殺されそうになっています。ウィスタンはエンドウインに、戦士としての才能を見だし、村から救い出します。

実はベアトリスには、夫にもうちあけていない身体の不調がありました。妻はことさらに病状を軽く言い、夫はそれと知りながら気づかないふりをする。寄り添い、いたわりあう老夫婦の、哀切な場面です。この村の薬師は、山の修道院に医術に長けた老修道僧がいると教えます。

ともにサクソン人の戦士ウィスタンと少年エンドウイン、それにブリトン人の老夫婦の四人は、山の修道院を目指して出発します。

この地はブリトン人のブレヌス卿の領地で、なぜかサクソン人の入国に厳しく目を光らせていました。ウィスタンは白痴のふりをして検問の兵士をかわしますが、長身の兵士とベアトリスの、親子のような会話は、ベアトリスの気高い人間性と人柄の暖かさを感じさせます。

山道の途中で、一行はブリトン人の戦士に出会いました。ぼろぼろの甲冑に武装した老戦士は、アーサー王の甥にして高名な騎士、ガウェイン卿でした。王の没後何年も経っているというのに、王に命じられた任務のため、旅をしているというのです。ウィスタンは、子どものころ憧れをもって見上げた戦士がアクセルではないか、とガウェイン卿に詰め寄るのですが、例の霧のためか、だれの記憶も曖昧なままです。ただ、アクセルには甦ってくる記憶の断片が、怒りと破壊を伴う不穏なものだ、という予感めいたものがありました。

ウィスタンの真の目的は、健忘の源である雌竜クエリグを倒すことにありました。ブレヌス

卿がクエリグを捕えて戦力とすることを恐れたのです。今でいえば、宇宙開発技術の軍事利用というところでしょうか。

アクセルの過去、アーサー王が、対立する部族の融和のためにどのような手段を使ったのか、悪鬼に囃まれたエドウィンの今後は…。

多くの謎を読者に示して、第一部は終わります。

第二部

絵美ちゃん、一週間足らずで第一部を読み終えたようですね。

アクセルはベアトリスを「お姫様」と呼びますが、不思議に思って原書にあたってみたら、やはり「princess」だったとのこと。農夫が妻を「お姫様」とは呼ばないだろう、というあなたの指摘は、とても鋭いと思います。

さらに、なにげなく「アクセル」という名前をインターネットで検索したところ、フィギュアスケートの三回転アクセルとは、初めてこの技に成功したノルウェーのアクセル・パウルゼン選手に由来する、と知ったとか。これは私も

知りませんでした。北欧系の、由緒ある名前なのでしょうね。

さて、第二部は山の修道院で繰り広げられる冒険活劇です。あなたたちには「アクションもの」と言ったほうがわかりやすいでしょうか。

この修道院はかつてサクソン人の砦でした。今でこそ平和と祈りの場所ですが、血と恐怖の痕跡は色濃く残っています。そして、ガウエイン卿の命により、クエリグを守っているのも修道僧たちでした。賢者ジョナス神父はベアトリスの診察をしたのち、健忘の霧は雌竜クエリグの息だと打ち明けるのです。

アクセルは記憶の断片がよみがえるのを感じます。

自分は騎士で、なぜか村人の怒りと憎しみの視線に耐えていた。

また若き日のベアトリスとの出会いも、あの村だった。

霧の原因が雌竜とわかってても、アクセルはベアトリスのように有頂天になれません。一種の

恐怖と同時に好奇心、そして、もっと強く、もっと暗い何かに捕らわれ、怯えるアクセル。

「隠されたままでいてほしいと思うこともあるのではありませんか」とジョナス神父は問いますが、ベアトリスは敢然と答えます。

「わたしとアクセルは違います。二人で分かち合っていた幸せなときを思い出したいのです」

「しかし、霧はすべての記憶を覆い隠します。よい記憶だけでなく、悪い記憶もです」

「悪い記憶も取り戻します。人生を分かち合うとはそういうことではないでしょうか」

「悪い記憶も恐れないということですか、ご婦人」

「何を恐れることがありません。アクセルとわたしの心の中には、お互いへの思いがあります。アクセルとわたしは一緒に人生を思い出します。どんな形だったにせよ、二人の大切な人生ですもの」

ベアトリスのこのまっすぐなひたむきさを、イシグロは「世界への信頼を取り戻す」と表現しています。世界への信頼を失わない気高さこそ、ベアトリスが「お姫様」であるゆえんなのではないのでしょうか。

竜を退治するウィスタンと、守る修道僧たち。僧の身であれば剣こそ用いませんが、策略や毒や火をもって、ウィスタンを陥れようとしてます。ガウェイン卿とアクセル夫妻、エドウィンの四人は、ジョナス神父の計らいで地下道を脱出するのですが、そこはおぞましい獣が跋扈し、妖と幻が支配する殺戮の跡地なのでした。

一方、エドウィンが負った傷は悪鬼の咬み傷ではなく、雌竜クエリグによるものでした。エドウィンは雌竜に「母さん」と呼びかけ、雌竜は「強くなって母さんを助けて」とささやき続けます。

第二部と第三部はそれぞれ百ページほどと、第一部の半分程度のボリュームです。小説の王道に従い、次章は起承転結の転の部分、雌竜クエリグに惹かれるように、それぞれが別の思惑で竜の巣に集まってきました。

第三部

読み始めて二週間、よく飽きずに読みとおしてきましたね。特に、第二部は長い上に物語の

動きが少ないことと、まるで映画か劇画の戦闘シーンを文章化したようで、アクション好きでなければ抵抗のあるところだと思えます。

原題の「buried」が、「埋められた」とか「埋葬された」という意味があるという絵美ちゃんの指摘は興味深いですね。山の修道院が埋葬地だったことと関係があるのかな、という疑問の答えはもう少しあとにしましょう。

ところで、第一部の黒いマントの老婆を覚えていますか。

第三部では「黒後家」という名を与えられた二十人もの集団が、襤褸切れのようなマントをはためかせながらガウェイン卿に迫ります。

「さっさと雌竜を殺してくれたら、こんなふう

に惨めにうろつかなくてすんだんだよ」
「船頭が私に質問したとき、一番大切にしていた記憶が盗まれていることに気づいたのよ」

船頭の関門を通れなかった夫婦は、兎を抱いたあの老婆だけではなかったのですね。むしろ、ほとんどの夫婦は、愛し合いながら離れ離れになったのでしょうか。そして取り残された妻だけが、成仏できない亡霊のように、こちら岸をさまよい続けているのです。

山の修道院に囚われたウィスタンは、エドウィンに助けられて、竜の巣を目指します。

ウィスタンの望みは、サクソン人がブリトン人への復讐心を思い出すこと。

ブリトン人への憎しみを育て続け、復讐すること。

そのためには、雌竜を倒してブリトン人の記憶を取り戻さなければならない。

一方、アクセルとベアトリスは、村の娘に頼まれて、毒を仕込んだ山羊を竜のいけにえにするため、やはり竜の巣を目指していました。娘の両親は竜の息のせいで、子どもたちを忘れてしまったのです。

山羊を引きながら、アクセルは妻に懇願します。

「戻ってくる記憶にはおまえをがっかりさせるものもあるかもしれない。わたしの悪行を思い出して、わたしを見る目が変わるかもしれない。それでも、いまこの瞬間におまえの心にあるわたしへの思いを忘れないでほしい」

ベアトリスが世界に全幅の信頼を置いているのに対し、アクセルには、取り返しのない決断をしたのではないかという懸念がぬぐえま

せん。

ガウエインの追憶は、最後の激戦時にさかのぼります。

アーサー王の勝利が確実となったとき、ガウエインとアクセル（当時はアクセラムかアクセラスという名であったということですが）は戦場で出会っていました。アクセルは以前、ブリトン人とサクソン人の平和協定締結に尽力したのですが、アーサー王は協定を破ってサクソン人を攻め滅ぼしたのです。危うい均衡の上に立つ平和よりも、相手を完膚なきまでに叩いたのちの恒久的な平和を望んだでしょう。織田信長の「天下布武」を思い出します。

殺戮の循環は途切れることなく、復讐への欲望は途絶えることがなかったはずですが、そうはなりません。サクソン人とブリトン人は、よき隣人として平和に暮らしているのは読んできたとおりです。

アーサー王がガウエインたちに与えた「重要な任務」とは、賢人マーリンの魔法により雌竜クエリグを飼いならし、その息で記憶を失わせること。ガウエイン卿はまさにクエリグの守護者だったのです。

第四部

いよいよ物語は大団円に向かって急展開をみせます。

ガウエインは、ウィスタンが必ず竜を倒しに来ると信じて、竜の巣で待ち構えていました。竜を退治して愛の記憶を取り戻したいアクセルとベアトリス、記憶とともに憎悪と敵意を呼び覚まし、サクソン人の蜂起を目論むウィスタン、雌竜を母と慕うエドウィン、そして竜の守護者ガウエイン卿。登場人物がそれぞれの道をたどりながら、遂に竜の巣に集結したのです。竜の巣穴は、穴というより水を抜いた池のよう、と表現されています。私が想像したのは、古い火山の噴火口や月のクレーターでした。岩と砂利だけの不毛の窪地。命の気配あるものは、一本の貧相な山査子だけです。

そして竜はいえ、四肢を投げ出して倒れ臥す、瀕死の「痩せ衰えた水棲爬虫類」なのでした。同じイギリスのネス湖に住むという恐竜の生き残りが、誤って砂漠に迷い込みでもしたら、このようなありさまでしょうか。

アクセルはアーサー王の命により、雌竜の息

に同士マーリンの黒魔術を乗せたあの日のことを思い出します。そのために平和が続いていることも。

ガウエインは懇願します。

「この哀れな生き物に寿命を全うさせてやってはくれぬか。この息が止まったとき、国中で何が起こりうるかを考えてみよ」

「あと季節が一つか二つ。せいぜいもってそのくらいだろう。それでも、われらの間に恒久平和が定着するのに十分な時間かもしれぬ」

ウィスタンはげしく反論します。

「虐殺と魔術の上に築かれた平和が長続きするでしょうか。飛び散った塵は土中で待機し、骨は掘り出されるのを待っています」

この対立は、「名誉ある戦争か、墮落した平和か」という、永遠の問いかけを、私たちに示していると思えます。

二人の戦士は戦うべくして巡り合ったのです。ね。このあとの戦闘シーンは、古い日本映画の殺陣を見るようで、一つ一つの動作がスローモーションで眼前に再現されるようだと思いませんか。あなたがモノクロの黒澤映画を見たこ

とがあればいいのですが。

そして、老いた雌竜の首は、ウイスタンの剣の一閃で石の床に落下します。最後にその目が見たものが、近づいてくる戦士や鈍く光る剣ではなく、たった一つの慰めである山査子の花であってほしいと思わせる、哀れな最期です。

ウイスタンは迫り来る「正義と復讐」の足音に恐れおののいているようです。竜退治は、来るべき復讐に道を開いたのです。

かつて地中に葬られ、「忘れられた巨人」が動き出します。

「忘れられた巨人」とは「民族の歴史、それも虐げられた民族の歴史」ですね。竜は、実は巨人の守り人でもあったのです。圧倒的な憎悪や怨恨の前には、二つの民族の間に結ばれた友好の絆など、あつという間に吹き飛んでしまうだろうとウイスタンは言います。怒りと復讐の野火が国中を焼き尽くし、ブリトン人の骨で地面が覆われたとしても、サクソン人の復讐は成し遂げられなければならない、その、復讐の意思を継ぐのは若きエドウィンなのだ、とも。それも、勝ち誇った顔ではなく、意気消沈したように言うのです。

絵美ちゃんは「ルワンダの虐殺」を知っていますか。

前世紀末、アフリカの小国ルワンダで、多数派のフツ族が少数支配派のツチ族を襲撃し、虐殺したもので、「ホテルルワンダ」という映画もあります。レンタルできると思いますので、ぜひ観てください。

フツ、ツチといっても、民族的に違いはなく、外見もことばも風習も、何ら変わりはないのです。隣人として、あるいは家族として長い間暮らしてきた人々が、ある日、隣人を襲い、家族の首を絞め、友人知人、親戚縁者が殺しあうことになりました。

「忘れられた巨人」が呼び戻されたとき、人は簡単に殺人者になれるのだということ、しかも喜びをもって殺戮の刀を振り下ろすことができるのだということを、私たちは忘れてはならないと思います。

最終章は船頭の視点になります。

アクセルとベアトリスの夫婦は、激しい雨中、ようやく川岸にたどり着きました。ベアトリスは衰弱し、高い熱がようやくなく体力を奪っていきます。支えるアクセルも息が上

り、よろめいています。それを、松の木の下で雨宿りする船頭が、「あの二人がやってきた」と独白しているところをみれば、この船頭は、第一部のあの背の高い船頭なのでしょう。アクセルには既視感があるらしく、不吉な予感に怯えています。

雨が止み、浜辺が夕焼けの赤に染まると、沖合に島が見えます。

「あれが息子の待っているところなんです」と、ベアトリスはやる気持ちを抑えることができません。アクセルの不安をよそに、夫婦の絆を証明するための質問に、次々と答えてゆきます。

つぎはアクセルの番ですが、船頭は形式的な質問しかせず、気もそぞろな様子で早々と切り上げようとします。そして、ほんの気まぐれな好奇心から、とでもいうようにつけ加えます。

「長年一緒に暮らしていて、特別にこれが苦痛だったということがありますか」

竜にまだ息があるころから、アクセルの記憶は戻り始めていました。

敵の村を闊歩し、平和と共存を説いて歩いた日々、その協定がアーサー王により無残にも反

故にされたこと。そして何よりも彼を怯えさせたのは、ベアトリスに対する圧倒的な愛情のかたわらにうずくまる、怒りと恨みの感情でした。

ベアトリスがほかの男の腕の中に去ったあのとき、夫婦の間に流れるとげとげしい時間。傷ついて家を出た息子。まだおとなになりきれないその姿が、息子を見た最後になりました。風の便りに、息子の死を知らされますが、アクセルは、夫婦が和解したのちも、ベアトリスに息子の墓参りを禁じます。それは妻の不実に対する、アクセルの復讐だったのではないのでしょうか。

船頭はベアトリスを船に横たえると、海面の動きが不穏になっている、とアクセルに告げます。「あなた方お二人が島と一緒に暮らすことには、なんの問題ありません。島に渡った奥さんには気持ちよくお待ちいただけるよう、手を尽くします。そして、ご主人を迎えに上がりますよ」と、離れるのはあくまでも舟に乗る間だけのことだと強調します。「世界に全幅の信頼をおいている」ベアトリスが、「二人一緒に生活を約束してもらえたんだもの、言われた

とおりにして」と説得するので、アクセルもそれ以上抵抗できません。

アクセルはベアトリスの舟が黒い影になっていくのを見送ることもせず、入江に低くかかる太陽に顔を向けてたたずんでいるのです。

物語はここで終わっています。

さて絵美ちゃん、このあとアクセルとベアトリスはどうなったでしょうか。

第五部

本にはないエピソードの始まりです。

一晩中寝もやらず舟を待っていたアクセルの耳に、朝靄をついて權の音が近づいてきました。アクセルはベアトリスとまた一緒に暮らせる喜びもさることながら、夫婦の絆が証明されたことと、竜の息をもつてしても二人の愛を打ち消すことができなかったことの喜びが、体じゅうに満ちてくるのを感じました。

これが絵美ちゃんのエピソードですね。暁の光が希望を運んでくるような、すがすがしい最

終章です。読書会でも、夫婦の愛が証明されてめでたしめでたし、というお話だと読んだ人が半分くらいでした。

では、私も含め、残りの半分は？

このメールをいったん閉じて、インターネットで「死の島」という絵を検索してごらん下さい。十九世紀末といえますから、日本でいえば明治の中ごろ、ヨーロッパに大流行を巻き起こしたスイスの画家ベックリンの絵です。

岩の塊のような荒廃した島に、今しも漕ぎ着かんとする一艘の小舟があります。船頭はこちらに背を向けて、オールを操っています。鑑賞者の頭の上から鋭角に強い光が差し込んで、岩かげの四角い建物を照らしていますが、太陽というよりは満月のような、冷たい光です。小舟の前方に白衣の人影がすくと立って、身じろぎもせずに船着場を見つめています。その前には白布に包まれた棺らしき箱。島の中央にそびえる針葉樹の木立のほかに、生命の息吹を感じさせるものではありません。

洋の東西を問わず、死者と生者を隔てるものは川であり、渡し守や船頭が向こう側に連れて行ってくれるというイメージは普遍的なものの

ようです。日本では「三途の川」といいますし、ギリシャ神話にもカロンという渡し守が出てくるそうです。

第一章で船頭が登場したときから、この絵の印象が頭を去りません。

余談ですが、物語の本質は「意外性」と「予定調和」にある、と私は思います。

思いがけない展開に、ああ、そうだったのか、と手を打つ楽しみは、「だまされる楽しみ」、期待を裏切らない結末に感じる安堵感には「思いどおりの喜び」です。上手に騙されつつ、なお進行を予測するには、「伏線」を見極めることが大切です。

でも、伏線は、必ずしもわかりやすい形で示されているわけではありません。むしろ、目立たないように隠されているからこそ、伏線というべきなのでしょう。それを見つげるためのコツを、一つ教えましょう。

物語は、一筋の川の流れのようなものです。海に向かってただ流れ下るように見えて、ところどころに淀みや淵があります。その、流れを妨げるような箇所こそが伏線である場合が多いと思います。

この結論に至る伏線はたくさんありました。

ベアトリスが痛みを抱えていたこと。サクソン人の村の薬師に診察してもらったときに、「女だけの問題なの」と言ったところを見ると、婦人科系の腫瘍が転移していると考えられるのではないのでしょうか。ほかに、山の修道院を脱出して川を下っているときに、おびたしい数の小妖精にベアトリスをさらわれそうになったこと。「女を救える治療法などないことは、もう以前からわかっているのだろうか。女を渡しなさい」と迫る老婆。そして、一人で先に島に渡るといふそのときには、もはやベアトリスは目の前の夫の顔さえ見えず、「いるの、アクセル？」と聞いています。

どんな愛し合った夫婦でも離ればなれにするもの、それはまさに「死」ではないでしょうか。

ベックリンの謎めいた絵は、当時のヨーロッパに一大ブームをまきおこし、複製が家庭という家庭に飾られたといいます。カズオ・イシグロがこの絵を目にして、インスピレーションを得たという想像も、ないことではないと思います。

最後に、「巨人」の話をしましょう。

「巨人」は民族の歴史、それも虐げられた民族の暗い歴史です。

第三部で絵美ちゃんが指摘したように、「再び目覚めることがないように、地下深く埋葬された歴史」です。巨人の眠りを覚ます者があれば、復讐と殺戮の連鎖は燎原の火のように燃え広がり、世界を焼き尽くすことでしょう。

私たちは多くの犠牲を代償として、怨恨と憤怒を埋葬して平和を保つ方法を見いだしました。特に日本人は、加害の歴史も被害のそれも、あまりに地下深く埋葬したために、「なかったこと」にしてしまった」のではないかと思います。歴史を正しく後世に伝えることは、過ちを繰り返さないための最も有効な手段だと思います。日本がアメリカと戦ったことさえ知らない若者を笑うのは簡単ですが、それを伝えてこなかった私たちの無為は責められなければなりません。さらに、若者の無知に乗じて歴史を書き換えたり、真実から目を背けたりする動きだけは、決して許してはならないと思います。

日本が「忘却の国」だとすれば、お隣りは「恨の国」です。島国の日本と違い、絶えず異

民族の侵入にさらされてきた国ですから、被支配の苦しみが民族の血肉となるのもわからないではありません。そのような両国が、竜の息の力を借りずに和解できるとすれば、それは国民レベルのたゆみない努力を措いてほかにはないのではないかと思います。

永遠に続くかと思われた猛暑ですが、気がつけば風に秋の気配が混じるようになりました。この夏休みが絵美ちゃんの読書の扉を開くきっかけになれば、おばあちゃんにはこれ以上の幸せはありません。残り半分のお休みが充実したものでありますように。

一か月間、ほんとうにお疲れさまでした。

入選 夢物語

秋田市 稼 農 桂 子

夢を見た。

朝の出勤時間帯。

人の群れは急ぎ足で改札口に向かって進んで行く。まるで巨大な掃除機のホースに吸い込まれるちりのようだ。

真壁真一は背後に人の気配が迫るのを感じ本能的に体を左にひねった。右肩先を掠めて若い大柄な男が早足で通り抜けた。ホッとして若いシャツの広い背中を見送った。

男は器用に人波を避けて行ったが五メートルくらい先で若い小柄な女性の左肩に接触した。女性は軽く叫んで膝をついた。男は何事もなかったように振り向きもせず人混みに紛れて行った。

真一は咄嗟に「大丈夫ですか」と走り寄った。ライトグレーのタイトスカートから出ている膝小僧に血が滲んでいた。ストッキングは無残にも裂けて伝線していた。

「なんて乱暴な奴だ」

真一は憤慨して強い口調になった。

「私がばつとしていたので」

女性は自分の不注意を咎めるように小さな声で言った。真一が手を差し出して立たせた。痛そうに眉根に皺が寄った。少し離れて黒革のショルダーバッグが無造作に投げ出されていた。真一はそれを拾い、汚れを払って渡した。

真一が心配すると女性は近くに薬局があるからとそれ以上の手助けを遠慮して「有難うございました」と深々と頭を下げた。

リアルな夢だった。目覚めても暫らくは夢の世界から抜け出せなかった。

駅の喧騒、女性の優しい声、色白の顔にくつきりとした二重瞼、石鹸の微かな香り、柔らかな手、そして走り去った男の広い背中、全てがありありと感覚として残っていた。

寢床の中で夢を反芻する。

現実の自分なら見て見ぬふりをした。薄情なのではない。自分に深いコンプレックスを持つ臆病者なのだ。

夢の中の真一は何の屈託もなかった。女性も真一を少しまぶしそうに見ていた。違和感のない自然な光景であった。

「真壁さん、何か良いことがありました？」

会社に行くとき齊藤さんが尋ねた。

齊藤さんは社長の遠い親戚筋にあたるパートの従業員で、中学生の娘を持つシングルマザーである。真一は咄嗟には意味が分からずそっけなく答えた。

「別に。何も」

「なんだか嬉しそうだから」

齊藤さんは笑顔のままコピー機の方へ歩いて行った。

嬉しそうな顔？ 真一は驚いた。今朝の夢のせいなのか。

家と会社を往復するだけの単調な日々。我が身におきる楽しい出来事は夢の中で美しい女性と会うことくらいなのか。

いや、真一は夢の中の自分が何の気負いもなく普通の若者に見えたことに密かな喜びを感じていた。

仕上がった決算書を社長に持って行こうと席を立った。思うように動かない右足を引きずり微かに肩が揺れた。歩く度にこの右足が不運の象徴だと唇を噛む。

小学二年生の時に交通事故にあった。

八月は暑い日が続いていた。毎日友達と学校のプールで泳いだ。

デパートに勤務する父と子どもたちの休みはすれ違いが多い。珍しく休暇を取って海水浴に行く約束をした。前日は家中が興奮して、真一と妹の真衣も中々寝付かれなかった。

「早く眠りなさい」

注意する母の声もはしゃいでいた。父は普段の借りを返した気分です満足そうだった。

当日は快晴であった。父は自分の手柄のように威張って言った。

「父さんの行いが良いからだ」

母が助手席に乗って、真一と真衣が後部座席に座った。子ども達には初めての海水浴だった。幼稚園児の真衣はイルカの絵のついた浮き輪を膨らませて腕にかけていた。青いギンガムチェックのワンピースの下には新しく買った水着を着ていた。海水浴場に着いたらすぐ海に入るように準備万端整えていた。

真一はそんな真衣をからかったが実は自分もズボンの下にしっかりと新しい海水パンツをはいていた。

母は朝早くに起きて子どもたちの好きな卵焼きや鶏の唐揚げ、海苔巻きなどを作って重箱に

詰めた。

「海の家があるから弁当はいらないよ」

父は言ったが母は譲らなかった。

「お弁当なら何処ででも食べられるから便利よ」

母も久しぶりの遠出に張り切っていた。

わき見運転のダンプカーが猛スピードでセンタラインを越えてきた。真一たちの乗った国産のワゴン車は巨大な怪獣に襲われた小動物のようにダンプに組み敷かれた。

真壁一家のドライブはそこで終了となり、永遠に海に行き着くことはなかった。

真一に事故の前後の記憶は殆どない。路上に浮き輪や重箱や卵焼きやクーラーボックスが散乱しているのを見たような気がした。それは真一の空想だったかも知れない。

病院のベッドの上で呻きながらとぎれとぎれに意識を取り戻した。しかし濃い霧に包まれた景色のようで全容が掴めない。

しっかりと正気に戻った時に祖母から事故の顛末を聞かされた。父と母は即死、真衣は病院に運ばれて三日目に亡くなっていた。

真一は父母や妹の死は悲しかったが、それに

もまして自分一人が取り残されたことに我が身の不運と悲哀を感じた。

起きて歩けるようになった時に右足が自由に動かない事実を知った。

体の回復を待つ家族の命の代償である保険金と共に真一は母方の実家に引き取られた。

母の実家は大きな雑貨店であった。二人姉妹の姉文恵が婿を取って店を継いでいた。父親は早くに亡くなり、長年店を切り盛りしていた母親と共に暮らしていた。

文恵には子供がいなかった。いずれ何処からか養子をと考えていたので真一は歓迎され大切に扱われた。

しかしお互い気遣うあまり反って不幸な出来事を絶えず意識した。

祖母はお気に入りの妹娘理恵を失い元気をなくし一度に老いこんだ。

真一は家では明るく振舞っていたが学校では友人も作らず自分の不運の中に閉じこもっていた。

真一の暮らす「前田雑貨店」は文恵の祖父が創業し父親が二代目、文恵の夫が三代目を継いでいた。店構えも大きくそれなりに名も知られ繁盛していた。

しかし時代が移り変わり、客はスーパーや大型店に流れていった。雑貨店のある繁華街も人の往来が減ってシャッターを下ろす店が増えていった。

伯父は店舗を改装して若い客層を開拓しようとした。扱う品物を増やし洋品や小物なども置いたりした。伯父の思惑はどれも外れ、経営はじりじりと悪化の一途をたどった。伯父は膨れていった借入金挽回すべく投資に手を出した。初めは儲けも出たのだがリスクの高い商品では損益が嵩んでいった。

真一が中学に入學してから伯父と伯母が深刻な顔で話し合っていることが度々あった。

祖母は真一が小学六年の時に肺炎であっけなく亡くなった。

亡くなる前の祖母は真一の母理恵と伯母の文恵の名前を取り違えて呼んだ。時々理恵が亡くなったことを忘れていた。祖母は少しずつこの世の労苦をその肩から下ろしていった。真一はそんな祖母を悲しみと羨望の混じった気持ちで眺めていた。

自分も自分の不運を忘れられたらどんなに良いだろう。

伯父は目付の祖母がいなくなつて、商売より

も投資に熱中した。

借金の返済に追われ、金策に走り回っている時に路上で倒れた。心筋梗塞だった。暑い夏の盛りで文恵と真一は流れる汗を拭いながら病院へ駆けつけた。

伯父の最期には間に合わなかった。

真一は病室の窓から綿あめみたいな白い雲が二つ、三つ浮かんでいる真っ青な空を無心に眺めていた。

海水浴に行った日も快晴だった。こんなふうには吸い込まれるような青い空だった。蒼は悲しみの色になった。

文恵は破産宣告の手続きをした。店も住まいも真一に残された保険金も何もかもが消えてなくなった。

真一が中学二年の夏であった。

真一は自分の不運が伯父たちの上にも影を落としたのだと自責の念に駆られた。自分が纏った不運の黒い影は伝染病のように周りを巻き込んでいくのだ。

真一と文恵の二人暮らしが始まった。小さなアパートに移り、文恵はすぐにスーパーに職を得た。文恵はサバサバして新しい生活に前向き

であった。

「真ちゃんが一人前になるまで頑張る。理恵に申し訳が立たないから」

祖母が亡くなった時も夫が死んだ時も涙をこぼさなかった。「泣いている暇はない」そう言った。

真一が文恵の生き甲斐になっていた。

真一が高校進学する時、先を見通して商業高校を選んだ。文恵は真一に詫言った。

「ごめんね。真ちゃんに理恵たちが残した大切なお金だったのに全部なくしてしまった。お金がないから私立の高校にも大学にもやってあげられない」

真一は奨学金をもらえるほどの成績でもなく、勉強が好きなわけでもないので、職業高校へ進学するのは将来を考えて真つ当な選択だと思った。

高校で簿記と珠算の資格を取った。

卒業すると今の雑貨の卸問屋に就職した。伯母たちが取引していた縁があったので快く採用してくれた。

個人経営で規模は小さかったが先代からの不動産を幾つか所有していて、どこかのんびりした雰囲気の家であった。

そこで簡単な経理を任された。

最初の冬のボーナスで文恵に水色のセーターを買った。伯母は着た切り雀のように何時も首も手首も伸びた茶色のセーターを着ていた。真一が気遣うと笑って言った。

「どうせ作業用の上着を羽織るから大丈夫よ。

伯母さんのことは気にしないで、自分のことを心配しなさい」

文恵は包装を解いて取り出したセーターを頬に当てて涙ぐんだ。

「有難う。とても素敵なお色。真ちゃんからプレゼントをもらえる日が来るなんて想像もしていなかった」

色白の文恵に綺麗な水色はとても似合った。

それは文恵の宝物となった。

二人の暮らしに明るい前途が見え始めた。

文恵は正月休みもなく慌ただしく働いていたが勤め先のスーパーで倒れて病院に搬送された。検査の結果「大腸がんの末期」と診断された余命を宣告された。前から自覚症状があったはずであるが誰にも漏らさず我慢を重ねていた。真一が社会人になって自活出来るのを待っていたように翌年の春の終わりに亡くなった。

寒い冬が終わり、季節は舞台が回転するよう

に草木が芽吹き新緑の季節に入ろうとしていた。寂しいお葬式をあげて真一は天涯孤独の身となった。

それから十三年、会社と古いアパートの間を歩き来る振り子のような生活が続いた。

真一はせめて事故が海水浴の帰りだったらと考えることがある。真衣が浮き輪で波間に浮き、母の弁当を食べ、砂浜を走って、笑って、日に焼けて……。

本当に自分は運が悪いと思う。この年になるまで海水浴に行ったことはない。あれが生涯唯一のチャンスだった。

事務員の小野優美と山本麻里は社長が席を外しているとき毎度男の話で盛り上がる。間に書類たてやパソコンがあるとはいえ向かい側に座る真一は透明人間も同然だ。気にもかけない。

「ねえ、ねえ、榎山さんって大きな歯科医院の一人息子だって」

と優美が声をひそめて言う。

「じゃ彼は将来その病院の院長だよ。すごい、玉の輿だよ」

麻里が声のトーンをあげた。

「彼ねらいの子多いから激戦かも」

「でも彼は優美に気があるんでしょう」

「まあね」

「院長夫人か。夢のようだね」

二人は嬉しそうにクスクスと笑った。それから夫々の考えに浸っているのか暫らく無言になった。

残業はめったになかった。それでも一日気を張って仕事をして狭いアパートに帰りつくときそれなりに疲労が襲ってくる。

近所のコンビニで買った弁当を食べて、テレビを見て十時には床に就く。薄いせんべい布団の中で手足を伸ばす。今日も一日が無事に過ぎたと思うささやかな安堵感が体を満たした。

夢の続きを見た。

雑踏の中でもすぐに彼女だと気づいた。

この間と同じ薄いグレーのスーツを着て肩に黒いショルダーバッグを下げていた。緩くウエーブがかかったショートヘアがきりりとした印象を与えている。

見つめたつもりはなかったが、こちらの視線に気づいたように彼女は突然振り返った。真一を見つけると笑顔になってゆっくりと頭を下げた。自分を覚えていてくれた。真一は胸のとき

めきを覚えながら「おはようございます」と声をかけた。

彼女は真一と並んで歩きながら丁寧な礼を言った。

「先日は有難うございました」

真一は不躰にならないようにさりげなく彼女の膝を見た。

「傷は大丈夫でしたか」

それからなんとなく一緒に改札を通りホームまで行った。彼女の会社は真一の下りる駅の二つ先であった。自然と隣の席に座って名刺の交換をした。

「浜口千絵さん」真一は心の中で呼んでいた。村山槐多のガランスのような赤色が頬に浮かんでくるのを感じた。

目覚めて思った。

話は順調に進んでいくらしい。不思議な気がした。これは自分の願望が見せる夢なのだろうか。

駅の改札口に向かいながら、つい千絵の姿を探していた。夢と現実が混ざり合おうとしていた。

斉藤さんが挨拶替わりに言った。

「真壁さん、顔が良いわね。この頃はちゃんとご飯を食べているのね」

会社でまともに話しかけてくれるのは斉藤さんと社長くらいである。

斉藤さんは色々苦労を抱えているのに明るくて親切だ。優美や麻里も斉藤さんには年長者に對する礼儀を持って接していた。

外回りをする男性社員達は斉藤さんの「お帰りのさい」「お疲れ様」の声に癒されている。

声をかけられた者は皆笑顔になった。

「楽しい夢を見ました」

真一は思い切って言った。

「そうなの。夢でも楽しいのはいいわね。どんな夢だったのかしら」

斉藤さんは興味深そうに笑顔で質問した。

「秘密です」

と答えて真一はパソコンの画面から目を離し電車の中の真一と千絵の姿を思い描いた。お似合いの二人に見えた。真一の嬉しそうな笑顔が浮かんで、突然遠い記憶が甦った。

中学に入学して、一学期が終わりに近づき真一の苦手な夏に入る頃であった。

隣の席の吉野さんが突然真一の顔を覗き込んで言った。

「真壁君、何時も下を向いているんだね」

真一は吉野さんの真直ぐな目に見つめられて思わずどぎまぎしてますます目を伏せた。

「せっかく、ハンサムなんだから顔をあげて笑顔でいれば素敵なのに」

吉野さんとは小学校が違ったので全く交流はなかった。父親が病気で亡くなり母親と二人暮らしだと噂に聞いていた。

彼女は痩せて背が高かった。美人ではないが目鼻立ちがはっきりしていた。単刀直入な物言いをするので、孤立してはいなかったが友人が多い方でもなかった。女子には珍しくグループを作らず単独で行動していた。

真一は吉野さんが言った言葉の真意を測りかねた。父親を亡くした者同士の連帯感を押し付けられたような不愉快な気もした。自分の不幸は実の母親と暮らしている吉野さんには分らない。真一が黙りこくったので吉野さんは「気に障ったらごめんね」とすぐに謝った。

それから一週間ほどたった日の放課後、掃除を終えて帰ろうとした時、用具置き場の薄暗い廊下で四、五人の男子に囲まれた吉野さんを見た。

いやな予感が出て、手前の廊下で釘付けになった。男子は吉野さんの母親が水商売をしているとか男を騙して金を貢がせているとかそんなことで彼女を詰っていた。多分吉野さんが掃除をサポートしている男子にまた率直な物言いで注意をして喧嘩になったのだろう。

真一はドキドキした。吉野さんに加勢したい気持ちと彼らと渡り合う恐怖に揺れた。

吉野さんは少し強い口調ではっきりと言った。

「母は生活のために真面目に働いて税金もちゃんと納めてる。人に非難されることはなにもしていない。誰だって親の悪口は言われたくないよ」

吉野さんはそれだけを言うと言の囀いをすんなりと抜けて真一が佇んでいる方に歩いてきた。真一は声をかけたいと切望しながら、言葉を探しあぐねていた。吉野さんはまっすぐ前を見ながら真一の横を通り過ぎて行った。

真一は自分の弱さと卑怯さを突き付けられ吉野さんに恥ずかしかった。

それから間もなく吉野さんの家は隣町のおばあさんの所へ引っ越して行った。

真一は吉野さんに謝ることも失態を挽回する

機会も失った。

斉藤さんの優しい気遣いに吉野さんを思い出したのだった。他人で自分に関心を持ってくれたのは吉野さんが初めてであった。

あの頃はまだ自分の不幸の殻の中に閉じこもって吉野さんの忠告を顧みる余裕がなかった。他人が心を寄せてくれることの有難さを感じることも出来なかった。

朝の事務所はざわついている。十人ほどのセールスが夫々受けた注文の品を車に積んで得意先回りをする。彼らは大体が夕方まで帰ってこない。社長は付き合いゴルフや会合、店の新規開拓などで出かけていることが多い。

セールスたちが出払った後に事務所に残るのは真一と三時までの斉藤さんと後は優美と麻里である。

時々電話で中断されるが二人は飽きもしないで熱心に恋の行方を話している。

二人の人生の目的は玉の輿らしい。確かに美人でスタイルも良い。都内の短大を出て親のマネでこの会社に就職した。結婚相手を探せるほどの会社ではないので、もっぱら合コンとかに精を出している。

優美は理想の男と巡り合い何とか結婚に漕ぎつけようと一生懸命だ。

真一は二人を見ているとこれが順調な人生を送っている普通の人なのだと思えてくる。

自分も斉藤さんも中学の同級生の吉野さんも何故か不運のくじを引き当てた間の悪い人間だ。不運と幸運、それは全くなんの基準もなくランダムに割り当てられる。人生とは理不尽なものだ。

しかし、吉野さんや斉藤さんは自分の不運に気づいていないようにも思える。

斉藤さんは三時になると嬉しそうに帰っていく。娘が学校から帰宅する時間には家にいたいそう。以前は家でデパートから請け負って洋服の直しをしていた。直しの仕事が減ったのでこの会社のパートに入った。会社勤めの経験もあり、仕事の面でも人間関係でも頼りになる人であった。

真一は寝るのが楽しみになった。しかし夢を見ない日も多かった。それでも前に見た夢を思い出しては楽しんだ。夢の中の真一は吉野さんが言ったように顔をあげ真直ぐ前を見ていた。ハンサムではないが真面目そうな好青年に見えた。やはり足を軽く引きずっていたがそれを気

にする様子もなく雑踏に紛れて歩いていた。

久しぶりに夢を見た。

真一と千絵はレストランで食事をしていた。

テーブルには真っ白なテーブルクロスがかかっており、細いガラスの一輪挿しにピンクの小さなバラが飾られていた。店内は薄暗く、テーブルの中央に銀の蝋燭立てが置かれていた。蝋燭がジリジリと音を立てて燃え、柔らかい光が影を作って二人を照らしていた。

真一は食後のエスプレッソを飲みながら身の上話を始めた。

「僕は両親が交通事故で亡くなり、今は天涯孤独の身です」

千絵は車が大破して海水浴場で広げられるベキ品々がコンクリートの路上にばらまかれた様子を聞いて溜息をついた。目元が蝋燭の揺れる光にキラッと光っていた。

「私は不運な人間です。周りの人も私の不運に巻き込んでしまいました」

自分を育ててくれた伯父夫婦を思った。伯父は事業に失敗して失意のうちに亡くなった。伯母は、若い時は人もうらやむ裕福な暮らしだったのにパートで働く貧しい境遇になった。一生

懸命に真一を育てたが報われる日を見なかった。

真一は淡々と話した。最後に声を低くして躊躇いながら言った。

「僕と付き合って千絵さんも不運に見舞われたらとそれだけが心配です」

千絵はしばらく沈黙していた。

「辛かったでしょうね」

労わるように優しくつぶやいた。

「私も両親が亡くなって私一人です。近い親戚もいないのです。私の両親は病気で亡くなりました。父は私が小学校の時に。母は一昨年。二人とも癌でした」

千絵は空になったコーヒーカップの底に答えがあるかのようにじっと見つめてから静かに言った。

「生きていると辛いことが色々あるわね。でもだからと言って不運とは思わない。真一さんが生きていて良かった」

目覚めた時真一は感動していた。

一度は誰かに聞いてもらいたかった身の上話だ。可愛がってくれた祖母や伯母にも自分の本当の悲しみは話せなかった。

夢を見ながら夢の中の真一と同じ気持ちを味わっていた。

「だからと言って不運とは思わないわ」

夢の中の千絵の言葉を何度もなぞった。自分には何の落ち度もないのに海にも行きつけずに途中の路上で家族は命を失い自分だけ生き残った。これは不運ではないのか。真一には分からなかった。

ただ千絵の真一が生きていてくれて良かったと言った言葉は喜びとなり、まるで水面に落ちた一滴の油のように心の中に広がっていった。夢の中の会話の続きを現実の世界で検証している自分に理性が警報を鳴らしている。

大急ぎで布団を抜け出し洗面所に向かった。

会社では珍しく斉藤さんと天気の話をして、それから彼女の娘の学校の話を聞いた。真一の心に余裕のようなものが生まれていた。

耳を澄ましたわけではないが優美と麻里のひそひそ話が聞こえた。

「この頃、会話増えたよね」

「ちょっと顔も明るくなったかも」

「恋人でもできたのかな」

「まさか。それは絶対ない」

「じゃあ、宝くじでもあたった？」

「五十万円位ならあるかも」

「空気が濃んでいるよりましだよ」

二人は真一を盗み見して声を殺して笑った。

真一の噂をしているらしい。

つい夢の中の真一と自分を比べた。どうも自分の陰気な気分が周りの人たちまで暗くしているらしいと思った。

社長は吞気そうに見えてもバランス感覚のしっかりした人だ。斉藤さんは優しくて気遣いの人だ。若い男の社員には必要な時はしっかりと注意をした。落ち込んでいる社員には陰でフォローもした。人生経験もあり頼りにされていた。

優美と麻里は私語が多くて仕事熱心というわけもないが、用が足りる程度に仕事はこなしていた。結婚相手にはまったく眼中に置かれていなかったが、男性社員は職場に若くて可愛い女の子がいるだけで仕事の励みになっていた。彼女たちも如才なく男性社員には満遍なく愛嬌を振りまいていた。もちろん真一は数の中に入っていなかった。

社長はこの会社の人間関係の中で真一に事故からの立ち直りを期待しているのではないだろう

うか。それはとても困難な道だと真一は思った。

素晴らしい夢だった。

真一と千絵は結婚式を挙げていた。千絵は白いシンプルなウエディングドレスを着て手には小さな可愛いブーケを持っていた。息をのむほど美しかった。真一も借りものだろうがタキシード姿が様になっていた。

小さな教会堂の中はステンドグラスからの光が虹色の縞を作りながら床に落ちていた。

襟に白いカラーをつけた外国人の神父が妙なアクセントで「病める時も、健やかなる時も、富める時も、貧しき時も、妻として愛し、敬い、慈しむことを誓いますか」と真一に問うた。真一は心から「はい。誓います」と厳かに答えた。

新婚旅行には行かず式を挙げた教会堂のあるホテルで泊まった。

その夜、真一は夢のように幸せだった。

目覚めた真一も興奮と恍惚と幸せ感に包まれていた。「ああ、結婚したのだ」という感慨が湧いてきた。

夢の中の真一も夢を見る真一もどちらも間違いなく真一であった。現実の真一は夢の中の真一を客観的に感じながらも、それでもまぎれもなく自分であった。

その日の夜、真一は久しぶりにビールを買って真一のために祝杯を挙げた。冷たいビールはシュワシュワと喉を潤し胃に快い刺激を与えた。一本の缶ビールで気持ちよく酔って夢も見ないで熟睡した。

真一は優美の結婚話にも以前ほど冷淡な気持ちを持たなかった。

特に注意を向けなくても優美と麻里は相変わらず真一を無視してお喋りに夢中になっていた。ので恋の行方は筒抜けであった。

「フレンチのフルコースの後ホテルのスイートに泊まったの。部屋にバラの花束とウエルカムシャンパンが置いてあった」

優美はクリスマスイブの一部始終を報告していた。

「いいなあ。優美は幸せ者」

「夢のようだったよ。でさ、年が明けたら彼の両親に会って、そしたら多分プロポーズされると思う」

優美の夢も現実になればいい。

ある日夢を見た。

真一は一歳ぐらいの男の子を乳母車に乗せて千絵と散歩をしていた。街路樹のある静かな住宅街の道であった。木々は薄緑の若葉で路上に柔らかな影を落としていた。

千絵は髪を無造作にまとめて頭の上に結んでいた。少しふっくらとして母親としての貫禄がついていた。真一も顎の線が少し緩くなって穏やかに年を重ねていた。

「マー君はお外が好き。お昼ご飯の後には公園に行くのが日課なの。そしたらお昼寝はぐっすりだから」

乳母車を押す真一の左腕に千絵の柔らかい腕が絡まっていた。

「親子三人で散歩ができるなんて幸せだな」

風が吹いて甘い沈丁花の香りを運んできた。

父親になった。真一は茫然とした。考えたこともない未来であった。夢の中の真一は現実の真一とはどんどん隔たった人生を歩んでいく。夢は自分の無意識の願望だと考えたこともあったが本当にそうなのだろうか。

真一は父とキャッチボールをした近所の公園を思い出した。

プラタナスの並木道を十分くらい行くと公園に着いた。ブランコと滑り台と小さな砂場があつて芝生も生えていた。子どもたちが三々五々遊んでいた。真一はそこで父とキャッチボールをした。隣の家のお兄ちゃんのように地域の少年野球クラブに入るのが夢だった。

事故の後は走ることも出来なくなって体育は何時も見学だった。野球クラブのことなどすっかり忘れていた。

真一の家の少し先に沈丁花の生垣があつた。母はその香りが大好きだった。春先になると犬みたいに鼻をクンクンさせて「ああ、いい香り。気持ち清々する」って何時も馬鹿の一つ覚えのように言った。

久しぶりに子どもの頃の幸せだった時間を思い出した。

会社の昼休み、優美と麻里は食事以外に出ると、弁当持参の斉藤さんと朝コンビニ弁当を買ってくる真一と二人切りになることがあつた。

その頃の真一は斉藤さんの世間話にも付き合

うようになっていた。そんな二人きりの昼休み珍しく斉藤さんが優美達の噂話をした。

彼女達の真一に対する無作法を弁解するつもりだったのかも知れない。

「優美さん、小さい時に心臓の大きな手術をしたのですって」

優美は生まれつき心臓に欠陥があつて、中学までは生きられないと言われていた。それを父親と母親が夢中になって全国の名医を訪ね回り、ついに手術をしてくれる医師に巡りあったのだ。今はすっかり元気になった。

優美の両親は優美のためにお金を使い果たし、一時は借金返済だった。そんな両親に親孝行がしたい。死ぬと思った命が助かったのだから人が経験しないような楽しい豪華な暮らしをしたい。それが玉の輿を願う優美の理由なのだろうだ。

「麻里さんはね、そんな優美さんとお家が近所で小学校の時からずっと仲良しだったそうなの。麻里さんは高校の同級生だった彼がいるの。今は板前の修業をしているのだけれど一人前になったら結婚するのですって」

斉藤さんの話はお気楽に見える二人もそれなりに真面目に人生を考えている。礼儀知らずの

所もあるが今の若い子は大体がそのようなものだ。気に障ることもあるだろうが寛大に見てあげて欲しいという意図が透けて見える話であった。

真一は「私は気にしていませんから」と答えようとして一旦停止ボタンを押した。優美と麻里は真一を無視していたが、真一の方も二人に関心や好意を持ったことはなかった。

真一は世の中から疎外されている気がしていたが、自分も外界からの介入を阻止していたのだと気づいて素直に答えた。

「みんな頑張って生きているんですね」

「そうよ。みんなそれなりにね」

斉藤さんは手提げから饅頭を出して熱い番茶と一緒に持って来てくれた。夫々の想いの中で二人は黙って饅頭を食べお茶を飲んだ。

事務所には静かで平和な時間が流れていた。

彼女達との関係は変わらなかった。しかし不思議なことに事情を知って二人に少し親しみがわいた。

優美や麻里に関心が向いてその姿を見ると真衣のことが思い出された。

真衣はおしゃまで幼稚園の時に桃組さんに好

きな男の子がいた。庭の小さな花を切ってプレゼントだと持って行ったりした。

もし生きて年を重ねていたら彼女達と同じに化粧やファッション、男の話に夢中になったかも知れない。きっと真衣は優美や麻里よりずっと美人になっていただろうと思うと唇に哀しい微苦笑が浮かんだ。

たった五年しか生きられなかった真衣。真衣の心残りを想像し、夢の中の「真一さんが生きていて良かった」と言う言葉を思い浮かべた。生き残った不運というのは罰当たりな考えであつたかも知れない。

又夢を見た。

男の子の下に女の子が生まれていた。

男の子は真^{まこと}人、小学一年生。女の子は真^{まゆ}由、三歳。日曜日の朝食時であつた。家族四人が食卓に着いていた。食卓の上には彩りの良い野菜サラダやベーコンエッグ、トーストやコーヒー、オレンジジュースが並んでいた。

「ねえねえ、父さんご飯食べたらかッチポールして」

「ねえねえ、お父ちゃんマユはブランコしたい」

「マユのマネコキ。僕が先に言ったんだよ」
「まさともまゆも喧嘩しない。皆で公園へ行こう」

目覚めれば薄い布団の中であつた。部屋はすっかり明るくなっていた。慌てて時間を確かめると六時半を回っていた。一瞬ドキリとしたが日曜日だと気づいた。

夢の中と同じ日曜日だ。しばらく布団の中で考えをめぐらした。何故このような夢を見るのか。

最初の頃は自分の潜在意識が見せていると思っていた。だが夢は真一の願望の枠を超えた展開を見せている。自分の心にそれ程の筋道だった人生設計があるとは考えられなかった。何時か小説で読んだ「パラレルワールド」という言葉が思い浮かんだ。パラレルワールドとは「この現実とは別に、もう1つの現実が存在する」という考え方だ。

誰も本当には信じていないSFの世界。

もしあの時、別な選択をしていたらという無数に枝分かれして存在する世界。夢の中の真一は事故にあつて一人生き残ってもその現実を受け止めて明るく生きた真一なのか。

では事故にあわなかった家族も他の世界で生きていくのだろうか。

そう思うと真一は胸が詰まった。何処でも良い、手が届かなくても良い。見えなくても良い。こことは違う世界で父も母も真衣も真一も元気に生きている。そう考えると救われた気がした。

真一は起きて一人卓袱台でカップラーメンをすすった。幸せな気分であった。

時々夢を見た。

もう一つの世界の真一の暮らしを覗いた。

夫婦仲良く子どもも順調に成長していた。幸せを絵に描いたような暮らし。

それでも真由がインフルエンザに罹って熱が下がらない、真人が腕の骨を折った、些細な心配事は栓を開けたばかりのサイダーの泡がブクブクと途切れずに湧いてくるように次々とおこっていた。

子ども達の学校行事、運動会や発表会、参観日や入学式、卒業式など楽しいこともたくさんあった。

中学生になった真人の反抗期は結構深刻であった。千絵に「うるさい。クソババア」と怒

鳴った時は自分の耳を疑った。真一は反抗期を経験していなかった。反抗すべき対象を持たなかった。

それでも高校生になると急に大人びて千絵を労わっているのだった。

真由は特に反抗期もなく千絵に甘えて姉妹のように接していて、男親の真一を寂しがらせていた。

真人も真由も大学を卒業して無事に就職した。

真由が結婚相手を家に連れて来た。千絵は予め知らされていたが真一には突然のことでの狼狽ぶりは可笑しかった。

結婚式には真由と腕を組んでバージンロードを歩いた。

両親への手紙を真由が読んだ時はボロボロ涙をこぼした。うれし涙だ。

真人の結婚式では千絵が泣いた。反抗期も含めて男の子は何かと大変だったのだろう。立派に成人して伴侶と共に立つ姿に安堵と感慨を持った。

真一は真一と千絵の髪に白く輝く数本の白髪を見つけて二人が共に歩んだ時の長さを思った。

そのうち、夢の中に孫たちが登場してきた。真一は退職をした日、大きな花束を抱えて帰って来た。千絵はしみじみと「長い間ご苦労さまでした」と労った。

子どもたちが祝いの席を設けたようだ。

レストランの真っ白いクロスのかかったテーブルに真一と千絵を中心にして、真由夫婦と真人夫婦が座っていた。真由は小さな女の子を抱いていた。

テーブルの上の細いガラスの花瓶に一輪のバラの花。ジリジリと音を立て燃える銀の燭台の蝋燭。ここはかつて真一が千絵に身の上話をし、プロポーズをした店なのだろうか。

真一が初めて夢を見た頃からこの世界では一年の時間が経過していた。

優美はいよいよ歯科医師の榎山との結婚が決まりそうに浮足立っていた。

真一の身の上には特別な変化はなかった。相変わらずの規則正しい暮らし。

しかしその心境には多少の変化があった。前ほど自分を不運と思わなくなった。時々生きている自分の命を有難いと感じることもあった。

そんな真一の変化に斉藤さんと社長は気づいていた。斉藤さんとは良くお喋りをした。

社長は「真壁君、元気にやっているね。彼女はいるのか？ いないのなら誰かお似合いの人を世話してあげなくちゃならないな」と冗談半分に言った。

会社の営業成績は横ばいで、社長は迫力のない声でセールスたちに檄を飛ばしていた。

暑くなってクーラーを使う日が増えて来た。

優美の結婚式がやっと秋に決まった。檜山の両親の許可が中々下りなかったようだ。

優美は料理や英会話、茶道や花のアレンジメントと檜山家に釣り合うようにと習い事に精を出していた。優美なりの玉の輿に乗る努力であった。

麻里は優美に刺激されて早く結婚したいと言っていた。彼と小さな小料理屋を持つのが夢でこの頃は貯蓄に目覚め弁当は手作りになっていた。

抜けるような青空を見ても真一の心は泡立たなくなっていた。パラレルワールドなどと荒唐無稽の事を信じるつもりはなかった。それでも父と母が夢の中の真一のように頭に雪のような

白髪をのせていたらと想像する。

自分の人生は寂しいものであるがそれもなくさんある世界の一つの役割と思えば不運という言葉は思い浮かばなくなった。

真一の心には満足があった。

夢を見た。

真一の頭はすっかり白くなり病院のベッドの上に横たわっていた。

家族が周りを取り囲んでいた。孫たちが真一の手を握っていた。

「おじいちゃん死なないで」

「おじいちゃん又遊園地に行こうよ」

「じいじ起きてよ」

三人の孫達がかかるがわる真一に呼び掛けていた。真一は一人ひとりの孫を見てゆっくり頷いた。それから千絵をじつと見つめた。

「ああ、よい人生だった。思い残すことは何もない。千絵さんありがとう」

目覚めた真一の手にも幼い孫達の柔らかい温もりが残っていた。

ああ、死ぬのだと思った。夢の中の真一が死んで自分の命も途切れる気がした。

たびたび別な世界を覗いたので、この世の真一はもう一つの世界にシンクロしてしまった。

最期の瞬間、自分の頭の奥底に何時も棘のように引っかかっていた記憶が蘇った。

吉野千絵さん。吉野の下の名前は千絵でなかったか。

千絵が引越して三か月くらい経てクラス男子が噂をしていた。

「この間吉野に会った。掃除サボってない？」

なんて余計なこと言われた。相変わらずだな。ああ、それから苗字母さんの方に変えたて」

で、彼は何と言ったか。真一は遠い記憶を手繰ろうとしたが手繰り寄せる時間は残されていなかった。

翌日真一は無断欠勤した。社長が心配してセールスの一人に真一の部屋を訪ねさせた。

真一は布団の中で冷たくなっていた。警察が呼ばれたが外傷もなく突然死と判定された。事件性は疑われなかった。

身寄りがなかったので社長が身元引受人になった。

火葬場へは社長と斉藤さん、男性社員が数人

付き添った。

待合室でビールと寿司が振舞われたので斉藤さんは一人外に出た。快晴の日で空は既に晩夏の気配を濃厚にしていた。青空に突き刺さるような煙突を見た。煙は見えなかったが真一の魂が澄み渡った空に上って行くような気がした。葬儀は会社の取引のある斎場の小さな部屋で簡単に執り行われた。

社員全員が出席した。優美も麻里も喪服を着て殊勝に席に就いていた。

「まだ三三才だって。何が楽しみで生きていたんだろうね」

「私ならそんな人生耐えられない」

「かわいそう」

「でも死に顔がメチャ幸せそうだったって」

「真壁さんが幸せならそれでいいけどさ」

「真壁さんに比べたら私たちの人生は夢みたいに楽しいよね」

「人生楽しくなくちゃ」

目を赤くした斉藤さんが振り返り、優美と麻里を見て唇に人差し指を当て軽く睨んだ。

優美と麻里は慌てて口を閉じた。

グリーン賞 鷺の花が舞う森で

にかほ市 阿部 萌絵子

梅雨が明けてすぐの蒸し暑い日、私は満員電車の窓際に立っていた。定期調査は無事に終わり、しばらくはのんびりできるだろう——なんて、残念ながらそんなお気楽なことを考えている余裕は無かった。今は高三の夏、学校の教師たちや進路情報誌などは勿論のこと、果てはテレビのコマーシャルまでもが、「勝負の夏」なんて言葉で私を苦しめる。毎日朝は六時台の電車で学校に向かい、ホームルームまでひたすら自習、授業で新しい知識を頭に詰め込んだら放課後は図書館で締め出されるまで復習する。それからこんな帰宅ラッシュ真っ只中の電車家で帰り、自室では机に向かって夜が更けるまで——そんな日々を送っているにも関わらず、模試の成績は芳しくない。正直、もう限界だった。

ようやく暗くなった真夏の空を切り抜いて鏡のようになった窓ガラスに映る私は、まるで瀕死の病人のような顔をしている。

「今日は、だめだな。」

すっかり弱気になった私の口から、そんな言葉が零れた。声とも呼吸ともつかないこの音は、噎せ返るような人の群れの中に溶けて消えた。

家に着くと私は、体にまとわりつく鬱陶しいセーラー服を脱ぎ捨てた。姿見の前に立つ下着姿の私は何の変哲もない人間で、ただ一箇所首から上にだけ、目の下に濃い隈が染みつき口角の下がった顔が貼りついていて。制服を脱いだ今、私を苦学生たらしめるのはこの表情だけなのである。そしてこの表情を剥がす方法がたった一つしかないことを、私は知っていた。

私は倒れ込むようにベッドに横たわり、自らの体重と我が身にかかるプレッシャーとを、柔らかなマットレスに預けた。

「こんにちは。」

誰かに声をかけられ目を覚ますと、いつの間にか私はまた、あの息苦しいセーラー服を着ていた。そして目の前には麦わら帽子に白いワンピースの少女が、私の顔を覗き込んでいる。真っ黒な短いくせ毛に透き通るような白い肌、そこに嵌め込まれた黒く美しい瞳に、呆然とし

た苦学生の顔が映っていた。

「あ、え？ こ、こんにちは……」

彼女の風貌について見とれてしまった私は素っ頓狂な声を上げ、少し仰け反りながら挨拶を返した。

「ふふ、そんなに驚かせてしまったかしら？ ごめんなさいね。」

その少女は可憐な容姿に似つかわしくない年寄り臭い口調で謝りつつ私から顔を離し、悪戯っぽく笑った。

彼女に遮られていた向こうの景色がひらけたとき、私は自分の目を疑った。柔らかな風に頬を撫でられ顔を上げた先には、美しい緑の木々が生い茂っている。足元にはひんやりとした一本の清流がそそぎ、揺れる水面が木漏れ日を受けてキラキラと光った。

「あ、あの、ここはどこ？」

頭が状況に追いついていない私とは対照的に、少女は軽やかな、それでいて緩慢な足取りで私の隣に立った。気づけば私は冷たく湿っていて苔のむした岩に座っているようだった。少女は同じ岩に腰を下ろすと、

「随分とお疲れのようね、貴女。」

また至近距離で私の顔を覗き込む少女に、私

は律儀にも再び驚いて体を揺らした。ぬるりと苔の上を滑る感覚に、今自分が置かれている状況を強く思い知らされる。こんなおかしい状況の中ではもはや疲れなんてどうでもいい、飛んでしまったとすら思えるくらいだと、頭の中には少女の問いへの返答が浮かんだ。しかしそんなことよりも、この少女が一体何者であるのか気がなくなって仕方がない。

「ええと、初めまして、ですか？」

できることなら今すぐ色々と問い質したいくらいなのだが、口下手な私にはどう切り出せば良いものか皆目見当もつかなかった。私のぎこちない挨拶を聞くと、彼女はくすりと笑った。「初めましてというのも、ちょっとおかしい気がするわね。」

くすくすと笑い続ける彼女はあまりに美しく、私は一種気味の悪ささえ感じた。まるでビスクドールのような、人工的なまでに整っているその顔に本当に感情が宿っているのか、それが少しも分らないのである。

「で、でもあたしたち、今初めて——」

「いいえ違うわ。だって私たち、まだ出会っていないんです。だからそのお返事は、また今度させてもらうわね。」

私の言葉を遮って、彼女はそう言った。私の頭が良くないのだろうか、私は彼女の言った内容を何一つ理解できなかった。

「出会ってないって、どういうこと？」

彼女はぼかんとしている私の頬にそっと触れた。彼女の手は不思議なくらいに冷たく、心地よかった。それから彼女は私と目を合わせ、につこりと笑ってこう言った。

「だって、これは貴女の夢なんですよ。」

その言葉を聞いた次に私が目にしたのは、慣れた白い天井だった。往々にして夢は夢だと気づいた瞬間に覚めるものだと、心のどこかで虚しく思った。

しかしこの夢はどうも異様だ——あの少女の柔らかくてひんやりした手の感覚が、火照った頬の上にまだはつきりと残っている。釈然としないまま起き上がってみると、窓の外は明るくなりかかっていた。

「あ、お風呂入らなくちゃ。」

そう思い立って入った洗面所の鏡に映った私の顔から、あのどす黒い隈が消えていた。

あれから数日、彼女への興味やら疑問やらそ

の他諸々の感情は、相変わらずの忙しい日々の中に埋もれていた。夢のことを考えたところで何の答えも出せるわけがなく、考える時間があったくない。というよりも私は受験生なのだから、たかだか夢のことで悩んでいる暇などありはしないのだ。そう自分に言い聞かせて、今まで通り学校と家を行き来するだけの日々に身を投じた。

——そうして再び、私はベッドに倒れ込んだのだった。

「あら、また来たのね。」

目を開けたとき、彼女はまた私の顔を覗き込んでいた。文字ではとても表せないような声を上げて後ろに倒れた私を見て、彼女は呆れたように笑った。

「そんなに驚くことないじゃない！ もう二回目なのよ？ 大袈裟ねえ。」

彼女の飄々とした態度になんとか少し悔しくなつて、何事もなかったかのように起き上がろうとした。しかし生温く湿った土がそれを許さず、結局私はまた転んでしまう羽目になった。

「あはは、落ち着きなさいな、もう。」

眉尻を下げ腹を抱えながらけけらと笑う彼

女を見ているともう悔しがっているのが馬鹿らしく思えてきて、私も一緒になつて笑い転げた。肌に感じる土の温度ですら、どうして心地良く思えた。

「さて……ふふ、そろそろ落ちていたかしら？」

目尻に浮かぶ涙の粒を指で拭いながら、彼女は苦しげに問いかけた。

「落ち着く必要があるのはあんたの方でしょう。笑いすぎだつてば。」

ようやく息が整った彼女を見ると、彼女も普通の人間なのだなと思った。夢の中に出てくるだけの普通の人間なのだ、と。私が言い返したのを聞くと彼女は少しきょとんとして、それから初めて会ったあの時と同じように悪戯っぽく笑った。

「あら、なかなか言うじゃないの、貴女！」

そう言つて彼女は例の岩に座ると、その隣をばんばんと叩いて私に座れと言った。

「だつてなんか、あんたに持つてかれるの、悔しいから。」

促されるままに座ると、彼女は私の返答を鼻であしらつた。やはり私は彼女には——何が勝ちで何が負けなのか分からないが——かなわないようだった。

「ま、そんな細かいことは良いでしょう。」

相変わず余裕綽々たる態度の彼女が、慰めのつもりなのか、ふくれ面の私の肩に寄り添いもたれかかる。転んだときにぶつけたところに彼女の頭が触れて、ズキンと痛んだ。

「痛いよ、くつつきすぎ。」

正直、痛かったのはほんの一瞬だった。しかし彼女の体温を感じると胸が高鳴り妙に照れ臭くなつて、口をついて出たのはこんな無愛想な言葉だった。彼女は私の言葉を聞くと、私に預けていた体を起き上がらせた。長いまつ毛に縁取られた瞼がぐいっと上がり、あの黒く深い瞳が私をしつかりと捉える。それから彼女はまたくすりと笑つて、私の耳もとで囁いた。

「痛いなんて、そんなのありえないわ。夢つて、痛くないものでしょう？」

目を覚まして時計を見ると、最後に見た時から七時間ほど経っていた。久方ぶりの長い睡眠に痛む頭を押さえながら、私は今日の夢を反芻した。大抵の夢は覚めてすぐにほとんど忘れてしまうような気がするが、彼女に関しては不思議なほど鮮明に覚えている。

「……可愛いよな、あの子。」

鮮明に覚えていると言つておきながら、私の口から出たのはこんな一言のみだった。もう二度も会つていてこれだけはつきり覚えているというのに、私は彼女についてあれだけの美貌の持ち主であるということしか知らないのである。

窓から鋭い光が差し込んできた。また暑苦しい一日が始まるのを悟った私はベッドから出て、その日の準備を始めることにした。最後に彼女が言つた通り、夢でぶつけた肩や背中痛みはなかった。それどころか、長いこと悩まされていた肩こりや首こりまで、すっかり消えていたのである。不思議なことに、彼女が夢に出てくると、体調が良くなる気がした。

それからというもの、彼女は度々私の夢の中に現れた。ある時は私の手を引いて森林浴に誘つてみたり、またある時は水遊びがしたいなんて言つてあの清流の中に飛び込んでみたり——夢の中は全て彼女の世界なのだろうか、いつもやりたい放題に遊んでいた。私は初めこそあんな驚き方をしていたが、無邪気に私を誘うあの朗らかな笑い声や、何故か年寄り臭い口調、そしてそれらを紡ぎだす優しく可愛らしい声に

いつの間にか絆され、この奇妙な状況にもすっかり慣れてしまった。

彼女と過ごす時間は日常生活の中のどんなときよりも心が安らぎ、苦しい日々の中で死んでしまったとすら思われた表情も、このときばかりは蘇った。何日かに一度ベッドの中でしか会えない彼女はいつしか、私の何よりの心の支えになっていた。

そうして彼女と過ごす夢を重ねるうちに、私の中に小さな欲望が芽生え始めた。

「あたし、毎日でもあんたに会いたい。」

その欲望が口から出たとき、彼女は困ったように笑った。

「それは、もう少し仲良くなってからがいいわね。」

「え、あたしたちって友達じゃないの？」

確かに私たちは、友達というには互いのことを知らなすぎるのかもしれない。しかし、私が彼女の何を何も知らないのは、私が何を聞いても彼女がはぐらかしてしまうことが原因なのである。

「貴女が友達だと思うなら、それはそれで別に良いのだけだねえ。」

——今だってそうだ、彼女はいつもくすくす

と笑いながらはぐらかす。私は無性に苛々して、彼女の手を掴んでしっかりと目を合わせた。

「だったら教えてよ、あんたのこと。あたしどうしても、あんたと友達になりたいの！」

彼女は繋がれた手を見つめながらぼかんとしていた。それから少し影のある笑顔で——

「貴女は、夢に興味と名前を求めるの？」

そう言って、その夢を終わらせてしまった。

私が彼女に一步踏み込もうとすると、彼女はいつも勝手に夢を終わらせてしまう——私を冷たい現実世界へと押し戻すのだ。

次にあの子に会ったときには、何としてでも彼女のことを知りたい。そう思い立った私は、適当な時間を見つけては短い睡眠をとるようになった。それどころか学習時間まで削り、気づけば一日の睡眠時間は——連続ではないが——学習時間を超えていた。

しかし何故だろう、二週間ほどそう過ごしたというのに、彼女に会うことはできなかった。しかも削った学習時間の影響で私の成績はひどく落ち込んでいた。ああ、私は何て馬鹿げたことをしてしまったのだろう。なにか悪魔のよう

なものが、私を自堕落な生活に引き込もうとしたのかもしれない。実生活で苦しんでいる人間にとって、甘美で生温い幸せな幻覚ほど魅力的で恐ろしいものは無い——私はまんまと嵌められたというわけか。私は、黙って机に向かって参考書を眺め続ける日々に戻った。

そしてようやく以前の生活に戻れたころ、生温い幻覚は再び現れた。

「あんたは一体、何なんだ。」

頬を撫でる心地良い風に自分の居場所を告げられ、私はお決まりの挨拶を待たずに問いかけた。彼女が夢を終わらせてしまうまで——私が目覚めるまでの時間がどれだけ残っているのかは全く分からない。挨拶をしている暇など、ありはしないのだ。

「あらら、せっかちさんね。早死にするんじゃないの。」

「質問に答えてよ。そうやってまた逃げるつもり？」

いつものごとくはぐらかして終わらせようとする彼女に、私はかなり苛立っていた。

「大体、あたしとあんたが最初に会ったあの時からどれだけ経ったと思ってるの？ こんなく

だらしないことしてる間にさ、あんだだけ長かった
昼も縮み始めてる…夏が終わろうとしてんだ
よ。そんなだけ経ったっていうのにあんたは何も
語らない、真実を探る私が墮落してくだけ！
そんなのはおかしいでしょ、さあ答えて！」
きつと今の私は、酷く醜く歪んだ顔をしてい
るのだろう。鏡が無くとも分かってしまうほど
に、私の表情筋は固く引きつっていた。

彼女はそんな私の顔を一瞥してから俯き、そ
のまま黙り込んでしまった。

「…貴女はねえ、とっても疲れてるのよ。」

ようやく口を開いた彼女が述べた的外れな返
答に、この期に及んでまだふざけているのか
と、私は彼女をにらみつけた。しかし視線の先
にいる彼女は、意外なことに、今にも泣き出し
そうな顔をしていた。私は初めて見る彼女のそ
んな表情に酷く狼狽えたり、何より彼女をそこ
まで追い詰めてしまったことを強く後悔した。
「ごめんなさい、私の口から貴女の疑問に答え
ることはできないわ。」

彼女は唇を震わせながら、ぼつりぼつりと話
を続けた。

「ねえ、今日お別れする前に貴女に一つヒント
をあげるわ。その疑問の答えはね、貴女自身で

見つけられるはずなのよ。」

「…わかった。ありがとう。それと…ごめん
ね。」

私がぼそぼそと礼を言い、それからさらに小
さな声で謝ると、彼女は一瞬ぽかんとした。そ
して先程まであれだけ落ち込んでいたのが信じ
られないほどの速さでいつもの笑顔に戻ると、
私の腕をくいくいと引っ張った。

「別に良いのよ、私も悪かったわ。そんなこと
より見て見て、あそこにお花が咲いたのよ。鳥
が飛んでるみたい、素敵じゃない？」

彼女が指さした先には、白い花がごちんまり
と群生していた。彼女の言う通りその花は鳥が
翼を広げたような形をしていて、私たちの足元
を飛び回っているかのようだった。真つ白く扇
形のひらひらとした花卉は、彼女のまとう白い
ワンピースの裾にも似ているような気がする。

「この花、なんて言うのかしらね。とっても可
愛いわ、私こういうお花が大好きなの。」

そのスカートの裾が汚れることなんて気にも
とめず、しゃがみこんでうっとり花を眺めて
いる彼女がやけに幼く見えて、私はなんとも言
えない気持ちになった。

とりあえず隣にしゃがんで一緒に花を見てい

ると、彼女はまた震えた声で話しだした。

「そろそろ、時間ね。…ねえ、真実は自分で見
つけるのよ、いいわね。」

彼女が醸し出す神秘的な雰囲気、私は少し不
安になった。これが、本当に最後になってしま
うような気がして、彼女の表情を窺った。

「夢って結局なんなのか、調べてみなさい。私
と貴女は本当は会うべきじゃないって、きつと
分かるから…。」

最後に見た彼女は、寂しげに微笑んでいた。

薄暗い自室で、私は横になったまま目を開い
た。夢について調べるだけならば、今ここでも
できるだろう。そう思い枕元の携帯を掴もうと
したものの、手に力が入らない。気づけば私の
目からは、何か生温い液体が流れ出ていた。夢
でしか会えない、名前も知らない、白いワン
ピースの女の子——ねえ、お願い。

「会うべきじゃないなんて、言わないで—
—。」

それからしばらく経ったある日、私は図書館
で何冊かの辞書を開いた。

『睡眠時に生じる幻覚』

『当人には現実的である』

『視覚、触覚、聴覚に現れる幻覚』『睡眠中の幻覚』『幻覚』『幻覚』……

かわるがわる開く辞書に必ず現れては網膜に突き刺さるこの単語を、私は受け入れられなかった。あの子は所詮幻覚だと、そう思ったことは幾度となくある。しかし今となつては彼女は私の唯一の拠り所であり、何よりも、誰よりも私の心を癒やしてくれる存在なのである。その彼女が幻覚だなんて、私はどうしても受け入れられなかった。

ズキズキと痛みだす頭、零れそうになる涙を抑えながら別の百科事典を開き、夢という文字を探した。

『睡眠前の生理的、心理的緊張が原因の一つであるとされる。』

この文言を目にした私は、最後の夢で聞いた彼女の言葉を思い出した。

「ああ、あたし……とっても疲れてたんだったけ。」

では彼女の夢を見る度に体調が良くなっていたのは、ただ単に寝不足が解消しただけだったのか？ 私はもう訳が分からなくなつて、いつそのこと最も根本的な事柄、睡眠とは何かにつ

いて調べてみることにした。

とりあえず目についた生物事典を手にとり、睡眠と書かれたページを開く。内容は想像以上に難しい言葉だらけで理解するのになんり苦戦したのだが、

『レム睡眠（浅い睡眠）とノンレム睡眠（深い睡眠）を周期的に繰り返す。』

『特にノンレム睡眠は、体の回復に大きく関わっている。』

この、レム睡眠とノンレム睡眠という言葉にはなんとなく覚えがあった。いつ頃にどういった経緯で見かけたのか、詳しくどういう意味なのかは全く分からないが、ともかくこの二つを繰り返すのが正常な睡眠なのだろう。そして疲れがとれているということは、私と彼女が会っていたのはきっとノンレム睡眠の最中であるはずだ。そう思いつつ読み進んだ次の行には、私の予想とは真逆のことが書かれていた。

『夢はレム睡眠中に見るとされている。』

それは一体どういうことなのだろう。疲れきった私が死んだように深く眠り、そんな時に彼女の夢を見る——そういうことなら辻褃の合う話になるが、この事典によるとどうやらそれは違うらしい。ではなぜ、私は彼女と会う度に

みるみる回復していったのだろうか。

その時ふと、開いたまま傍らに放置していた百科事典が目に入った。

『夢には本人の欲求や不安などが反映されることが多い。』

『夢を見ることがあるとされるレム睡眠は、心の回復に関わる。』

この二文を読むと、今までの出来事がようやく腑に落ちた。もしかしたら彼女は、私の癒されたいという欲求の具現化された人物だったのだろうか。そしてそんな彼女と夢の中で関わることで心の疲れをとり、ついだに深い睡眠の中で体も回復していたということなのかもしれない。

「……ヒントありがとう、ちゃんと分かったよ。」

私の中の、私を癒し疲れをとるただけに存在してくれていたのであらう彼女に話しかける。当然返事はないのだが、私は少しの虚しさも感じなかった。彼女に対する不満、疑問が消えた今、私の中に残る彼女への思いは、感謝と愛しさ、それと少しの恋しさだけなのである。「あ、そうだ。次に会ったらさ、ヒントのお礼に教えるよ。」

全ての辞書を棚に返し、そのままの足で図鑑の棚に向かう。一際華やかな表紙の図鑑を取り出して、その中から白い花の写真を探した。その名前と花言葉のメモをとり、すっかり満足した私は図書館を出た。

夕暮れの帰り道、私の頭に新たな疑問が浮かんた。一時、私は彼女に会いたかったがために、短く浅かったであろう睡眠をとっていたことがあったが、あの時はなぜ会えなかったのだろう。この疑問の答えだけは、今日読んだどの辞書の内容を思い返しても見つからなかった。

しかししばらくそのまま歩き続け家が近づいた頃、私はなんとなくその答えを導き出せたような気がした。日光に照らされ生温かくなった自宅のドアノブに手をかけ、私は彼女の口調を真似て呟いた。

「夢は、思い通りにはいかないものだよ。」
受験生にとつての勝負の夏が、もう終わりかけた頃だった。

それから月日は流れ、私は無事大学生になった。合格するまでの経緯を見れば決して無事とは言えないのかもしれないが、合格できたのだから良しとしよう。しかし私は、未だにそれを

素直に喜べずにいた。それというのも、彼女が私にヒントをくれたあの夢以来、一度も彼女に会えていないのである。私が今こうしていられるのは彼女のおかげなのだから、私をここまで導いてくれたあの少女に「合格したよ」と報告するまでは、私の大学受験は終わらないのである。

昼にも夜にも彼女の影すら見つけられない、私のキャンパスライフは空虚なものだった。

もう一か月もすれば彼女と別れて一年になる——私の受験は、未だ終わってはいなかった。気づけば季節は再び夏を迎え、ある日私はいつもよりずっと早い時間の電車で揺られていた。強いて言うなら理由は、暑くなる前の時間帯に通学を済ませたかったから、という、何とも単純なものである。ただ久々に早起きをしたもので、私はそのまま電車の中で寝入ってしまった。

「久しぶり、覚えてるかしら？」
目を開くとそこには、ずっと会いたかった彼女がいた。私はもう我慢ならなくなって、彼女を思いきり抱きしめた。

「忘れるわけがないでしょ、あたしはずっとあなたを探してた……」

「あらなあに、落ち着きないわねえ。」

ばん、と頭に手がのせられる。その冷たさが懐かしくて幸せで、私はいつの間にか涙を流していた。

「ちょっと泣かないでよ、いじめてるみたいじゃないの。それに今は長くは居られないんだから。」

私はとにかく必死だった。電車くらい乗り越したって構わないから一緒にいてほしいと、彼女に縋りついた。しかし彼女は落ち着きはらった態度で私の背中をさすりながら、なだめるようにこう言った。

「そんなことしなくたって、ワタシはあなたに会いに行くよ。」

彼女の声と口調が一瞬変わったような気がして、私は少し面喰らってしまった。しかしそんなことは全くお構いなしの彼女は、

「そろそろ起きなさい。」
と、静かに言い放った。きつとここで私がそれを拒否しても、彼女は少しのためらいもなく終わらせてしまうのだろう。諦めた私は、もう一度彼女を強く抱きしめた。

「…あったかい。それに、やっぱりあんた、落ち着く香りがする…。」

私がそう呟くと彼女はくすくすと笑って、ついにその言葉を発した。

「お馬鹿さん、夢に匂いなんてありませんわ。」

そう言われて目を覚ましたは良いのだが、車内のディスプレイを見るに電車を降りるのはまだまだ先のようなだった。ならば何故、彼女は私を起こしたのだろうか——本当に、彼女の行動には謎が多い。再び寝るには時間が足りず、仕方なく背もたれに寄りかかってぼうつとしているうちに、電車は次の駅に停まった。

開いた扉の向こうから、一人の少女が乗りこんだ。清潔感のある白いブラウスに軽やかなスカートを揺らしているのは——透き通るような白い肌に黒く短いくせ毛、そして吸い込まれてしまいそうな黒い瞳をもった、美しい少女だった。

私が呆然とその少女を見つめっていると、向こうもこちらに気がついてらしい。一度目が合うと、その少女は鬼気迫る形相でこちらに向かってきた。それから、突然の出来事にまだ理解が

追いつかない私にぐっと顔を近づけて一言、ぽつりと呟いた。

「…間違いない、あなたはワタシの夢に出てきた…。」

それは逆でしょうと、心の中で呟いた。しかし今私が彼女にかけるべき言葉は、きつと——

「…はじめまして。」

私がそう零すと、彼女は喜びのにじむ涙声で返事をしてくれた。

「やっと、だね！」

夢見心地な気分が抜けてきたころ、私は車内の視線が痛いほどこちらに注がれていることに気づいた。そこで私は全く気にせず感動の再会シーンを続ける彼女の腕を引き、その次の駅で電車を降りたのだった。

「すごいすごい、本当に会えた！　ワタシのこと、分かる？」

降りた駅の近くの公園で、彼女はびよこびよこと飛び跳ねながら再会を喜んだ。目の前の少女は容姿以外の何もかもが全くの別人のようだったが、彼女も私のことは知っているようなので、夢のあの子で間違いないのだろう。

「会えたのは嬉しいんだけどさ、あんたそんな

性格だったっけ？」

夢の中ではあんなに落ち着きのあった彼女が、それとは正反対ともいえるほど賑やかな人柄だったので、驚きを隠しきれなかった私はそう問うた。彼女はただきょとんとして首を傾げる。

「もっと大人びてるっていうか…ババ臭い感じだったじゃん。」

彼女は私の話を聞くと、なにそれ！　と口をとがらせた。

「ババ臭いって何よ、失礼だな！　そういうあなただって、どうしようもないくらいヘタレだったくせに！」

今度は私が驚かされた。話しているうちに分かったのだが、私たちは夢の中でほぼ同じ経験をしていたようだった——互いの人格だけは、現実と全く違っていらしいが。彼女の夢の中ですら私が励まされる側であったとは何とも申し訳ない気がするが、彼女はそれすらも気にしておらず、

「あなたのおかげで危機感出てきたから大学入れた！」

なんていう感謝までされてしまった。そう、今私たちは同じ大学に通っていたのだった。

しばらく話し込んでいるうちに、話題はあの白い花になった。

「結局名前、分らずじまいだったなあ：ちよつと残念。実在しないのかな。」

つまらなそうにばやく彼女に、私は満を持してその名前を告げた。

「あれは鷺草。日本なら北海道以外どこでも育つらしいよ。」

それを聞くと彼女はまた飛び跳ねて、花が実在することを喜んだ。その様子を見ているとなんだか私まで嬉しくて、頬がゆるんでしまった。

「え、じゃあ花言葉は？ 調べたの？」

彼女にそう問われると、私はそれに答えて良いものか少し悩んだ。

「調べたは調べたけど…今それを口に出すのは、ちよつとゼイタクすぎるかな。」

そう聞くと彼女は不満げな顔をして、だったら自分で調べるよ、と携帯を取り出した。彼女はしばらくその画面を見つめ、それからやりと笑ってこちらを向いた。

「これは、ゼイタクだねえ。」

私もそれが可笑しく思えてしまつて、一緒に

声を出して笑つた。そしてひとしきり笑つた後、

「でもワタシたち頑張つたし、今くらいゼイタク言つてもいいんじゃない？」

彼女はそう提案した。確かに、それも悪くないかもしれない。私がそう同調すると、彼女もこくこくと頷いた。

そして私たちは顔を見合わせ、声を合わせてその花言葉を――

「夢でも、会いたい！」

そう言つて笑い合つたのだつた。

詩

詩

奨励賞 星空

鹿角市 金 万 和

酔っぱらった父を抱えた腕に
冷たいものが零れた

本当は私は分かっていたのだ
私がひと月前から

出そうにも出せないでいた
ものであることを：

母を失った十七歳の私

最愛の人を亡くした五十五歳の父
掛け替えない人と別れた

父と私の悲しい歴史が刻まれた

無口な父は母だけが

頼りだった

川渚にある近所の飲み仲間の家が
父が唯一自分を

さらけだせる場所

夏の螢は私をその茅葺き屋根の家へ

案内する

私はポケットにその灯りを入れながら

父を迎えに急ぐ

澄み切ったふる里の

あの輝きは

あまりの近過ぎる美しさに

恐怖さえ感じる時もあった

キラキラと地上に零れる無数の星屑

有り余る光の競演は

私のゴムの短靴を黒黒と照らす

私はいつの間にか

次次に降ってくる星を

拾い集め

満天の星の群れに迷い込んでいた

奨励賞 のこりの刻

井川町 小林 康子

少しずつ進む時計を

少しずつ遅らせながら

日々を営む

往ったり来たりの

柱時計の振り子は止まったまま

母は揺れる小舟の上に立つ

危うい均衡を保ちながら

自分の体を立てなおす

行き先が明るく

くっきりとしていた世界は

まぼろし

肉体がむき出しに

なっっていくから

逃げようとする時間を

捕まえるための写真も

もう撮らなくていいと言う

母よ

背筋を伸ばし

ただ今だけを

見つめていこう

漂渺ひょうひょうたる

明日に入っていこう

砂時計の天地を返し

分け与えられている

時間の重さをよいしょと背負う

時計の針がさかさに回る

母との時間が

透明になり

ふくらむ

いつか

沈黙の時間と

動いていく時間を

手渡されたら

私はどちらに

寄りかかるだろうか

※漂渺ひょうひょう

かすかではっきりしないさま

広くかぎりのないさま

奨励賞 何処へ

男鹿市 小松 春美

お昼が過ぎるとすかさず

あたりは逆光の景色に変わり始める

すると 日暮れてしまう前にと

落ち着かないわたしは ときどき

家に居ながら母の袂をにぎり

もう帰ろう 家に帰ろうと

小さく涙声でせがむのだった

何処へ わからないけれど何処からか

まちがえてきている

ここではない と

老令になつたいまも

ちつとも癒えるどころか

湯舟につかっている時などはことのほか

髓から込みあげてくるこの想い

やがて幾すじもの想いは

いつしか空へ昇るだろう そして
運よくひと群れの雪の花びらになれたなら

あゝどうしたことか

空を渡り始めたばかりというのに

ほんの一本のこの源平咲きの梅の

なつかしさにたわいなく

思わず降りてしまい

いのちの渦のぐるぐるに

再び紛れ込んだりするのだろう

あの日の母も そのまた母も

きつと

子どもは何処から来て何処へと

途中いくども

立ち止まったにちがいない

入選 三太郎の小径

大仙市 高橋 岑 夫

剣道着の学生が歩いてくる
作為はなくあたりまえに
まわりを気にすることなく
語り合いながら

みどりの枝がかぶさり
日差しをさえぎり
けっして明るいとはいえない
細い空間

自然になりたっているような
人工物ではなく
ずっと前からありつづけているような
ころのふるさとのような

解決できないにしても
知識をさずけてくれる
恩師のふところのような
思考のふかさがある

想いにふける

なやみをかかえながら前進する
よろこびをうちにおさめて
考えの抽斗をさぐる

表面的なものの考え方から
奥深いところの真実をつきとめようと
見えないこえを選択しながら
道筋を見出す

三太郎に考えさせ
三太郎に書かせる日記が
この小径を歩きながら
難解な筋道を解きほぐす

からだの芯が
思考の骨格が
知らず知らずのうちに
なりたっていく

阿部次郎の思考に
少しでも近づくような
ゆとりを実感させ

内生の神髄に導いてくれる

難解なことばが
いくつも降ってくる
三太郎の小径

入選 心の写真

さいたま市（大仙市出身）

村上 呉 味

傾きかけた夕陽に向かって
目の前を ゆっくりと歩いて行く少年
不自由な足を引き摺りながら
黄金色に稔った田圃の畔へと消えた

空が薄ら明るみだした早朝

玄関戸を叩く音

”納豆 いらねすか“

あの少年が外にいる

以前見たのは

隣村へ 納豆を仕入れに行ったのだ

かなり遠くまで歩いて

幾らの収入にもならないであろう

健気さがいじらしく ジーンときた

町外れまで 用足しに出た夕方

小川の中で 牛を洗っている少年

藁の束子を手に 直向な後ろ姿を目にした

私の家庭が ゴタゴタ揺ぎ出し

少年を忘れ 見掛けることもなかった

施設で 仕事を習得していたのだろう

ひょっこり町で逢った時 もう中年で

不自由な足のことを忘れ

黙って見詰めてしまった

私のことは 知らないに違いない

ただ 私にとって忘れられない一人

彼を見る時 純な心で懸命に生き

ひょうひょうと歩く姿が伝わって来る

入選 遠野の風に吹かれて

秋田市 鈴木修 一

悲劇のはじまりだったんだね」

小さな発見 花のように愛おしみ

喜びの日には まぶしい白帆を上げ

嘆きの日には 大きな船を頼りつつ

人生の海の果てまで旅していこう

今と昔を奏でて回る
水車の音が誘い出し
頭上に満ちる赤とんぼ

いつしか 妻と私の魂も

青空の流れをすいすい泳ぎ

白雲の瀬を跳びはねる

とんぼのひと番^{つが}いとなって

互いのことを忘れぬために

以心伝心の羽ふるわせ

旅で見たもの 聞いたことを語り出す

「キュウリで河童を釣れという

とぼけた笑いの水の底

鰭^{ひれ}を揺らして黙りこむ大きな影

あれは何と言う名の魚だったろう」

「遠野の山を 何百とも知れぬ狼が

北へと走り去るのを

樹上から見送った人がいたそうだと

絶滅した日本狼の とどめがたい

永遠のような 束の間の

魂の飛行を終えて 我に返れば

見晴るかす田園は 黄金の色合いを帯び

稔りの秋はすぐそこに

地図が示す「デンドラ野」という

他界への 入り口のあたりへと

はるかな目を凝らしてみる

携えた『遠野物語』が影を与え

深めてくれる世界

人っ子ひとりいない不思議な刻^{とき}を

妻と二人 涼しい風に吹かれて

入選 時の中で

由利本莊市 佐林 宏 一

深い深いしじまの中で
小さな小さな吐息をつく
長い長い時の流れの中で
ほんの須臾の命を燃やす

無限の魂は宙を飛びかい
息づく心はここに存在する
寄せては返す波は
とどまることを知らず
思い出は時の中で舞う
行方定めぬ航路は
右へ左へと彷徨い
あてももなく漂う

確かに生きてきた大地
命をはぐくんできた鳥海^{とみ}の山
遠い遠い過去から
明日へと続く時
まるで空を飛ぶが如く

しなやかにしなやかに
時の中を泳ぐ

「人間到る処青山あり」

迷いの時の中で嘯いた
これは若さ故の特権であったか
あるいは愚かさであったか
しかも 未だ道は昏い

春は命が芽生え

夏は苦しくとも熱く燃える

秋は後悔の念に身もだえ

冬は不確実な春を待つ

そしてここで生き

やがて土に還る

グリーン賞 ほんの一瞬

能代市 工藤 美咲

すき

それは挨拶

気にいったもの

いとおしいものを

詰める宝箱を開ける鍵

すき

それは願い

触れたいひと

会いたいひとを

呼び寄せるため放つひかり

すき

それは呪文

消えないよう

離れないように

あなたの五感を麻痺させる毒

力を秘めたその言葉を

あなたはいつたいどう使うのでしょうか

口に出すならほんの一瞬の

ルールなどないその言葉を

わたしは何度何人に届けるのでしょうか

いつか中身を持たない

からっぽの台詞にならないように

文字にするならたった二文字の

グリーン賞 生命

札幌市（秋田市出身）

岩澤 類パブロ

また この地球で生きている
何度目の生を受けたのだろう
数え切れないほどかもしれない

宇宙の二回目の瞬きを見た

ばくは星だった

銀河を旅する運命さだめの生命いのち

また この地球で生きている

宇宙の千回目の瞬きを見た

ばくは地球人

生まれ そして死んでいく存在

また この地球で生きている

何度目の生を受けたのだろう

数え切れないほどかもしれない

生まれ そして死んでいく

それを幾度となく繰り返し

この地球の移り変わりを見てきた

次はどんな生命が待っている

次はこの地球で何が起きる

生まれ そして死んでいく運命の生命

グリーン賞 帰りぎわ

北秋田市 青木 帆花

ひとりきりの帰り道は不安がつゆる
みんなより大きく見える月は
唯一私の味方

長い暗闇に
古い街灯と
いやみな上り坂
うるさすぎるライトの音
心臓がしめつけられそう
私はもう一度暗闇に戻る

ほんとは何も見えなくて
空なんか見上げたりして
「きれいだな」なんてつぶやいてみる

気軽になった最後の上り坂を
ゆっくりすすむ

せみの声に目がさめて

ふたりに通ったオレンジの道
あつくるしく照る夕日は
私たちをぎゅっと包みこむ

短かなうねり道に
カラカラ回るチェーンの音
心は落ちつき軽々と
光る方へと導かれる
淡いキャンバスに入道雲がちらばって
「明日は雨か」と笑いあう

今日もこの坂を上りきった
たまには足をはやめてみよう

グリーン賞 ともしび

北秋田市 北村 紗奈

ゆらり、とひとつ光がゆれた
大小かまわず多少もかまわず
この暗い場所でゆらりとゆれた

暗い場所で道もなく

上も下かも分らない

この手にかかるランタンの

たったひとつの光がたより

近くの人々も同じだった

時に遠くまで見えるくらいの

まぶしい光を抱えて

うれしそうに歩き

時には吹けば消えそうな弱い光を

大事に大事に抱きしめて歩く

たまに、光が消えてしまう人もいる

でもその人の近くで声がして

涙をこぼすその人のランタンに

優しい光をわけてくれるのだ

人々のランタンはいろいろな形がある
四角だったり丸かったり

三角だったり六角形だったり

必ず同じものは一つとしてない

似ていても全然ちがう

そうだろう、と思った

人だって同じ「その人」はいないのだから

同じ進み方でもそれぞれちがうのだ

分けてもらった自分のランタンの光を抱え

暗いこの場所を進み続ける

自分だけのランタンと

自分だけの光を持って歩く

ゆらり、とひとつ光がゆれた

短 歌

短歌

最優秀賞 夏

能代市 堀内和佐

はつなつの校舎を出れば待ち受けるクジラの骨格みたいな雲だ
僕たちは抱きしめあった六月の光すべてに背くみたいに
やけくそで自転車漕ぐ「青春がないのも青春」なんて嘘だよ
君だけのためにあるんだ七月の光に満ちた渡り廊下は
五コマ目は自習がよくてカーテンが夏の光を抱きしめている
八月、とアクアブルーのペンで書いたならそこからあふれだす海
湿気ってる線香花火五本くらいまとめて点けてさようなら、夏

奨励賞 高尾山の気

秋田市 鈴木直子

春の日に高尾神社の赫鳥居大きく開き吾を呑み込む
参道の杉の落葉の間より背伸びしてゐる刺草数多
階は天へと向かひ真直なり九十九段も在るとは知らず
倒木の太きが参道を遮るも此に跨り易く越えたり
登り来し村人かつて憩ひたる手水処か 厚く苔むす
手に掬ふしみづ咽を滑り落ち一気にくぐる高尾山の気
奥宮に柏手打てば木霊して高尾山山頂に風吹きわたる

奨励賞 荒びゆく庭に

秋田市 佐々木 鏡子

継ぎ手なき老いし吾には荷の重く佇ちつくすのみ荒びゆく庭に
手をぬけば黄楊も櫟も蔓草に絡まれをりぬ息たえだえに
繁茂せる樹木の梢を揺らしつつ嬉しげに鳴く囁きの声す
裏庭を流るる小川のせせらぎを聴きつつ寝入りし幼時を偲ぶ
雪吊りを学びて樹々を勞りし夫の頭ちくる雪折れの木に
父祖よりの地を守り得ずにつひにわれ売らむと決すわがうぶすなを
ふたたびは訪ふことのなきわが家の鍵を手渡し思慕を断ち切る

奨励賞 石の階

秋田市 佐々木 義幸

御影石の古き階段くぼめるは人の百年踏みきし痕か
停電の階段室を辿りゆく谷の底ひへ向かふ心地に
花びらはつぎつぎ枝を離れくる桜しらじら散る甃の上
古道の石だたみ来て半ばより振り返れども谷底は見えず
石坂や道の隈廻を折るるたび心の隈を何かがのぞく
杉木立苔の生したる石段を数へて上る若き父と子
荒削りのままに積まれし石段の奥から今宵鬼は現る

入選 花輪囃子

鹿角市 沢田 欣之

「花輪囃子」の音に合わせて五歳児は太鼓に見立てる座布団たたく
提灯を下げし男衆二百人産土神へ手打ちの儀式
汗しとど雄叫び上げて太鼓打つ魂すでに神に預けて
十台の屋台奏でる「花輪囃子」狂うて踊って雄叫び上げて
煌煌と夜空を焦がす屋台十大音声あげ揃う駅前
夜を徹し「花輪囃子」を演奏し雨に帰れば明け初めにけり
夜を徹す二夕夜の祭やり終えて疲れし顔に自負心著し

入選 息吹

大仙市 浅利 繁雄

田の神と春の息吹に急かされて八十歳が種籾をまく
年功を積むトラクター黒煙をぼんぼんと吐き田を掘り返す
さわやかな緑の息吹みちみちて早苗田いちめん朝日に光る
分蘖の程好く進み植え時の列の曲がりも目立たなくなり
満ち満ちと稲田に注ぐ水の音 見歩くわれに幸をもたらす
豊作のきざしをみせて稲の花ほつほつと咲きはじめたり
放棄田の雑草よりも勝りつつ去年の落穂が勢い育つ

入選 ダリア「なまはげ」

秋田市 竹下 氣平

雄和の地適地となしてダリア園設う覚悟の先駆者確か
街に住む若者ダリアに魅せられてハウス五棟の耕作請け負う
米に代る転作花卉の花ダリアスマート農の魁ならん
露地植えの一番二番花捨てられて種子採りなれば止む方のなし
五十度越す夏のハウスの管理こそ秋花耀ういのちとなれり
正月も厳寒の季も休み無くハウスを衛る若きらの居て
数々の報奨受けたる鷺沢氏ダリア「なまはげ」世界を翔ける

入選 峡の花

五城目町 石井 美智子

山国に春の始めの辛夷咲き幼の靴も三和土に並ぶ
峡畑に鎌としやがめば花茗荷吐息のごとく葉裏湿らす
緋の色は強き色なり凌霄花母に会ふため走る近道
葎の花浮き上がるかに咲き募る捨て畑ひとつ夕暮れの路
稲の花咲けよ咲けよと暇道農婦の顔を真似て歩めり
葛巻ひて峡の川岸陰り帯び赤紫の花の香強し
蕎麦の花一面に咲く山裾を吹き渡る風白しと思ふ

入選 なあ文隆

潟上市 菊地 英雄

雨上がり海水浴に来てみれば「海の家」は貸し切り儲けもんだぜ
なあ文隆今日の目的は達せられたか出戸浜での海水浴は冥途の土産よ
そうだよな四十五年振りの再会にビールを飲もうぜ時を経て今
今日だけは暴飲暴食赦されるかもここは出戸浜「男」の海水浴場
焼きイカ焼きホルモンおでんに枝豆さあビールで乾杯するべ
寒風山泣く子はいねかの真山本山遥か仰げば鳥海山よ
遠浅の出戸浜の海に浮き輪を浮かべ天を仰げば二人言うことなし

入選 なまはげ

男鹿市 三浦 善隆

ユネスコの無形遺産に叶いたる来訪神のなまはげ誉れ
なまはげを郷の眞守と信じる産土人のころね深し
里人に吉事もたらず化身ともなまはげ文化男鹿に息衝く
なまはげのとよもす声の遠退くもなお確かめき戸の隙間より
囲炉裏辺になまはげの由来武帝とう翁説く外霏々と雪積む
なまはげの去りて余韻のあるざしき自在鉤まだ揺れおさまらず
この家の今年の厄を落としたるなまはげ去りて除夜の鐘聞く

グリーン賞 花のように

能代市 工藤 美咲

離しやすいくらいの強さで手を繋ぐふたりはずるいところが似てた
「大丈夫」は見抜かれたくてついたうそだけきみはただ「そう」とうなずく
ストローでグラスの氷を転がせば夜は別れのために渴いて
さよならに納得しているその声がほっとしていいやにさびしい
鏡の奥メイクの落ちたその顔は誰のものでもないひとの顔
いいねって言われて伸ばしたえりあしを切ってさよならあなたのわたし
少しずつ確かに育つ花のようにわたしはわたしのまま変わるんだ

俳
句

俳句

最優秀賞 山の日

五城目町 石井 美智子

山の日の大きく握る塩むすび
またひとつ山を覚えし登山杖
黄のリボンつけて一列登山道
汗伝ふ首筋撫でて山の風
ひと時の息継ぎ誘ふ清水かな
花の名の謂れ手帳に登山果つ
登山靴洗ふや空の晴れしまま

奨励賞 太子堂

由利本荘市 佐々木

成

杜の奥一輪草の風さやか
太子堂の軋む大戸や竹の秋
うぐひすや堂に開祖の木彫り仏
仁王像の脛の鉦跡木の芽冷
遠野火や上目遣ひの天の邪鬼
奉納の千の折り鶴春の色
太子堂包む瀬音や露の臺

奨励賞 ジオパークの里

由利本荘市 佐々木

豊

九十九島代田広がるジオパーク
神宿る峰への使者か御来迎
岩に湧く霊水修験の滝となり
納曾利舞ふ神秘を醸す滝木霊
夏霧や奇形の櫛の謎めいて
有耶無耶の関の難所や懸巢啼く
浮島の太古の池塘秋の声

入選 霜月神楽

秋田市 白井 道隆

舞ひ継がる最古の湯立神楽かな
厳かに祓ふ湯加持の神楽殿
巫女の舞ふ霜月神楽優雅なり
霜月の神楽激しき丑の刻
真剣の眠気断ちたる神入舞
夜を徹し三十三番神楽果つ
神楽終へ保呂羽の里の朝ぼらけ

入選 薄暮残像

―通所介護施設にて―

横手市 山崎 勝重

着ぶくれてやつと取り出す体温計
爺婆もいとしをらしき雛の前
饒舌の媼になごむ梅雨の午後
昼寝より醒めて老軀へ戻りけり
薔薇愛でし翁はかつて自衛官
垂乳根の話飛び出す日の盛
やわらかき老婦人の夏丘に満つ

入選 手術

秋田市 松井 憲一

料峭や五臓をさぐる超音波
告げられし開腹手術梅真白
静寂は手術の序曲廊おぼろ
花冷や麻酔醒めれば手術痕
身に纏ふ命の管や暮の春
仰臥しの吾を里山へ遠郭公
新緑の大地踏み締め退院す

入選 喃語

由利本荘市 土谷 敏雄

胎の児とくぐる夏越の祓かな
麻柄を裁ち厄除けの浴衣かな
天花粉買ひためて待つ生身魂
一物を誉めたつぷりと天花粉
盂蘭盆会母似父似で夜の深む
喃語にはヂヂババ混じる歳の暮
新米の餅背負はせむ然も急くな

入選 ふる里の日々

にかほ市 宮本 秀峰

ふる里の目覚めは早し遠郭公
草笛を吹いて昭和を呼び覚ます
一湾の波を鎮めて海開き
故里の闇の旨さに蚩舞ふ
廃校となりし母校や虫の闇
鳥海山の風余さずに稲熟るる
灯を消して寝惜しむ窓に銀河冴ゆ

入選 円形のある夏

秋田市 秋野 護

円心の孤独に酔へり水馬
荒梅雨の舗道の水輪生まれ逝く
大鯉のあぎとふ波の浮き葉かな
街灯の円の幻想夏の霧
蜘蛛の囿の霧雨を抱き定かなり
弧と見ゆる水平線や青岬
夢幻なる水母の宇宙観て飽かず

入選 旅鞆

秋田市 舟山 つぐみ

夏曉の始発電車の旅鞆
飛び石に残る雨水姫ざくろ
子規庵の縁にひとすぢ蚊遣香
句碑に添ふ水引草の撓りかな
餡蜜のまるまるしかく崩れけり
百戸の灯車窓の街に夏夕べ
星涼し旅の荷ひとつ解き置けば

入選 母の里

大潟村 田村 陽子

うす雲やほぐるる芽木の色にじむ
あめつちの季語の飛び交ふ花の山
天衣かと松に耀ふ山桜
母の里香ふくよか花林檎
雉子走る一羽は母の袖柄
木もれ日や瀬音涼しき子守唄
万緑に包まれ訛りやはらかし

入選 母の帯

にかほ市 齋藤 みどり

春寒しきりと結ぶ母の帯
のどけしや貨物列車の長長し
花疲れどっぷり浸る終ひ風呂
雨音の一つにあらず梅雨最中
番楽を終へて安堵の初秋かな
出会ひより多き別れや鳥帰る
雪女住み着くやうに村眠る

グリーン賞 秋の風景

秋田市 村田 優衣

鳥鳴き手繋ぎ帰る秋の夕
ちんちろと夜の楽団虫の音よ
満月に「兎」と笑う稚児かな
うっとりと銀杏並木を歩く君
赤と黄に山粧うは誰が為
狭い傘肩を濡らすは秋時雨
金色の稲穂揺らすは鮭風

入選 七月の産声

横手市 片倉 弓

七夕や産声待てどそれつきり
夕立のあがり産声響く空
産声の旺んな夏を押し開く
でかしたと父の一声喜雨来る
若楓生れてつかみし陽のかから
夏の朝乳白色の嬰の香
七月の吾子の未来を抱き上げる

川

柳

川柳

最優秀賞 心の軌跡

秋田市 菅原 浩洋

ときめきを街で拾ってまだ男
待つ人の扉は広く開けておく
マックスで荒野を駆ける鬼となる
風紋の心の軌跡繰り返す
ひと山を越えて大きな虹を得る
わたくしを丸ごと呑んで陽が沈む
未来図へ生きる明日を温める

奨励賞 兄弟愛

秋田市 荒木 小菊

百合の香と潮騒がある墓参り
母の画にふたりの兄と妹と
だだちゃ豆ああ故郷の色がある
世の波に揉まれほんとの愛を知り
誇るもの兄弟愛という血筋
父の歳越えて逝こうと酒交わす
座布団の枕も義姉の思いやり

奨励賞 太陽と月

大仙市 佐藤 啓子

恋は不意 南瓜畑の真ん中で
夕風がキラキラ妻になりました
日溜りで光る座着もイクメンも
永遠を誓えば倍になる笑顔
時々火花ハートを剥き出しに
太陽をやさしく抱く満の月
藁婚へいのちの音が響き合う

奨励賞 親と子

由利本荘市 大滝 静

わかってる何も云わないその心
ふりむけば笑顔がみえるそんな位置
思いきり生きてほしいと願う母
おっかあが女神さまだと末息子
かけねなく愛しているよ子どもたち
辛いとき泣いてほしいと思う親
いつの日かお別れの日がやってくる

入選 ひとりって…

由利本荘市 澤田 幸代

朝刊で世情チェックという日課
持て余し日がな一日草むしる
わたくしの魂だろか雲は北
小綺麗な母で在りたい薄化粧
体重が増えた気がする無口な日
ひとりって自由だけれど転べない
どの花も笑いこけてる雨上がり

入選 メルヘンの世界

大館市 近藤 桃春

親と子と至福の時に浸る夜

読み聞かせ夢の世界で遊ぶ子よ

切なさをまあるく包む騎士^{ナイト}の手

破顔一笑 小さな福が舞い降りる

メルヘンの世界に翔んで蝶になる

孫抱いて童話の中へ 祖母の腕

俯瞰して視てきた過去の生き証人

入選 わたくしの道

秋田市 田村 美穂子

友が逝く マリオネットの影法師

白旗を上げてしまった抱き人形

遠回りしても探せぬネジ一個

ネジ一個ごときで私泣きません

時々は脇道を行く叛逆児

炎天下 溺れるように飲む冷茶

わたくしの道を見つけてハイタッチ

入選 残照

秋田市 佐藤 明子

持久走ですな人生なあ夕日

一枚の鏡残照もて余す

もう少し待ってよ熟れている途中

燃えるのだ凌霄花そそのかす

欲を捨てやっとな自分の絵が書ける

老化にも少し下さい便利な世

呆けた分やっとな気楽に生きられる

エ
ッ
セ
イ

エッセイ

最優秀賞 プリンセスの王冠

秋田市 蓬田 真弓

古いアルバムを見付けた。父が亡くなった後、片付けのため実家を訪れたときのことである。写真を撮るのが好きだった父は、誕生から節目節目の行事の折の写真などを入れたアルバムを私たち三人姉弟に作ってくれていた。

私は子ども時代、このアルバムを見るのが大好きだった。私の幼少の記憶のほとんどは、このアルバムの写真を通して再構成されたものではなかったかと思うくらいである。

久しぶりにその懐かしいアルバムをめくっていくと、「おやつ」と、気付いたことがある。私たち三人姉弟のお誕生会の写真がいくつか見られたのである。

昭和四十年代、子ども時代の最大イベントといえはお誕生会である。小学校の低学年のころ、自宅に友達を呼んでお誕生会をやるのが、大きな楽しみだった。招かれる方はどんなプレ

ゼントを持って行くか、どんな服装で行くか、あれこれ考えた。招く方はどんなご馳走を準備するか、どんな趣向を凝らすかなど、心を砕いた。

見付けた写真は、どうやら姉のお誕生会のようだった。白いレースのドレスを着て首から折り紙で作ったチェーンのネックレスをかけた姉の姿が写っている。頭にはプリンセスの付けるような王冠がのせられている。私や招待客も着せ替えられたのか同じ格好で別の写真に写っている。グラビア写真のようなものである。三つ下の弟は、ドレスは着ていないがやはり同じ王冠を被っている。プリンセスのように。

白いレースのドレスは母が縫い上げたものである。たぶん、当時のレースのカーテンの生地に残り布を集め、ミシンで縫ったものだろう。

プリンセスの王冠は、厚紙を王冠の形に巻いて作られている。周りに金紙か銀紙を貼り付けて、星やダイヤの形の折り紙が散らしてある。完全なる母の手製のものである。白黒写真なので色は分からないが、かなりの光沢を放っていることは分かる。

我が家は両親が郵便局に勤める共働き家庭だったから、文字通り寝る間も惜しんで母が

作った物に違いない。お誕生会で子どもたちが喜ぶ顔を思い浮かべながら準備したのだろう。

ご馳走もどれくらい時間をかけて作ったのか、一人ずつ、大皿に揚げ物、スパゲッティ、ゆで卵、ウインナー、ポテトサラダなどきれいに盛り付けられていた。

写真を見て、なぜ「おやつ」と思ったかという、そのプリンセスの王冠を見て、我が身のことになることに気付いたからである。

私は昨年まで三十四年間教職に就いていた。小学校の教諭である。そのすべてが学級担任であり、主に小学校の低学年を担当していた。若い頃は仕事をこなすのが精一杯で日々の授業に追われていた。

しかし、ベテランと言われる年齢になると、どうにか子どもたちに、楽しく分かる授業はできないものかと思うようになった。

道徳の授業では、役割演技を取り入れてお姫様の扮装をした。物語の世界に子どもたちを引き込み、よく考えることができるようにとの思いからである。その時に作ったのは、まさに写真に写っているプリンセスの王冠とほぼ同じ形のものである。

生活科の「町探検」では、探検大魔王の指令

を子どもたちに与えるという設定でマントを付け、シルクハットを被った。シルクハットは黒いボール紙で時間をかけて作ったもので、マントは自宅にあるアップライトピアノのビロードのカバーを体に巻いたものである。

同僚からは、「その年でもよくここまで」と賞賛とも揶揄ともとれる言葉をもらったが、やっている私はわくわくした。目の前の子どもの喜ぶ瞳がなによりのご褒美だった。

写真を見て、「ああ、これは母親ゆずりのものだったんだ。」と、不思議と合点がいった。母もこんな気持ちでお誕生会の準備をしてくれていたんだなと、思うと何となくうれしかった。

母は、傘寿を過ぎて、米寿を迎えようかという年齢になった。

母を産んでくれた祖母は母が幼い頃に病気で亡くなっている。母はずっと、自分に子どもができたら、こんな風にやってあげたい、こんなことをしてみたいと思っていたのかもしれない。自分が味わった寂しさを子どもには感じさせたくない。

残念ながら、母は今では、私たち三人姉弟を育てたことも、育てた家も忘れてしまった。私

の名前も時々忘れたり、呼び間違えたりする。

父の亡きあとは、養護施設で暮らしているが、ときどき実家に連れて帰ってきている。そこで、アルバムをめくりながら、母にいろいろ話しかけ、昔の思い出を語る時間をもっている。「んだったのか。あど、わがらねな。」

と、言いながらもアルバムを見ている母の表情は柔らかい。母はすっかり忘れてしまっても、私はずっとこのプリンスの王冠を被り続けていくのだろうと、ひそかに思っている。

奨励賞 ゆきしんしん

秋田市 鈴木 護

「ほほえみがつまのどうこくゆきしんしん」
もう三十五年は過ぎた。通勤途上のカラオケからの、耳の記憶だけの俳句だ。なぜかずっと心に残っている。琴線に触れてくる言葉の力というものだろうか。一瞬耳にただけなのに、今も心に残り続ける。

俳句らしきものを始めて十年。本気で結社誌に投句しだして七年になる。

リタイア後の持て余す時間を試行錯誤の末、紙と鉛筆があればできそうな、川柳、俳句、短歌のどれかにしようと決め、NHK学園の通信教育を始める。入門講座を一年ずつ受講し、自分に適するものを探すつもりだった。課題と格闘しては、やっと提出をし、添削、講評、評価をもらう。六十歳の手習いよろしく、自分で言うのもなんだが、かなり勉強はした。そして、三年。三つのコースを修了した時の結果は、俳句が最悪だった。

ここで、いつもの天邪鬼が頭をもたげてくる。男の平均寿命が八十歳にならんとするあたりだったか。時間なら十分過ぎる程ある。一番ダメな俳句に取り組めば、勉強も努力も必要だから、認知症対策にはなるだろう。自然と触れ合うのが俳句だから旅もできる、などと屁理屈を並べ、さらに半年間の講座を受講する。

同時に、カルチャースクールの俳句教室に参加する。だが、通信講座を上回る内容はなく、どこか物足りなさを感じてしまう。そこそこ基本を学んでいたことと、多くの添削指導を受けたことで、中央と地方の俳句観の違いというようなものに戸惑ったためだったのだろうか。

そんな折、藤田湘子の本に触発され、二つのことを実行してみる。

一つは、「著名俳人の句集・鑑賞文など、俳句の本を百冊は読め」という一文だ。以来、購入と図書館からの借り出しで、必要と思われるものを次々に読み、今も読んでいる。

経験してはじめて理解できることも多いし、作句数を積むに従い多少の成長もあるのか再読することも多くなった。

二つ目は、「初学から三、四年の間に、共感する結社の俳句雑誌を購入して投句せよ」とい

う教えだ。その言葉を信じて、少し俳句らしくなったと自負する頃、NHKテレビで雰囲気に関心した講師の結社誌を購入し、投句を始める。

湘子は、投句数の五倍はつくれと説いているし、波多野爽波にいたっては、投句数の二十倍はつくったと誰かが書いていた。まあ、十二、三倍くらいが妥当なところと心に決めて、十日で三十余句、月に百余句をノルマとして作り続ける。いわゆる多作多捨だ。

誌友の頃は、そこから月に五句を投句して、よいときは三句、悪いときは二句が雑誌の一般投句の欄に載った。三年半続けて、同人の端に加えてもらい、今は毎月七、八句を投句している。よければ四句、悪いと三句が同人欄に載る。

三年目くらいの、読み続けて百冊を突破したあたりだったろうか。無数にある作品の中に、偶然、あの記憶の「俳句」と出会ったのだ。

「微笑みが妻の慟哭 雪しんしん」。心に描いていた文字が並んでいた。感動する。作者は、折笠美秋。一字空きの俳句だった。

折笠美秋は、新聞記者の傍ら、俳句作品や俳

句評論を精力的に執筆したという。しかし、四十代後半だろうか、筋萎縮性側索硬化症（ALS）を発症。全身不随となり、わずかに動く口と目だけで、夫人に意志を読み取ってもらい句作を続けた人だという。

俳句に関心のなかった私には、知る由もなかったのだが、その第二句集『君なら蝶に』は広く読まれ、夫人の手記から、ドキュメンタリーやテレビドラマも制作、放映されたという。夫人の献身への感謝、その心情への思い、悲しみの諸々が、この句の中核だと思われる。句集名の『君なら蝶に』は、これらのすべてが込められているのだと思う。

ちなみに、筋萎縮性側索硬化症というのは、脳にある運動機能の神経細胞に障害が出て、脳の指令が筋肉に伝わらなくなる病気だ。意識や五感は正常で、知性を保ったまま、手足の運動障害、コミュニケーション障害、嚥下障害、さらには呼吸障害も起きるという。イギリスの車椅子の天才物理学者スティーヴン・ホーキング博士がこの病だった。

「この境遇にして、この俳句あり」というべきだろうか。すぐれた俳句にこもる余情が、当時の私の心を打ったのだと思う。作者の心が、

一直線に心を打ったのだと思う。俳句の素人の私の心に残り続けた、十七音のすばらしさ、強さに感動を禁じえない。天邪鬼の心ではなくて、三十五年前ラジオで聞いた句のもつ力が、私を俳句へ向かわせたのだと思う。今は確信へと代わっている。

俳句づくりは、今、私が老後を豊かに過ごすための大切な手段となっている。

古今、著名な俳人は数多く、その作句のありようも多様である。同時に「結社の俳句は金太郎飴」と山本健吉が評したことも念頭に、主宰の句を真似ることは厳に慎むべきだと思っている。ひたすら「人間風土を詠む」という結社の目標に向かって、目を凝らす毎日である。己の進むべき方向を探し求めるためにも、優れた作品と著作を読み、学び、工夫を続ける不断の努力が大切だと心している。

これからも、結社への投句を中心に、カルチャーの仲間、吟社の面々と切磋琢磨していきたいと思う。そして、一句でもよいから、「しんしん」と、誰かの心に響き、止まる句が詠めるように努力を続けたいと思う。

奨励賞 ねえ、サンフラワー

秋田市 豊 葦 瑞 穂

幼い頃、私はヒマワリに恐怖を感じていた。自分よりも背が高く、その上、目が痛くなるくらいに明るい色でガラガラと存在感を放つ姿が、大口開けて獲物を狙う化け物に見えたからだ。

初めての対面は小学一年生のとき。学校の花壇に植えられていたそれに衝撃を受けた。固くて、大きくて、平たい。花というにはあまりに遅しく、変わった風貌。私の脳裏には、当時本で読んだ「人間を喰らう植物」が浮かんでいた。現実には存在するはずのないそれが、自分の目の前にいる。いつ食べられてしまうかわからない。今思えば随分と突飛な発想であったが、その時の私は本当にそう思っていた。しかし化け物は、怯える私なんかには見向きもせず、ただ真っ直ぐ前を見つめているだけ。私は、少しだけ悔しかった。

ヒマワリの新たな一面を発見したのは、中学

二年生のとき。陸上部に所属していた私は、水筒とタオルとスパイクをエナメルバッグに詰め、自転車をこいで競技場へ向かっていた。日曜日の朝ということもあって、道に人は少ない。いつもより静かな町の中、前輪上の籠から少しはみ出たエナメルバッグのガタガタ鳴る音が響いていた。

横断歩道、赤信号。私はブレーキをかけ、腕時計を見た。練習開始の三十分前くらいに到着できそうだった。予定通りで気分がいい。

フワリ。少し控えめに風が吹いた。頬を撫でるそれに、気温の上昇を予感して憂鬱が頭をかすめる。すると視界の端にチラリと明るい黄色が覗いた。ヒマワリだ。まだ昇りきっていない太陽に照らされて、凛と佇んでいる。朝の澄んだ空気とやわらかな光に包まれたその姿は、どこか厳かであった。一瞬、見惚れてしまった。しかし、すぐに我に返る。なぜならヒマワリは、太陽しか見ていなかったからだ。私のことなんて気づいちゃいない。出会った頃からそうだった。この化け物は、狂気的なまでに、一途に、太陽だけを見つめ続ける。周りのことなんてどうでもいいのだ。そんなこいつが、私は今も昔も大嫌いなのだ。一瞬でも見惚れた自分が

恥ずかしい。

私は、信号が青になってすぐ、逃げるようにしてその場を去った。風を受けて揺れ動く自分の前髪が、いつもより鬱陶しく感じた。

そして私は高校生になった。現在は二年生の夏。この季節がくるたびに、あの化け物が現れては私の心をぐちゃぐちゃに掻き回して枯れていく。月日が流れ、私は成長し、登下校の道のりも変わった。それなのに、この季節に湧く独特の重い感情だけは、毎年変わらず私の心に訪れる。正直、もううんざりしていた。しかし、どうやらそれも今日で終わりをむかえるようだ。そう思わせるほどの出来事が、あったのだ。

下校中、幼い頃よく遊んでいた公園に足が向いた。ただの気まぐれ。時間もあるし、勉強の息抜きにもなるだろう、という程度の考えで来ただけだった。

場違いのようにも感じられる高校の制服と硬いローファーで、久しぶりにその芝生を踏んだ。思いを馳せるのは、幼き日。あの頃一緒に遊んでいた友人のモエちゃんは引越してしまっただけで、今では連絡さえも取ることがなくなっ

ている。セピア色の思い出だけが私の中に残っている現状。人と人とのつながりは、時とともに少しずつ消えていくのだということを実感する。感傷が広がって、伸ばした髪が風に吹かれた。

揺れる黒髪の間隙から、あいつの気配を感じた。ヒマワリ。そういえば、モエちゃんはこの植物を気に入っていたようだった。私は怖くて近づくことすらできなかったのだけれど。

空がオレンジ色に染まる夕方。長く伸びた影が、少しだけ昼よりも涼しくなった空気に浸って揺れている。ヒマワリは、やはり、太陽だけを見つめていた。しかし、影の落ちたその表情は切なげで、まるで初めて見る花のようだった。否、初めて見たのだ。その花を、花として。

私は、何かに惹きつけられるかのように歩き出した。花が近づいてくる。心がグルグル回って、足元がフワフワする。垂れ流された感情は、正確な思考を奪っていく。嫌悪一色だったそこに紛れ込んだ、プラスの感情たち。恋を知った乙女のようなその花を化け物と呼んだ、申し訳なさ。いつもと違う表情を見た瞬間に湧いて出た、親しみ。グルグル。グルグル。目が

回りそう。

なんとなく、手を伸ばした。指先が、花卉に触れた。

はっと我に返る。一瞬で心が凪いで、ゆるやかに時間が流れる。心なしか、以前よりも視界が開けているように感じられた。

私は、軽やかな足取りで帰路についた。次にヒマワリと再会する時、何を感じ、何を思うのだろうか。久しぶりに、未来が楽しみになった。

最優秀賞受賞のことば

受賞にあたって

短歌部門 堀内和佐

この度は私の作品を最優秀賞に推していただき、たいへん嬉しく思います。私は能代高校文芸部の活動の一環として、このコンクールに応募しました。若輩者ながら、このような賞をいただけたことを光栄に思います。この場を借りて、ご指導くださった顧問の先生に感謝申し上げます。

私は現在高校三年生で、このコンクールへの応募をもって文芸部からは引退となりました。私にとって文芸部としての活動は大切なものであり、私の生活は常に詩歌、特に短歌と共にありました。そんな部活動生活をこのような形で締めくくることができるのは、私にとってとても幸せなことです。この経験を糧にして、今後個人的に創作活動に励みたいと思います。ありがとうございます。

ハギビスの日に

俳句部門 石井美智子

折しも、台風一九号のなか「あきたびじょん」の封筒が届きました。開封すると「あきたの文芸」俳句部門の最優秀賞に決まったという知らせでした。

昨年が続いての受賞に驚くとともに、様々なことに感謝の念が湧いてきました。

感謝すべきは、今まで出会った人々であり自然でありまさに森羅万象に対して抱くところです。

現象が私のなかの何かと呼応して、俳句という形になって生まれてきます。今はそのことを存分に楽しみたいと思います。

しかし、今回の台風の被害の大きさには言葉を失います。自然の厳しさをまたしても知らされました。

この台風には「ハギビス」という名前があるとか。台風委員会というのがあって、一四〇個ある名前を順番に使っていくのだそうです。

もうこれ以上の台風が来ないことを祈りながら、筆を置きます。

川柳裏話

川柳部門 菅原浩洋

私は人間ウオッチングが大好きで、昼も夜も街を徘徊します。いつまでも心ときめく男でありたいし、新たな美しい虹の前に立ち尽くしたい。

この歳で100メートルを14秒台で走るには鬼と化すしか術がありません。爆弾を抱えマックスのスピードを磨いています。

少年期、真っ赤に燃えて沈む夕日をバックに、泥んこになってねぐらに帰りました。いつかその太陽に丸ごと吞まれて本望です。

風紋の織りなす綾と、風雪に耐えた心の軌跡が重なります。風紋は穏やかに、足跡や指紋を跡形もなく消し去るでしょう。

百歳を目指して、大切な人、寄り添う仲間、明日への希望があれば、人間逞しく強く生きられます。未来図は自分の手で描きたい。

選をしてくださいました選者の先生方に深く感謝申し上げます。

詩の国秋田に生まれて

エッセイ部門 蓬 田 真 弓

大変大きな賞をいただき心から感謝申し上げます。郷土秋田に生きる人々が育んできた詩の心、文芸への思いなどが刻まれた「あきたの文芸」に選んでいただき、とてもうれしく思っています。

私はこれまでずっとこの秋田で育ち、生きてきました。四十代になつてからは、短歌の定型に心惹かれ、秋田に生きる気持ちや自分の身の回りのこと、心に響いたことを歌に詠んできました。

一昨年、父が亡くなったとき、自分なりに父の人生を思い、挽歌を詠み、小文を書きました。それが初めて書いたエッセイになります。その後、今度は母のこともエッセイというかたちで書いておきたいと思い筆をとりました。これからもこの受賞を励みとし、言葉に心を乗せて表現していきたいと思っています。

選 評

小説・評論



夢を描く

六 郷 博 志

今回応募があった作品は10編。その多くが、「夢」をテーマやモチーフ、伏線などとして扱っていることにまず驚いた。この夢物語群を読み進めるうちに、私は若い頃に何度も読んだ漱石の「夢十夜」を思い出していた。おぼつた子どもが実は自分が殺した男だったという話、運慶が木から仁王像を掘り出した話など一話一話が今でも鮮やかに蘇ってくるが、中でも一番面白かったのは、何万頭もの豚が集団で絶壁に立つ主人公を襲ってくる第十話だった。荒唐無稽で無秩序なようで、十話全体が一つの大きな夢になっていくような感覚にとらわれる、不思議

議で魅力的な作品だった。

「夢」をモチーフにした作品は古来星の数ほどある。そんな魅力的な「夢」を応募者がどう料理したのかも合わせ、楽しんで審査することができた。

奨励賞は「夢のごとく」。肺がんで入院した鳶職だった夫と彼を粘り強く支える妻の物語だ。愛情をストリートにぶつける妻と、感情表現が不器用な夫の組み合わせがいい。妻の言うことをきかない破天荒で亭主関白の夫が、死への不安と闘病の中で少しずつ妻の言葉を受け入れる展開を、温かくユーモアに満ちて書き進めていて、大いに共感して読むことができた。テンポのある文体でエンディングも見事。クライマックスは夫の夢の場面だ。少女だったころの妻が母親の世話をしている光景に、夫は初めて妻への感謝の言葉をこの夢の中で口にし、夢からさめた夫は妻への頑なな心を氷解させることになる。物語の展開はありきたりだが、作品全体にとって作者の暖かな思いが伝わるこの「夢」があつて私はよかったと思った。語り手が夫と妻の間を行き来して、読むときにとまどったのは少し残念だったが、賞にふさわしい作品だった。

入選の「孫と読む『忘れられた巨人』」。

祖母が孫娘に、カズオ・イシグロの「忘れられた巨人」の読み解き方を伝えながら、物語の醍醐味とテーマを語っていくという評論のスタイルとなっている。文体が簡明でよく練られており、読むことの楽しさがスツキリと伝わってくる。最後に、物語の続きを「夢」として描いて、読みを拡張する手法も秀逸だ。孫娘が夫婦の愛の夢をエピソードとするのに対し、私（祖母）は愛の結末を死とする夢を提起する。ただ、終わりに「巨人」を民族の歴史と絡めてテーマを付け足したのは少し消化不良だった。孫娘の考えや読みを入れ込んで作品の幅を広げることと合わせて、次作にも期待したい。

同じく入選の「夢物語」。両親を事故で亡くした不幸な人生を歩む主人公は、ある日を境に時々夢を見るようになる。そこにはもう一人の自分が結婚をし家庭を持って幸せに暮らす世界があつたという、パラレルワールドを題材にした小説だ。もしあの時違う選択をしていたらという誰もが思う夢を、平明で淡々とした語り口で綴っている。物語の展開のリズムもよい。ただ、パラレルワールドと現実の絡み合いが浅かったのが残念。現実世界の人物をもっと丁寧

に描けば、二つの世界のリアリティが出ただろう。

グリーン賞の「鷺の花が舞う森で」。大学受験に向かう夏休み、主人公は夢で少女と出会う。ひと夏の不思議な体験を経て、一年後、合格した大学のキャンパスで少女と現実に出会うことになるというストーリーはありがちな展開ではある。しかし、ともすれば停滞しがちな事件を、描写を削いでリズムよく書き進めたことが心地よい。登場する二人も好感が持てて読後感も爽やか。この後もぜひ書き続けてほしいと思う。



選考に携わって

石 黒 みどり

文章とは己の蒙昧を拓く苦しい作業から生まれる。応募作品を読みながら各人が世界と感得する自身の核を表すべく、虚空に鑿をふるって物語を、あるいは思弁を紡ぎだすそのエネルギー・忍耐にまず感服した。

さて、今年の上半期芥川賞選考を最後に高

樹のぶ子選考委員が退任する。十八年に及ぶ在任だったが、きっかけの一つに数年前のある受賞作が理解できなかったこと、今もってその良さがわからないことを挙げていた。リアルな体験を元にするのではなく、自分の頭で想像して作り出すタイプの小説が多くなったという候補作全体の流れに触れながらそうした傾向は社会の停滞による作家の五感の弱体化に起因すると指摘する。

その時代に動いているものをキャッチし小説の中に落とし込むことが求められる賞とわかって尚、社会的リアリズムを作品に渴望する氏の創作の原点には「文学の力」への期待があるのかもしれない。しかし、私は人間の滑稽さや不確かさ、奇妙さ、恐ろしさ、痛ましさ、哀しさが浮かび上がるのなら社会の衰退に呼応するシンボリックな作品にもエールを送りたい。選考に携わりながら改めてそう思った。そこに希望や変革の力がうかがえなくともである。

小説・評論における入賞の条件としては以下の点を重視した。読者が文章に違和感を覚え内容に集中していられる読みやすさ、没入感があること。評論は、対象についての魅力・洞察を述べつつ、人生における本質的な意味に気付

かせてくれるもの。小説は、寓意的設定であってもキャラクターのリアリティ、切実さが伝わって読み手を揺さぶるもの。類型的、既視感のある人物造型でないこと、予定調和的な人生観が通底していないこと。選考委員各位に押しどころの濃淡はあってもこれら観点は共通していたように思われた。

奨励賞の「夢のごとく」は闘病をめぐる老夫婦の心境ややりとりで人生の味わいがにじみ出ている。秋田県民の体温、見慣れた風景や隣人の生活に触れたような読後感がある。主人公の人間性の転換点とされる夢の挿入は、死への恐怖を契機に古めかしい男としての矜持を脱ぎ捨てる道具立てとして効果的ではある。次回は大人のメルヘンを超える世界観で描写力の妙を発揮してほしい。

入選の「夢物語」は現代の感性にマッチする寓意的作品である。喪失感により現実世界での生命力を削がれた青年が別の世界で生きながら虚無の穴を埋め、存在証明を成し遂げてこの世を去る。この世の幸せのルールからはみ出したまま彷徨わざるを得ない孤独な魂の救済がかくも慎ましい自己完結なのか。令和になって噴出した一連の事件とも重なる、社会から隔絶さ

れた人間の哀しさを内包するとは穿ちすぎか。

「孫と読む『忘れられた巨人』」はブックガイドの体だが書評として面白く読み進められる。豊富な語彙をかみ砕き、わかりやすい言葉で伝える表現力は群を抜いていた。現在の緊迫した国際情勢を物語として捉えるフレームを未来を創る若者に届けるという設定も使命感が伝わる。但し、世代間の視点の交錯による解釈の深まりという展開には欠けた。また、日米・日韓関係の解釈が表層的で物語のテーマを援用しきれていない。日本が被害も加害も埋葬し忘却しようとするのは「竜の息」に該当する何によってなのか。ここが再創造の魅せ所だったかもしれない。

グリーン賞「鷺の花が舞う森で」は文体にリズムがあり地の文で読者を物語に引き込む力に将来性を感じる。但し、夢で逢う彼女との関係性に説得力がない。受験の疲弊を癒やす彼女の魅力が伝わらないと独りよがりな物語で終わる。いや、夢からぬっと日常に滑り込む彼女に違和感のない感性の表出か。

夢を契機に新たな現実を生きる者、夢の終わりとともに現実をフェードアウトするもの、夢うつつに現実を生きるモノ。

掲載された小説はいずれも夢をモチーフとしている。評論も眠りに通奏されている。魔女のラリホーに、令和の時代が覆われないよう祈りたい。



読者の存在を 忘れずに

渡 辺 修

作者それぞれの思いの詰まった原稿を読ませていただくのは楽しいひと時だが、それを評価し、点数をつける作業は苦しく悩ましい。入賞・入選者はもちろんだが、選に漏れた方々もどうか書き続けてほしいと切に願う。

奨励賞に推した「夢のごとく」は、病気をきっかけとして変化していく夫婦の関係性がうまく描かれている。橋梁鳶の世界や病院での検査や入院の様子など、しっかりとした取材がなされているのにも感心した。文章は読みやすく、読後感も爽やかである。

入選の「孫と読む『忘れられた巨人』」は、素直で読みやすい文章で、作品の魅力をとても分かりやすく伝えてくれる評論だった。せっか

く孫との対話という形を取ったのだから、もう少し世代間の意見・意識の違いを際立たせてほしかった。特に巨人と日韓関係についての考察は、もっと掘り下げてよかったのではないかと思う。

もう一つの入選作「夢物語」は、夢の中で別の人生を歩むもう一人の自分に影響されて、少しずつ変わっていく主人公の日常を淡々と描いている。人との関係を徐々に取り戻していく過程は読者の共感と期待を抱かせる。それだけに結末の評価が分かれた作品だった。

グリーン賞の「鷺の花が舞う森で」は、受験期の主人公が夢の中の少女に依存し、執着していく姿が描かれている。物語を破綻させずにまとめ上げたところに、作者の力量と可能性を感じて推した作品である。端正な文章も魅力的で今後に期待したい。

以下は受付順で短く触れる。

「令和元年まんが家になりたい」は、作者が気持ちよく書いていることは伝わってくる。独りよがりにならず、大切なのは読者を気持ちよくさせることだと気付いてほしい。

「秋田遠征記」は、もっと設定と構成を整理した方がよい。話が脱線しすぎて本筋、すなわ

ち読者に何を伝えたいのかが、最後まで見えてこなかった。

「沼」は、少年の思い込みから起こる騒動を描いているが、少年の行動に説得力がないので共感し難かった。適度な改行は絶対に必要である。誤字と表現の誤用も目立つ。

「句歌のあやまち」は、資料を丹念に読み込んで書いていることが窺える。ただ、あまりに文章が分かりづらい。時々揶揄するような文体を折り混ぜるのも気になった。

「沈黙の砦」は、規定の分量に達していなかったため選から外された。文章力の高さには目を瞠るものがあったが、物語の序章だけで打ち切られてしまった印象だった。

「小説家とnovelist」は、流行のライトノベル的な文章・物語だった。ただ、作家志望の女子大生が成功しなかった原因には納得がいかなかった。ライトノベルかどうかは別にして、読みやすく、伝わりやすい文章ほど、文字の量は少なくなるものだと思う。

最後にライトノベルの話が出たので触れておきたい。現在ネット上には数多くの小説投稿サイトが存在する。最大手サイトの登録者数は

一六四万人、作品数は六八万作を超えている（九月二五日現在）。

内容は玉石混交でライトノベルが主流だが、一般小説、短詩系文学、随想、評論等、何でも投稿できる。そしてどのサイトでも、作品に対する読者数や評価点でその作品が点数化されている。いわゆる「底辺作家」から脱するだけでも至難の業で、それはもう残酷なまでに厳しい世界だ。

勇気はあるが、そういう所に自作を上げて、世間の容赦のない批評にさらされるのも勉強の一つだろうと思う（そうになるとキーボード入力が必要となり、「小説家とnovelist」の作者の主張に重なってしまうのだが）。

詩



思うこと、書くこと
の継続を

前田 勉

詩部門の今年の応募作品数は四十編。応募者は十代から八十代までの各年代にわたる。そのうち十代が十二編と最も多く、若い世代の詩の書き手が増えることを願う上で嬉しいことであった。

選考の結果、最優秀賞は昨年に続いて該当なし。各賞は奨励賞三編、入選四編、グリーン賞四編となった。

・奨励賞「星空」

飲み仲間の家へ父を迎えに行く。妻を失った父、母を失った私。蛍のあかりと満天の星を象徴的に表わして、十七才の私が父の哀しみに近づく。時間構成に少し戸惑ったが、表出された抒情性がそれをカバーしている。

・奨励賞「のこりの刻」

高齢の母との時間を、柱時計と砂時計を通して

てうまく描き出している。書き慣れた筆致がうかがわれ、読み手に違和感なく入ってきた。母が「逃げようとする時間を／捕まえるための写真も／もう撮らなくていいと言う」と書くこの詩行は重い。本質が見える。

・奨励賞「何処へ」

「何処へ わからないけれど何処からか／まちがえてきている／ここではない」という、長年自身を振り返るたびに感じてきた幼少時から的心情。そう気づくことで母やその母へと思いを馳せる。落ち着いた作風である。

・入選「三太郎の小径」

東北大学のキャンパス内にあるという、三太郎の小径の情景を描き、哲学者阿部次郎の世界に浸る。強調の意味で使用したとは思いますが、「ゝのような」が並列で続くことに少々違和感を持った。

・入選「心の写真」

作品の内容とタイトルが一致しており、成る程と思った。少年を再び見かけた時、その少年はもう中年であったという時間経過、自分のことは知らないであろうという位置づけ。心の中に記録された映像であり人間味である。

・入選「遠野の風に吹かれて」

導入部に赤トンボを配し、二人はトンボの番いとなって以心伝心の羽をふるわせるといふ表現に巧さを感じる。夫婦の結びつき、妻への思いやりがよく伝わってきた。

・入選「時の中で」

壮大な視座で自らの“生”を捉える。朗々と漢詩を読むかのような作風。「ほんの須臾の命を燃やす」とはなかなか書けない詩行。

・グリーン賞「ほんの一瞬」

「すき」という、この二文字の言葉の持つ意味合いや重さを見つめる。

・グリーン賞「生命^{いのち}」

若々しい視点で生を描く。同じ詩行を各連で繰り返しているのが気になった。別の詩句で言い表してみることも必要か。

・グリーン賞「帰りぎわ」

ひとり自転車で帰るいつもの道。夜道。坂道。夕陽の道。「今日もこの坂を上りきった」感慨が清々しい。

・グリーン賞「ともしび」

人の在り方や生き方、個性、それらを揺れる光、二つと同じ形のないランタンと言いつつ表わすことで、この作品に深みを持たせている。

他に、僅差で残念ながら選からもれた作品で

は、ちょっとシュールな感じのする「紫陽花チーズケーキ」にイメージ展開の面白さと若い感性をみた。また、自分の誕生にまつわる両親の声を引き出し、生を受けたことの意味を問おうとしている「葉月」の実直さが、印象的であった。

選を担当して三年。皆様の作品と出会えたことに感謝申し上げたい。思うこと書くことを向後も継続されるよう願うところである。

詩誌「密造者」、「海市」各同人。県現代詩人協会、日本現代詩人会、日本詩人クラブ各会員。秋田市。



詩を書く
ということ

大八木 敦彦

昨年に引き続き、最優秀賞を出すことができなかった。応募作品数は昨年よりも増えたのだが、読んだ印象は、全体的に弱かった。それは、書き手の「感じる」ことの弱さであり、同

時に表現の弱さである。詩はあらゆる意味で

「感動」がなければ書けない。感動も、深く突き詰めなければ詩には至らず、それは簡単に為し得ることではない。本当に感動する時、人はそこに、もはや自分自身がなくなってしまう、かわりにどこからか言葉があらわれてきて、詩になっている・・・という状態におちいるものだと思う。即ち、真の感動は、それによって自分自身が破壊され解体され消滅させられるところまで行かなければならず、その苦しみは、快感や幸福感よりもはるかに大きい。ゆえに、いわゆる「美しさ」が人に与えるものは何よりも苦しみなのであって、美しさの感動を心地良いものと感じられるうちは、まだ本当の美しさを知るには至っていないと言える。

では、本当の感動を得るには・・・真に美を味わうには、どうすればよいのであろうか。それに答えることは不可能に近いのだが、ただ、一つ言えるのであれば、ひたすら自己をなくそうとすること・・・自分自身を空白にして、言葉が浮かび上がってくるまで耐えること・・・であるうか。書いた言葉が、自分の言葉ではなく、どこからか誰かが自分を動かして書かせたものだという感じがしたら、それは本当の詩と

して成立すると思う。

もう一つ、詩を書く練習として言えるのは、ひたすら読むことである。いつであつたか、さきがけ新聞に作家の西木正明氏が、作家になるためには「とにかく読むことです」と書いておられた。これはつまり、模倣は創造の母、という言い古された真実を別の言葉で表しているのである。詩に限らず、あらゆる文芸、音楽、美術、スポーツや学問に至るまで、創造的活動はすべて模倣の上に成り立っている。模倣とは単に真似ることではない。真の模倣とは、自分が作り上げるものの土台を築くことである。ひたすら読むことで、自分の中に先人の作品が蓄積してゆけば、それは知らず知らずのうちに模倣をおこなう準備をしていることになるのである。

奨励賞の三作品「星空」「のこの刻」「何処へ」には、いずれも書き慣れて安定した筆致が感じられた。むしろ、慣れてしまつて、テーマ自体も必ずしも新鮮なものではなく、そういう意味で強さや魅力に乏しい感じもした。折角、優れた表現力をお持ちになっているのだから、もっと独自のテーマを切り開いて行かれれば素晴らしい作品ができると思う。

入選作の中では「心の写真」が印象に残った。どちらかと言えば散文的な作品であるが、飾り気のない淡々とした描写は、確かに一枚の「写真」のように読み手の心にくっきりとした忘れがたい映像を残す。ただ、題名も含めて、詩としての純度をもっと高めることが課題となるだろう。

グリーン賞の中では「ほんの一瞬」が心に残った。「すき」という、実際、詩にするには最も難しい言葉をテーマにして、透明で純粹な作品を作ることができるのは、若い人に限られるであろう。このように書けるのは人生の中でまさしく「一瞬」であり、その意味で、この一篇は作者にとつて貴重な青春の記念碑になると思われる。尚、選外ではあつたが、「方位磁石の夜」「もう大丈夫」「私は風」の三篇には心ひかれた。いずれもやさしく素直な言葉づかいで書かれ、柔軟な心の動きが感じ取れた。

私自身、齢を重ねるごとに若い人の単純素朴で銜いのない書き方にますます魅かれるようになってきたのは不思議でもあり、また自然でもあるように思われる。私は今期で選考委員を終えるが、今回応募なさった皆様の作品にまた、どこかで出会えることを楽しみにし、皆さまの

ご健筆を心からお祈り申し上げます。

(秋田公立美術大学教授)

堀まらなつみ



堀江 沙オリ

選考を終えても、もやもやとした気持ちがおさまらない。同じレベル、似たタイプの作品が多く、選内と選外の明確な線引きが難しい。選考会議を終えてからやっと自分の評価の意味合いを言語化する事が出来た。思いや考えを伝えるのは非常に難しい。まして、思いを込めて詩をする事の何と難しい事か。それをしようと思った書き手が多数存在した事に、まず感謝している。ただそれでももやもやが晴れる訳ではない。

詩とは何か。明確な答えはない。ただ、自分の作品が「完成」しても、それに満足し切ったら、自分の可能性や伸びしろを自ら失うことになる。

年齢を重ねれば、経験も、年月の蓄積も増え

て行く。何を書くかの「何」の数、つまり題材の選択肢も多くなり、語彙も豊富になって行く。若い人たちは、物理的に経験は少ない。選肢肢を多くする方法の一つは読書量だが、知識を駆使してもなお、何に影響を受けたかを読み手に見抜かれ易い。それでも読む事は間違いなく糧となる。そして若さには、年月に勝るものがある。未経験故に書ける表現、可能性と伸びしろは遥かに多い。いくら若い頃を思い出して書こうとしても、その時の血は流れていない。拙く見える表現でも、どこか「引っ掛かる」一点がある。だから若い人には、とにかく書いて書いて、推敲して、俯瞰して、時には落ち込んで、それでも書き続けて欲しい。

大人にも十分伸びしろはある。経験からのブラインドや思い出、確固たる思想は、詩の光になり得るが、マイナスにも働く。円熟と、書き続けた事実に基づく独自の表現が形をなして来たと思われても、表現の可能性と伸びしろはまだまだ残されている。思いの強さ、忘れられない事、確固たる自負が表現を抑えてしまわない様に推敲を重ねて欲しい。満足せず留まらない事が、詩表現を深めて行くのだから。

基礎的な事だが、日本語の文法に適っている

か、文字や送り仮名の誤りはないか、よく確かめ、書きつ放しにしない。書く事と一対一で向き合う、自省を込めて、改めてそれを思う。作品に仕上げるまでは、まず何でも書きとめ、思うまま書き連ね、それから自分だけの表現にして行く。とことん詩と会話し、闘ってみる、それが次第に楽しくなっていく事に間違いはない。

奨励賞の三作は、偶然にも「死」を扱った大人の作品となった。「星空」冒頭と最終に向かう表現、空でない地の星の視点が光る。中盤を整理するとより良い。「のこりの刻」独自の詩表現と、構成共に優れた作品。書き続けた果実がここに在る。「何処へ」幼時部分の表現と視点が鮮烈。言葉の整理を今一度。

入選。「三太郎の小径」現実から思索への道と言葉のリズム。「心の写真」まさに青年を写した数枚の写真が目につく。「遠野の風に吹かれて」後半に表現は深みを帯びる。「時の中で」独自の観念性と構合力。

グリーン賞は、選考に迷った。何れも清新な息づかいがある。「ほんの一瞬」まさにこの一瞬でなければ書けない作品。「生命」宇宙の瞬きという独自の表現に魅かれる。「帰りざわ」

日常の通学路にも詩は散らばっている。「ともしび」若い感性で描いた「生きる道のり」。

選の内外を問わず、年月を経た表現には危うさや一作品中の落差は比較的少ない。若い一作品中の落差は大きい、逆に光の輝きは強い。繊細な時間表現や、社会問題への視点、絵画性、発見と発想の独自性などが印象に残る。

全体を通して、日本語の可能性を信じ、自分だけの言葉で伝えるという基礎を大切にしたいと思う。実験的手法は必要無い。もう一步の推敲で言葉の光は増すはずだ。固まらず奢らず貪欲に書き続けて欲しいと切に願う。重ねて言うが、表現には決して完成は無いのだから。

(詩誌「左庭」「北五星」所属。土井晩翠賞受賞)

短歌

短歌で表現する

とくこと



加藤 隆 枝

短歌を読むとき、多少の破調は定型に合わせて修復して読もうとする意識が働く。定型あればこそその破調であり、必要不可欠の場合や効果を狙ったこともあり、否定するものではない。しかし、大きく定型を逸脱し、調べを無視したような作品に出会うと、何も短歌である必要はない気がする。短歌で表現するからには、安易な破調は避け、調べを整え、定型を意識することを心がけたい。

最優秀賞「夏」

一首目から、度肝を抜かれるような新鮮な感覚に圧倒される一連。鯨のような雲、ならばありふれた比喩だが、骨格を加えたことでリアリティを増し、引き締まった比喩になっている。初夏から晩夏までを流れる熱い想いが一貫しており、題名も一連の構成もよく考えられて

いる。夏の光を抱きしめているカーテンやアクアブルーの文字からあふれ出す海など、若々しい感覚が具体的に卓越した表現になっている。読点の用い方も効果的。

奨励賞「高尾山の気」

作者の高尾神社参拝へ同行しているような気持ちになる、まとまりのある一連。倒木を跨ぎ越える場面が実感を伴い、参道の刺草や苔むす手水処などの具体的な情景描写が、厳かな空気を醸し出している。

奨励賞「荒びゆく庭に」

思いつきのぎゅぎゅ詰まった屋敷を手放すことになった、作者の感慨の込められた一連。多くの逡巡を経て、今まさに手放さんとして立つ庭への思いと決意のほどまでが、具体的な描写を通してよくまとめられている。

奨励賞「石の階」きざし

石の階七景とでもいうべき、それぞれ異なる石段や石坂などを詠み込んだ七首からなる一連。ともすればばらばらな印象を与えがちになるところを、対象を凝視し、じっくりと詠む姿勢が全体に統一感をもたらしている。

入選「花輪囃子」

花輪ばやしというお祭りのある地域に生きる

作者の熱い思いを感じさせ、祭の熱気の伝わってくる一連。お囃子を特別なものとしてでなく、地域住民に馴染んでいるものとしての感じを出すのなら歌に「」は不要と思う。

入選「息吹」

通り一遍の把握ではなく、自身の体験に根ざした説得力の感じられる一連。観察眼のよく行き届いた四首目は好きな作品だが、三首目の「植え時」は「植えし時」か。

入選「ダリア『なまはげ』」

国際ダリア園を開園した鷺沢氏の業績とスタッフの労苦を詠んだ、ドキュメンタリー映画のような一連。四首目の結句の「止む方」は、仕方がないを意味する「せん方」ではないかと思っ

入選「峡の花」

春から秋にかけての峡の花それぞれを詠み込んだ七首の並ぶ一連は、連としては平板な感じを与えてしまうが、一首一首は魅力的。細部や背景の描写が具体的で、イメージの立ちあがる一首一首になっている。

入選「なあ文隆」

独り言のように展開する一連は、出戸浜海水浴場で旧友へ語りかけている物語のように思え

た。呼びかけてはいるが、相手の気配は感じられず、独特な文体と相まって、心の中で友を思う気持ちがいじみと伝わってくる。

入選「なまはげ」

前半はやや観光案内のようななまはげの紹介詠に思われたが、四首目、六首目は自身にぐっと引きつけて詠まれており、臨場感あふれるものになっている。

グリーン賞「花のように」

若々しい感覚が魅力的。一首目、二首目、四首目からは屈折した思いが感じられ、深みのある作品になっていてよい。七首目には前向きな力強さがある。

（「短歌人」同人。現代歌人協会会員。日本歌人クラブ秋田県幹事。秋田県歌人懇話会常任理事）

選歌 短評



菅原 恵子

最優秀賞「夏」

・五コマ目は自習がよくてカーテンが夏の光を

抱きしめている

ナイーブで若々しい叙情にあふれた作品で口語表現のよさを発揮している。一首一首の漢字とひらがなのバランスを考えて構成していて共感する。

奨励賞1「高尾山の気」

・手に掬ふしみづ咽を滑り落ち一気にめぐる高尾山の気

表現が力強く、高尾山の気が読者にも伝わってくる。歴史ある山の周囲にも観察眼を働かせ、各々に発見や感動がある。

奨励賞2「荒びゆく庭に」

・ふたたびは訪ふことのなきわが家の鍵を手渡し思慕を断ち切る

老いて後継者のいない苦悩と決意するまでの心情を叙情豊かに表現。現代の社会詠でもあり重厚である。

奨励賞3「石の階」

・石坂や道の隈廻を折るるたび心の隈を何かがのぞく

一首一首よく実写され、情景にとどまらず心象描写もみられ優れている。

入選1「花輪囃子」

・「花輪囃子」の音に合わせて五歳児は太鼓に

見立てる座布団たたく

幼子までが囃子に身体が躍り出す。やや観念的な傾向もみられるが、神に魂を捧げて止まない気分に満ち満ちている。

入選2 「息吹」

・田の神と春の息吹に急かされて八十歳が種籾をまく

待ちに待った春の息吹は、自分にとつてもまだまだ仕事が出る思いが伝わる。八十歳の嬉しさが伝わってくる。

入選3 「ダリア「なまはげ」」

・五十度越す夏のハウスの管理こそ秋花耀ういのちとなれり

ダリア「なまはげ」は、ニュースでも賑わったが、全体的に説明的になり易いのが惜しい。自分の気持ちをもっと表現してほしい。

入選4 「峡の花」

・山国に春の始めの辛夷咲き幼の靴も三和土に並ぶ

自然界の花々に急かされ、勇気づけられる幼児、作者、母たち。季節感溢れるなかの作者の幸せな思いが届く。

入選5 「なあ文隆」

・なあ文隆今日の目的は達せられたか出戸浜で

の海水浴は冥途の土産よ

個性が光る一連である。具体的で臨場感に溢れている。作品中の呼びかけも良かった。題名も作品を味わう上で大切に効果があった。

入選6 「なまはげ」

・この家の今年の厄を落としたるなまはげ去りて除夜の鐘聞く

内容が観念的になり易いのを、破ろうとする努力のあとが見える。6・7首のような余情ある作品に共感。

グリーン賞 「花のように」

・いいねって言われて伸ばしたえりあしを切つてさよならあなたのわたし

若い男女の心理を「軽く」表現した分、その奥の気持ち、直に伝わってくる。口語表現も効果がある。

他に「キャンディ曰くバトルロイヤル」も心に残った。「窓際でおひとり プリン・アラ・モード スプーンですくえる形のしあわせ」今後を期待したい。 以上

短歌結社「かりん」同人。「かりん秋田」会誌発行人。現代歌人協会会員。日本歌人クラブ会員。県歌人懇話会理事。

プ会員。県歌人懇話会理事。

選歌寸評



打矢京子

最優秀賞 「夏」

・はつなつの校舎を出れば待ち受けるクジラの骨格みたいな雲だ

自分の感覚を大事にして自分の言葉で一首を詠いきった。大空の雲の様子をクジラの骨格と表現したのは鮮烈である。

・君だけのためにあるんだ七月の光に満ちた渡り廊下は

・八月、とアクアブルーのペンで書いたならそこからあふれだす海

一途な恋心で七月の渡り廊下を捉えた潔さがあり、アクアブルーからあふれだす海に詩が宿る。一連の作品には弾けるような若さとそれゆえの焦燥感もあった。率直な詠み方が際立っていた。

奨励賞 「高尾山の気」

・奥宮に柏手打てば木霊して高尾山山頂に風吹

きわたる

参拝した高尾山の神聖な空気感があますところなく表わされた。ていねいな詠いぶりが臨場感を高め、力量を感じさせた。五首目、連綿とつながれてきた地域の信仰をしのばせ一連を深いものにした。

奨励賞 「荒びゆく庭に」

・雪吊りを学びて樹々を労りし夫の顫ちくる雪折れの木に

雪への備えが出来なかったため折れてしまった庭木に、生前雪吊りをして樹々を大切に守った夫を偲んでいる。庭をとおして家を守り継ぐのが難しい現実がひしひしと伝わる作品群である。

奨励賞 「石の階」
いさだし

・荒削りのままに積まれし石段の奥から今宵鬼は現る

鬼はなまはげを指しているのだろうか。荒々とした石段の写生が鬼の出現にふさわしい。

入選 「花輪囃子」

・「花輪囃子」の音に合わせて五歳児は太鼓に見立てる座布団たたく

「花輪囃子」が人々の生活に深く浸み込んでいる様子。幼児の仕草が何ともほほ笑ましい。

祭とともにこれを活写したのは効果的に思えた。

入選 「息吹」

・年功を積むトラクター黒煙をぼんぼんと吐き田を掘り返す

人生を共にしてきたトラクターへの讃歌。ぼんぼんが生命感を持っている。

入選 「ダリア「なまはげ」」

・五十度越す夏のハウスの管理こそ秋花耀ういのちとなれり

美しく咲くダリアのための努力の要であろう、この視点の数首が全体をひきしめている。

入選 「峡の花」

・山国に春の始めの辛夷咲き幼の靴も三和土に並ぶ

山峡に咲く辛夷の花に寄せ、作者の温かい感性がたちのぼる。

入選 「なあ文隆」

・なあ文隆今日の目的は達せられたか出戸浜での海水浴は冥途の土産よ

語りかけの初句が印象的な一首。答えなき相手を想う心情に貫かれている。

入選 「なまはげ」

・なまはげのとよもす声の遠退くもなお確かめ

き戸の隙間より

なまはげへの畏怖の心が具体的に表白されている点が良い。

※他に「土坂峠」「海外赴任」「母の夕景」などが心に残った。

※グリーン賞 「花のように」屈折した思いを越えた最後の一首に希望が感じられた。

(「運河」同人・日本歌人クラブ会員
秋田県歌人懇話会会員)

俳句

選を終えて



熊谷 尚

今回の審査は、作品のモチーフの良し悪しが評価の分かれ目となった印象がある。
最優秀賞 「山の日」

山の日大きく握る塩むすび

またひとつ山を覚えし登山杖
花の名の謂れ手帳に登山果つ

三年前に施行された祝日の「山の日」をモチーフにした意欲作。一句目。登山に持つて行く塩むすび。「大きく握る」の措辞から、高揚感や期待感が伝わってくる。三角のおむすびが山の形とダブるところも面白かった。三句目。普段見ることのない高山植物との出会いもまた、登山の楽しみの一つである。

奨励賞「太子堂」

うぐひすや堂に開祖の木彫り仏

仁王像の脛の鉦跡木の芽冷

太子堂包む瀬音や露の臺

二句目。着眼点の良さに惹かれる。猛々しい仁王像の脛に残る鉦跡の痛々しさ。「木の芽冷」がよく効いた佳句である。

奨励賞「ジオパークの里」

神宿る峰への使者か御来迎

夏霧や奇形の樞の謎めいて

浮島の太古の池塘秋の声

二〇一六年認定の「鳥海山・飛島ジオパーク」が題材。鳥海山の溶岩が作り出した景観と飛島の歴史を余さず伝える作品となった。

入選「霜月神楽」

霜月の神楽激しき丑の刻

夜を徹しての神事。その優美さと荘厳さ。

入選「薄暮残像―通所介護施設にて―」

昼寝より醒めて老軀へ戻りけり

夢と現のあわいを大らかに詠み上げた。

入選「手術」

告げられし開腹手術梅真白

前向きな心持ち。「梅真白」が効いている。

入選「喃語」

胎の児とくぐる夏越の祓かな

生まれ来る子の千歳の命を祈念する親心。

入選「ふる里の日々」

鳥海山の風余さずに稲熟るる

中七の措辞から実りの秋への感謝が伝わる。

入選「円形のある夏」

円心の孤独に酔へり水馬

モチーフのユニークさが際立つ作品だった。

入選「旅靴」

星涼し旅の荷ひとつ解き置けば

起承転結のある作品構成がよかった。

入選「母の里」

木もれ日や瀬音涼しき子守唄

ふる里の自然は母のようにやさしい。

入選「母の帯」

春寒しきりと結ぶ母の帯

お母様の人となりが想像される。

入選「七月の産声」

七月の吾子の未来を抱き上ぐる

初夏の明るい日差しが見えてくるようだ。

グリーン賞「秋の風景」

赤と黄に山粧うは誰が為

新鮮な切り口の句が多く、好感をもった。

*

審査員を三期務めさせていただいた。超結社の様々な句に触れ、私自身が本当に勉強になった。一句単独で評価される句会などとはまた違い、七句をどう揃えどういう順に配置するか、題をどう付けるか等々、「作品」として成立させるためのひと工夫を惜しまないことが大切だと思う。応募してくださった皆様の益々のご健吟を祈念し、筆を置く。

（「香雨」同人 公益社団法人俳人協会会員）

感動を共有する



岩谷 塵 外

太子堂包む瀬音や露の臺

太子堂の厳肅な雰囲気が的確に捉えられており感動した。どの句も季題が動かない。

奨励賞「ジオパークの里」

神宿る峰への使者か御来迎

夏霧や奇形の樵の謎めいて

浮島の太古の池塘秋の声

「鳥海・飛鳥ジオパーク」の様子が眼に浮かぶようである。ジオパークの奥深さが銜いなく纏められており感銘した。

入選「霜月神楽」

厳かに祓ふ湯加持の神楽殿

霜月神楽の様子が活写されている。

夜を徹して奉納される霜月神楽の崇高な雰囲

気に共感した。

入選「薄暮残像―通所介護施設にて―」

着ぶかれてやつと取り出す体温計

介護施設の様子が伝わってくる。ユーモアありペーソスありの表現に惹かれた。

入選「手術」

仰臥しの吾を里山へ遠郭公

手術前後の様子や心情が纏められている。

それぞれ季題が功を奏しており感心した。

入選「喃語」

麻柄あきだちを裁ち厄除けの浴衣かな

赤児を取り巻く家族の様子が微笑ましい。愛情溢れる句群である。

入選「ふる里の日々」

鳥海山の風余さずに稲熟るる

大きな句柄と平明で的確な表現に惹かれた。

入選「円形のある夏」

街灯の円の幻想夏の霧

「円形」に執着した句材の切り方が面白く斬新である。

入選「旅鞆」

餡蜜のまるまるしかく崩れけり

旅の雰囲気が伝わってくる。句にリズムがあり共感した。

入選「母の里」

雉子走る一羽は母の袖柄

母の里への愛情が感じられる。掲句の「母の袖柄」の表現は手柄である。

入選「母の帯」

春寒しきりと結ぶ母の帯

どの句も素直に纏められている。掲句の「きりと結ぶ」の措辞に惹かれた。

入選「七月の産声」

産声の旺んな夏を押し開く

「座の文芸」である俳句は句意が読者に伝わらなければ成り立たない。そのためには先ず表現が単純・平明であることが大切である。その上で作者の感動が読者の琴線に触れ、共感を得られるものでなければならぬ。

このことを念頭に置いて選に当たった。

最優秀賞「山の日」

黄のリボンつけて一列登山道

汗伝ふ首筋撫でて山の風

ひと時の息継ぎ誘ふ清水かな

花の名の謂れ手帳に登山果つ
清々しい句群である。句の骨法がしっかりしている。表現が平明で感動を共有できる。

なお、句中の「山の日」は季題としては未成熟で、まだ歳時記に掲載されていないことに留意する必要がある。

奨励賞「太子堂」

太子堂の軋む大戸や竹の秋

遠野火や上目遣ひの天の邪鬼

赤児誕生の様子や家族の喜び・赤児の未来への期待が溢れており感動した。

グリーン賞「秋の風景」

烏鳴き手繋ぎ帰る秋の夕

満月に「兎」と笑う稚児かな

狭い傘肩を濡らすは秋時雨

どの句もメルヘンチックで若さに溢れており感心した。青春の今でなければ作れない句群である。青春時代でなければ作れない俳句をどんどん作っていただきたい。「継続は力」を信じ、更なる研鑽と活躍を期待する。

秋田県俳句懇話会会長・公益社団法人日本伝統俳句協会会員・同東北支部事務局長・俳誌「ホトトギス」同人・同東北同人会会長・公益社団法人俳人協会会員・俳誌「百鳥」同人・秋田市住



知性と感性の 相克と調和

和田 仁

俳句の本義を究めることは、実に至難の業。

根底に、知性と感性の豊饒が求められる一

方、その表現は、極度に知性主義あるいは叙情主義への傾斜は許されず、寡黙な一行詩として、抑制の利いたクールな具象効果が求められる。

この詩的葛藤こそ、頑強な俳人魂を造り上げていると言えるようだ。

しかし、難しいことは扱置き、先ず気負わず果敢に挑戦してみることも俳句上達の要諦の一つかも知れぬ。

最優秀賞「山の日」

- ・ 山の日の大きく握る塩むすび
- ・ またひとつ山を覚えし登山杖
- ・ ひと時の息継ぎ誘ふ清水かな
- ・ 花の名の謂れ手帳に登山果つ

テーマに添い、巧みに目配りの利いた起承転結を展開。一方、季語の隘路も指摘された。

しかし、力量のある作家であり、卓越した作品であることに変わりはない。

奨励賞「太子堂」

- ・ うぐひすや堂に開祖の木彫り仏
- ・ 遠野火や上目遣ひの天の邪鬼
- ・ 奉納の千の折り鶴春の色

具象に徹し、対象を印象的に捉えている。

風趣にゆとりも見られ、遠い過去の幻想世界へと誘う。

奨励賞「ジオパークの里」

- ・ 岩に湧く霊水修験の滝となり
- ・ 有耶無耶の関の難所や懸巢啼く
- ・ 浮島の太古の池塘秋の声

人間と自然との営為、共存の絆を慈眼を持って緬く。安定、且つ雑味の無い簡潔描写が見事。

入選「霜月神楽」

- ・ 神楽終へ保呂羽の里の朝ぼらけ

悠久の根源的魂魄、産土の何たるかを詩趣をもって表出。神なすも修羅なすもルーツは人間の性と。

入選「薄暮残像―通所介護施設にて―」

- ・ 着ぶくれてやつと取り出す体温計

独自の詩性と俳句技術を駆使。人間模様をヒューマンに洒脱に描出。

入選「手術」

- ・ 新緑の大地踏み締め退院す

生涯、好奇心と希望を捨てず生命の何たるかを探求。

入選「喃語」

- ・ 一物を誉めたつぷりと天花粉

このゆとりと酒脱。一見、天真爛漫にして繊細。

入選「ふる里の日々」

・ふる里の目覚めは早し遠郭公

愛郷無比！ 近頃、里を捨てる者が多いと言
うのに。

入選「円形のある夏」

・大鯉のあざとふ波の浮き葉かな

大方、写生に徹し、ときに耽美にアートの知
的にモダンに。

入選「旅鞆」

・星涼し旅の荷ひとつ解き置けば

句調は概ねメランコリー。豊饒なロマンチシ
ズム・美意識が汪溢。

入選「母の里」

・木もれ日や瀬音涼しき子守唄

情感ゆたかに里の生活を活写。天性の清新な
詩心も見事に披露。

入選「母の帯」

・春寒しきりと結ぶ母の帯

どこことなく祈りに似た一連の調べ。リリシズ
ムが魅力。

入選「七月の産声」

・七夕や産声待てどそれつきり

酒脱にして歓喜に満ちた句群。生命への神対
応に喝采。

グリーン賞「秋の風景」

・満月に「兎」と笑う稚児かな

グリーン賞対象作品の中で、有季定型が担保
され、且つ、簡潔明快な一連として採らせて頂
いた。今後の更なる飛躍に期待。

秋田県国際俳句協会会長

秋田県現代俳句協会副会長

国際俳句交流協会会員・天為同人

川柳



川柳に
ユーモアを

小松 隆 義

一〇〇分の一秒の差異までも数値で計測する
スポーツと違い文芸作品の評価は読者、選者の
感性や価値観に負うところが大きいので時折多
少の差が生ずることは否めません。

応募四十七作品（三二九句）の中から選考委
員三者が事前審査で上位にランクした作品を中
心に慎重かつ厳正に審議を重ねました。

前回にも触れましたが、この「あきたの文
芸」は一般的な大会や句会と異なり単作での競
吟ではなく七句を一作品と見做す企画でありま
す。従って句群の中で一句だけ秀句があったと
しても七句全体の評価が高くなければ上位入選
とはならないし、逆に六句のレベルが高くても
一句の駄句によって全体の評価が下がることに
もなります。

今年は例年にも増して粒揃いの作品が多く選
考に苦慮致しました。

一部に漢字や用語の誤用と思われる句も見受
けられましたが、誤字や脱字はほとんど見られ
ませんでした。川柳本来の要素の一つに「滑稽」
も挙げられていますが、残念ながら今回は滑
稽味のある作品はありませんでした。そこは
かかないユーモアは人心に潤いをもたらしま
す。是非挑戦して欲しいと思います。

最優秀賞「心の軌跡」

・マックスで荒野を駆ける鬼となる
・ひと山を越えて大きな虹を得る
・わたくしを丸ごと呑んで陽が沈む

些か具体性に欠けるくらいはあるが、心象句

の特徴でもある。スケールの大きな視点で自らの心に内蔵する思いを詠んだ。「荒野を駆ける鬼」は複雑に入り組んだ現代社会を全力（マックス）で切り開いて行こうとの自身の姿を鬼に擬した。

奨励賞「兄弟愛」

・誇るもの兄弟愛という血筋
・座布団の枕も義姉の思いやり
墓参りの盆帰省。実家を継いだ兄弟夫婦のおもてなしに接しての感謝が各句に満ちている。滞在中のやすらぎとドラマが感じられる。

奨励賞「太陽と月」

・夕風がキラキラ妻になりました
・藁婚へいのちの音が響き合う
新婚気分がまだ抜け切らない二年目の新妻の作とお見受けした。既に子宝にも恵まれ幸福を満喫している。

奨励賞「親と子」

・おつかあが女神さまだと末息子
・辛いとき泣いてほしいと思う親
母と子の親近感が如実に伝わる句群。平易な作風ながら「報告句」となる一歩手前で止まっている所がよい。

入選「ひとりって…」

・ひとりって自由だけれど転べない
女の独り暮らしの侘しさを恬淡と詠み上げて陰湿さを感じられない。束縛されるわずらわしさがない分気楽だが、起こしてくれる人がいないから迂闊に転べない。

入選「メルヘンの世界」

・破顔一笑 小さな福が舞い降りる
母と子あるいは祖母と孫が童話でメルヘンの世界へ嵌っている情景で微笑ましいが七句目はやや観念的に流れた感がある。

入選「残照」

・もう少し待ってよ熟れている途中
黄昏期にさしかかった自身の哀愁を残照に準えたが、六句・七句のやや文芸性に欠ける措辞が惜しまれる。

入選「わたくしの道」

・わたくしの道を見つけてハイタツチ
自分の生き方を俯瞰視している。「ネジ一個」の隠喩を三・四句目に連続させたところに作品の構成上若干の工夫が欲しかった。

川柳ウイング吟社主幹

秋田県川柳懇話会副会長



事象の裏側に
視点を！

長谷川 酔 月

例年のことながら、応募作品は日常の近辺から取材したものが多く、生活実感が主流であった。こうした作品は概して、その場での直感や感慨に留まってしまい、常套語の使用が多くなりやすいと言える。事象の裏側にもしっかりと視点を当てて、深みのある作品に仕上げることが大切である。

さて、選考に当たっては例年どおり選者三名の合点で順位を決定した。上位はすんなり決まったものの、入選にはかなりのばらつきが見られた。これは選者の好みの違いもあるが、それ以上に作品が拮抗していたと言ったことが出来よう。

審査基準として、文芸性を競う場である以上は、誤字や脱字、禁止用語等の入ったものは論外とした他、類想句や暗号句の有無、文芸的には疑問の多い破調句等について厳正にチェックを行った。その上で、新鮮味があり、人の心を惹きつける作品であるか否かが重要なポイント

となった。

最優秀賞 心の軌跡

- ・ときめきを街で拾ってまだ男
- ・マックスで荒野を駆ける鬼となる
- ・ひと山を越えて大きな虹を得る
- ・わたくしを丸ごと呑んで陽が沈む

三名の選者が上位に推した作品で安定感は抜群である。具象と抽象を程よく織り交ぜた一連の作品群がいい雰囲気醸し出している。よく推敲されており、余韻の広がりと共に説得力をもって迫ってくる。円熟味ある男性作者を思わせる。

奨励賞 兄弟愛

- ・だだちゃ豆ああ故郷の色がある
- ・世の波に揉まれほんとの愛を知り
- ・誇るもの兄弟愛という血筋

兄弟に対する愛を詠んでいるが、その底流には切々とした望郷への思いがある。全体的に落ち着いた作風で、具象句中心の作品群は魅力たっぷりである。

奨励賞 太陽と月

- ・恋は不意 南瓜畑の真ん中で
- ・夕風がキラキラ妻になりました
- ・日溜りで光る産着もイクメンも

ポエムが程よく織り込まれた一連のさわやかな作品は、読む者に心地よく沁み込んでくる。よく研究し推敲されており、感性ある女性作家を思わせる。

奨励賞 親と子

- ・ふりむけば笑顔がみえるそんな位置
- ・かけねなく愛している子どもたち
- ・辛いとき泣いてほしいと思う親

親子のよくある情景を題材にして、奇を衒うことなく自然体で詠んでいる。全体に新鮮さが感じられる作風であり、鋭い新進の女性作家を思わせる。

入選 ひとりって：

- ・わたくしの魂だろか雲は北
- ・ひとりって自由だけれど転べない
- ・どの花も笑いこけてる雨上がり

日常の事象を題材に、説得力ある作品群からは、ベテラン作家を思わせる。丁寧に配置された句群であり、一連のストーリーが浮かんでくるようだ。

入選 メルヘンの世界

- ・切なさをまあるく包む騎士の手
- ・メルヘンの世界に翔んで蝶になる
- ・俯瞰して視てきた過去の生き証人

親と子の情景を平易なタッチで詠んでいる。惜しむらくは、1句から3句目までは同じような内容なので、若干変化をつけたいところである。

入選 残照

- ・持久走ですな人生なあ夕日
- ・もう少し待ってよ熟れている途中
- ・欲を捨てやっと自分の絵が書ける

老境を詠みながらも説得力ある作品群であり、円熟の境地にある作者を思わせる。特に1句目は思いが込められていて、作者の息づかいが感じられる。

入選 わたくしの道

- ・白旗を上げてしまった抱き人形
- ・時々脇道を行く反逆児
- ・わたくしの道を見つけてハイタッチ

全体的に素朴な表現ながらも、新鮮な着想が魅力的な作品群である。今後の伸びしろが期待される作家とみた。

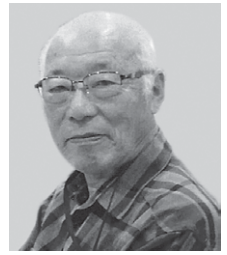
秋田県川柳懇話会会長

(一社) 全日本川柳協会理事

川柳銀の笛吟社主幹

秋田市八橋住

品位と推敲



高橋 三鳩枝

折角の応募作品が推敲不足、初歩的なことで濁点や半濁点の不備で選外になる作品は今回も見受けた。漢字、字面、構成、には細心の注意を求めたい。

最優秀賞はすんなりであったが、奨励賞の順位には時間を費やす。

最優秀賞 心の軌跡

ときめきを街で拾ってまだ男
マックスで荒野を駆ける鬼となる

風紋の心の軌跡繰り返す

未来図へ生きる明日を温める

評 一句目の下句 まだ男 にはどつき

り、驚かすには少し強すぎた感じがしないでもないが、三句目になるとこのあたりからが題名なのかと納得。緩やかなリズム感は何りの巧さを覗かせる。

奨励賞 兄弟愛

母の画にふたりの兄と妹と
誇るもの兄弟愛という血筋

父の歳越えて逝こうと酒交わす

評 肉親の絆はこう有りたいとの想い、高齢になると兄弟だけが頼りになるその願いを感じさせる。

奨励賞 太陽と月

恋は不意 南瓜畑の真ん中で

太陽をやさしく抱く満の月

薬婚へいのちの音が響き合う

評 伴侶への愛情が溢れる作品と思われるが、すべての句にある滑らかな響きはベテランの作家の作品である。

奨励賞 親と子

わかつてる何も云わないその心
思いきり生きてほしいと願う母

いつの日かお別れの日がやってくる

評 子を思う親の愛は際限がなく必然的に

母親が主となる、題名からして仕方がないが斬新さと広がりがあった。

入選 ひとりって：

小綺麗な母で在りたい薄化粧
ひとりって自由だけれど転べない

入選 メルヘンの世界

親と子と至福の時に浸る夜
メルヘンの世界に翔んで蝶になる

入選 残照

持久走ですぬ人生な夕日
燃えるのだ凌霄花そそのかす
入選 わたくしの道

白旗を上げてしまった抱き人形

時々脇道を行く叛逆児

選考委員に共通したのは入選に値しない作品が十数編あったことは残念なことであり、川柳に対しての考え方と姿勢を変えてほしい、狂句のたぐいと認識されるならば問題外である。現代川柳は品格を無視しては成り立たない。各地には句座があり仲間になって雰囲気を感じ取りたい。

連句のあり方については選者の考え方が異なることから一概には言えないが全ての句には緊張感、まとまりがあり詩であってほしい。

再びですが比喩揶揄の露骨は作品が散漫になり、読む人の心に違和感を与え飽きられる。

つぎに、作品に対しての題名は力を抜いた広がり、落ち着く美しさも必要だ。

擬人化された作品もあったが、すべてがそうであれば見方を変えただけで説明の作品になってしまう滑稽が露骨に晒される恐れもある、同

じ様に題名そのものが上句になると同じことと言えよう。入選とならなかったが、慕う夫婦川 歩こうよ 海をめざして が話題となった、次回に期待したい。

秋田県川柳懇話会副会長

川柳花清水代表

川柳葱坊主主宰

エッセイ



選を終えて

野口 千恵子

今年度は二十一篇を読ませてもらいました。数として寂しかったのですが、量より質かなと期待いたしました。

しかし、文芸のジャンルとしての「エッセイ」として、もう一步進められたら……と心残りの作品が多くありました。全体的に物語性に欠け、記録や考証または意見文風などが多くみ

られ、読み手が感動や連想を得ることが出来なかったからです。

でも、どの作品も心を込めて綴ったのですから、選者としてはおろそかに出来ません。例年の選考次第に従って「内容、構成、表現、表記」の四点に点をつけて選びました。

「プリンセスの王冠」

紙製の王冠にまつわる家族の歴史を描いた温かな作品。ストーリー性があり豊かな内容で表現もよく、テーマを最後まで継続した構成も成功しています。特に文中の教師としての楽しい発想は文の展開として魅力的です。教師のご経験なので、表記も見事で、最終章の母上との会話も生きていいですね。

「ゆきしんしん」

題の詩的な雰囲気と違い、作者の俳句修業の足跡を書いています。内容構成もよく、語句に説得力があります。過去に感動した「ゆきしんしん」の俳句のこと、その作者への思いが文を引き締めています。整った作品でした。

「ねえ、サンフラワー」

全体を通して、瑞々しい爽やかさのある作品でした。ヒマワリの花一点に絞った記述なのに、叙景や作者の心理もよく表現されて、それ

が花を通じて自らの成長を確かめるような記述もすぐれ、作品として香気があります。若い作者のようで、今後も頑張ってください。

その他の心に残った作品を記します。

「つばめとさとう家の人々」は、再度の出稿で楽しく読みました。つばめたちの描写、農業に携わる作者や周囲の人たちが良く書けていて、読み手に納得させるのに、なぜか感動が伝わらないのは「聞き書き」のような書き方なのかなあと、表現や表記が良い作品なのにと残念でなりません。

「面影橋を渡る」面影橋の連想から、秋田で初めて石油を掘削した千蒲善五郎の評伝となり、油田や難儀だった精製法の説明までに及び、大変興味深く読みました。力作でした。ただ最後の藤田嗣治の「秋田の四季」の壁画が何となく余分に感じました。

「郷愁 『誰か故郷を思わざる』の演奏を聴いて」作者と同席してその場に居るような臨場感がありました。構成、表記も整った手馴れた作品でした。

「待つてるよ。」貨物列車に魅せられている筆者、羽越線周囲の描写もよく書かれています。ただ後半の猫と老女、別れた二人の友人たちと

選考寸評



澤井 範 夫

の説明がじっくり列車と結びつかなくて心残りでした。その他として、山下太郎と作者の係わりを書いた「日本の石油王 山下太郎氏の思い出」や旧荒川鉾山を描いた「在所」「懐かしむ土崎」や「廢鉾の街」の様変わりした阿仁町など、懐かしい古里の人物や風景を書かれた方々は、今書き残しておきたい著者の想いが読み手に伝わってきます。文章の表記などに不足があるとしても価値のある作品でした。「残された時間を有意義に」の作者のファイトに感心しました。

「エッセイ」は短い文章なので、題材をしばって、あれもこれもを加えないこと。テーマをしっかりと構成を考えて、作者の心情を加えて丁寧に書いていくと意外に良い作品となります。老境に近づくと「自分史」を書きたくなりますが、そんな時のために、折々の時期にエッセイを書き残しておき、それを繋げると立派な一冊になると思います。

エッセイを愛する皆さんの、ますますのご精進を念じています。

今回が初めての選考である。初めてということもあり、気を引き締めて事務局から応募作品二十一篇を受け取った。

選考にあたって、私は選考基準を次の二つにした。一つは、書き手の伝えたいことが、読み手の心に響くように書かれているかである。もう一つは、書き手の人間性や人柄が作品全体から滲み出ているかである。

この選考基準に合致したのが入賞した三作品である。選考会議では他の委員と同様になり、この三作品の入賞がスムーズに決まった。

最優秀賞を得た「プリンセスの王冠」は、気取りのない平明な文章で書かれていた。このエッセイのよさは、古いアルバムや教師時代の思い出、認知症の母の姿を通して、過去と現在を一本の線でつなぎながら、目に見えない親子の絆を巧みに描き出したところにある。結末に置かれた温もりのある母の秋田弁は現実のもの哀しさを語っているが、作者の明日へと向かう

姿勢がこの作品を興行きのある明るいものになっている。

奨励賞の「ゆきしんしん」は、俳句の作句を「老後を豊かに過ごすための大切な手段」と考える作者が、自分の俳句の原点が三十五年前のカーラジオで聞いた俳句にあったことに気づく話である。書き出しが映画の一シーンを見るかのようで、読み手を引きつけた。主題、内容、構成、いずれも安定した作品ではあったが、結末の五行は書き過ぎではなかったか。抑えることも必要と思われた。

同じく奨励賞の「ねえ、サンフラワー」は、素材を「ヒマワリ」だけに絞ったみずみずしい感性にあふれた作品だった。作者は高校二年の女子のようだが、少女から大人に成長していく姿を「ヒマワリ」の見方、感じ方を通して描く手法は新鮮だ。この新鮮さがこの作品の持ち味だろう。ただ私は、「垂れ流された感情」のようない言い回しや、「グルグル」を繰り返す手法に違和感を覚えた。私には作者の自己陶醉のよう感じられたからだ。

賞を逸した作品にも一言触れておきたい。

「郷愁 『誰か故郷を思わざる』の演奏を聴いて」は、最初の部分と終わりがうまく呼応し

で感心したが、題の付け方や歌詞の引用に工夫が欲しかった。肝心の母の思い出も思いつくままだに描いている感が否めなかった。

「つばめとさとう家の人々」は、燕を通して人間を語るところに面白みを感じた。一方、作者の体験と他者からの伝聞が入り交じった展開は、読み手と書き手の一体感を妨げた。作者の実感をどう伝えるかが大事である。

「面影橋を渡る」は、書き出しはよかったが、読み進むにつれて油田、石油の歴史の報告に終わっていた。何故このエッセイを書くのかという、作者の思いが希薄だった。

「廃鉱の街」は、読みやすい作品であったが、阿仁町の歴史をなぞっただけの印象が強い。読み手は、作者の人間性を知りたいのである。エッセイではその点の考慮が必要だ。

「待つてるよ。」は、貨物列車を素材にしているところに新味を感じたが、読み手の心をつかむだけのストーリー性に欠けていた。

「旅のひと日」と「よいスタート」は、両者とも作者の一日の旅を報告した作品だった。あれもこれもからの脱却が必要である。

「大学へ行きたい」は、短い文の連なりで大変読みやすかった。が、作者の青春のあらずじ

を読んでいるようで、味気なかった。

最後に、取り上げなかった作品について述べておくと、原稿用紙の使い方に難があったり、誤字、脱字があったりするなど、作文の基礎に欠ける作品が何編も見られた。また、第三者に読んでもらうという意識が薄いためか、頭に残ったことをそのまま書いているような作品もあった。誰かに何かを伝えたい。この一心でエッセイを書くのだろうか、何かを見つけることは当然として、伝える技術も身につけて欲しいと、私は思った。



選評

中尾 信一

今年度の最優秀賞「プリンセスの王冠」は古い写真の印象的な描写から始まる。作者の子ども時代に父が撮った「お誕生会」の写真の中に、王女が被るような王冠を頭にのせた姉の姿を発見するのだ。一枚の写真に閉じ込められた過去の一瞬が、それにまつわる様々な記憶を呼び起こし、時と場所を越えて、いろいろな方

向へと滲み出していく展開が見事だ。手仕事で時間をかけてその王冠を作ってくれた母の苦労への思い。作者自身が教師時代に作った授業用の教材の中に、似たような王冠があったという偶然。父が撮った姉の写真を手掛かりとして、自分と母とのつながりを再確認するプロセスはドラマチックでさえある。今では過去の記憶を失いつつある母親が、その写真を見ながら娘の問いかけに答える最後の言葉は、この作品のクライマックスとなる。母親への淡々とした愛情が、よく練られた構成によって、過不足なく伝わってくる、巧みなエッセイである。

奨励賞の「ゆきしんしん」もまた、記憶にまつわるエピソードがきっかけとなっている。車のラジオで聞いてその後も長い間耳に残り続けている一つの俳句。研ぎ澄まされた聴覚に音声として染みついてしまった様子が、冒頭でその句すべてがひらがな表記されていることでよく伝わってくる。その後、作者は自分が俳句を作るようになった経緯を淡々と語っていく。今回の応募作の中でも、趣味としての俳句を題材としたエッセイはいくつかあったが、自分の経験を思い入れだけでなく、短い文の積み重ねで客観的に説明しようとする態度に好感が持てた。

そして再びあの句との出会いとなる。偶然にすぎないとはわかっていても、この句に再会するために俳句を始める運命だったのかもしれないと思わせるだけの説得力がある。いくつかの点が一つの線としてつながり、伝えたかったことが鮮明に見えてくる。エッセイにとって、エピソードの組立がいかに大切であるかを教えてくれる作品である。

もう一つの奨励賞「ねえ、サンフラワー」は、「みずみずしい」という形容詞が最も相応しい作品である。作者が小学校の時からひまわりに対して抱いていた恐怖感。「化け物」とさえ呼んでむき出しの嫌悪感を示しているにもかかわらず、相手はただひたすら太陽だけを見つめ、こちらの存在には見向きもしないと気づいた時の「悔しさ」。その感情の揺らぎが、どこか懐かしく、また新鮮なのだ。やがて訪れる最後の対決の時。普段の厳かな姿とは異なる影のかかったその姿に「切なさ」を見た途端、その花の魅力に屈服してしまう。その瞬間の感情の反転が、スローモーションの映像として書きとめられている。作者の繊細さが少しも損なわれることなく伝わってくる見事な言葉使用である。しかし、風車に立ち向かうドン・キホー

テのごとく、ひまわりとの対決を終えた後で、「久しぶりに、未来が楽しみになった」とつぶやく高校生の感受性には、こちらが恐怖心を抱くしかない。

残念ながら選には漏れたが、「つばめとさとう家の人々」も魅力的だった。親戚の農家に住みついたつばめのつがいにひなが生まれ、やがて巣離れしていくまでの過程が、その家の人からの伝聞として語られる。彼らが「さとう家の人々」とひらがな表記されることで、具体的な事件が抽象化され、誰の身にも起きそうな普遍性を帯びてくる。冒頭で作者自身の家に巣作りしていたつばめがへびに食べられたというエピソードは、後半への伏線となっていて面白い。つばめの親子たちに向けられた観察の細やかさは、作者の生きものへの深い愛情があつてこそものなのだろう。季節の移り変わりとともに語られるそれらの出来事は、もうそれだけで完結していて、それ以外の人間に関する情報は必要なかったと思わせられた。

あきた県民文化芸術祭2019「あきたの文芸」応募状況

1 部門別（応募作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
元年度	10	40	60	77	47	21	255
30年度	12	36	51	98	47	23	267
29年度	13	52	67	88	55	33	308
28年度	9	32	72	84	57	24	278
27年度	12	32	56	85	44	31	260

2 男女別

	小説・評論		詩		短歌		俳句		川柳		エッセイ		総数	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
元年度	6	4	14	26	26	34	42	35	30	17	13	8	131	124
30年度	7	5	14	22	23	28	57	41	27	20	9	14	137	130
29年度	7	6	15	37	31	36	50	38	37	18	15	18	155	153
28年度	6	3	11	21	35	37	54	30	38	19	12	12	156	122
27年度	5	7	14	18	26	30	46	39	28	16	15	16	134	126

3 年代別

	総数	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	不明
元年度	255	20	4	1	10	23	49	89	55	4	0
30年度	267	10	4	7	8	21	49	91	74	3	0
29年度	308	20	6	7	10	28	52	105	75	5	0
28年度	278	6	7	8	6	11	59	98	72	10	1
27年度	260	13	3	8	7	12	61	96	57	3	0

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代
小説・評論	2	0	0	1	1	3	3	0	0
詩	12	2	1	2	5	7	9	2	0
短歌	2	2	0	3	5	8	17	20	3
俳句	3	0	0	3	7	13	34	16	1
川柳	0	0	0	1	2	11	21	12	0
エッセイ	1	0	0	0	3	7	5	5	0

4 応募の経験（作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
再	6	27	42	64	43	13	195
新	4	13	18	13	4	8	60
計	10	40	60	77	47	21	255

再…以前にも応募したことがある方
 新…今回初めて応募された方

5 月別応募数

6月	7月	8月	計
29	36	190	255

あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名（入選・グリーン賞を除く）

第五十一集 （平成三十年度） 応募二百六十七作品

・詩部門

・短歌部門

・俳句部門

・川柳部門

・エッセイ部門

奨励賞	小林 康子	「馬と満月」
奨励賞	谷 恵美子	「お引き取り願います」
奨励賞	いしざとゆうき	「ティールーム」陶」
最優秀賞	田中 安	「竿燈」
奨励賞	佐藤 榮悦	「青田」
奨励賞	石田 幸栄	「春の面影」
奨励賞	蓬田 真弓	「さよなら、教室」
最優秀賞	石井 美智子	「秋日和」
奨励賞	川尻 弘子	「あゝ、日本海」
奨励賞	舟山 つぐみ	「祈りの園」
奨励賞	山田 草人	「西馬音内盆踊り」
最優秀賞	小畑 寒丈	「ミーアキャット」
奨励賞	菅原 浩洋	「鬼ごっこ」
奨励賞	佐藤 豊	「運動会の想い出」
奨励賞	伊藤 光愁	「斜交いの風」
最優秀賞	坂本 愛子	「すり鉢を悼む歌」
奨励賞	鈴木 護	「クニマスサマ」
奨励賞	後藤 千鶴子	「私にできること」

編集後記

◎令和元年度あきた県民文化芸術祭2019
「あきたの文芸」入賞作品集『あきたの文芸
第五十二集』を刊行しました。

この作品集は、十六歳から九十三歳までの応募作品二百五十五編より、最優秀賞四編、奨励賞十四編、入選二十六編、二十五歳以下の文芸活動を応援するグリーン賞七編、計五十一編を掲載しております。

◎この事業は、あきた県民文化芸術祭2019の一環として実施しております。応募いただいた皆様をはじめ、文芸団体や広報協力をしてくださった各市町村、報道機関、図書館などの文化施設、さらには、事前審査から選考・校正まで多大なる御協力をいただいた選考委員の皆様には深く感謝申し上げます。

◎「あきたの文芸」は、今後より読みやすく親しみやすい郷土を代表する文芸誌として、一層充実させていきたいと思っております。

あきたの文芸第五十二集

あきた県民文化芸術祭2019

「あきたの文芸」入賞作品集

令和元年十一月十二日

発行・編集

秋田県

(観光文化スポーツ部文化振興課

電話 〇一八―八六〇―一五三〇)

共催 一般社団法人秋田県芸術文化協会

秋田県教育委員会

表紙デザイン 山本 丈志

挿絵 深井 富美子

印刷・製本 株式会社三森印刷